258.2
258. 2-101
1200501346613
×複写

始

258·2
101

成田山事業年報

昭和拾貳年度（自昭和十二年四月一日至同十三年三月卅一日）

目次

寫眞

例言

一 總說

挨拶……一頁
成田山貫首　荒木照定

成田山事業概要……五

成田山六和會に就て……八
三橋金太郎

成田山一千年祭を顧みて……九
開基

二 事業狀況
（各事業に關する詳細なる目次は各事業の始めに掲ぐ）

成田中學校……一五頁

成田高等女學校……四三

成田幼稚園……六七

成田學園……八一

成田圖書館……九九

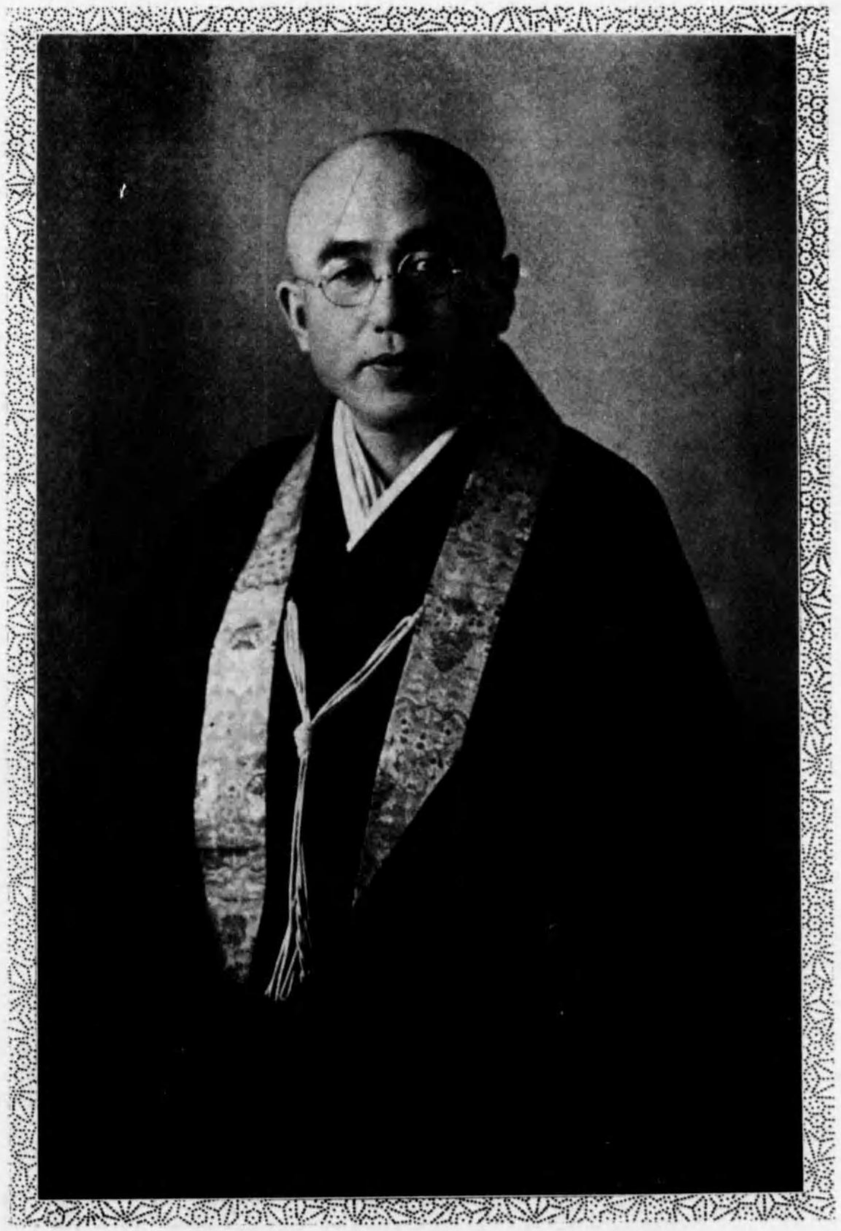
新更會……一二九

（表紙文字＝成田中學校長今澤慈海筆）

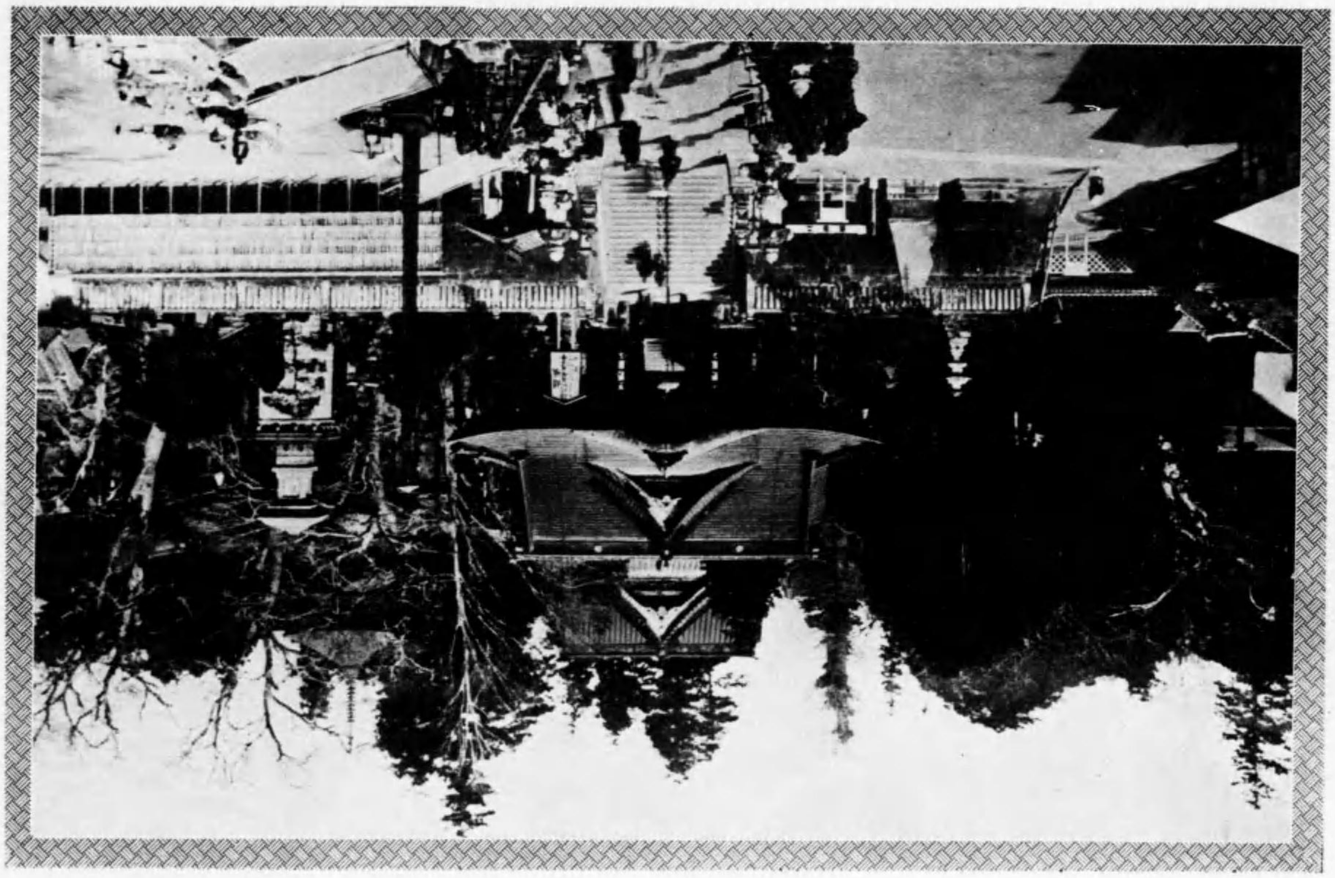
所在地並ニ電話番號

左記新勝寺電話番號ニテ接續（電話成田）

成田中學校	（千葉縣印旛郡成田町成田二十七番地）	二番
成田高等女學校	（同町成田十五番地）	二八番
成田圖書館	（同町成田三百十二番地）	一〇一番
		一〇二番
成田幼稚園	（同町成田六百四十七番地）	（電話成田）五九番
成田學園	（同町成田四百二番地）	（同）一〇三番
新更會	（同町成田一番地）	（同）二三四番



荒木照定猊下



鼻　金　山　田　成

258·2
101

例言

一　本年報は成田山の經營に屬する各事業中に於て、成田山公園を除く以外の教育教化事業たる、成田中學校・成田高等女學校・成田幼稚園・成田學園・成田圖書館・新更會に就いて、昭和十二年度（自昭和十二年四月一日　至同十三年三月三十一日）の狀況を記述したものである。

一　本年報は昭和十三年三月末現在調に依つて編成したものであるが、內、職員並びに生徒等に關する事項は、大體同十三年六月末現在調に依つて記述した。

一　記述に就いては從來より實施し來つた年報の形式・內容を改め、始めに總說の一欄を設けて、こゝに各事業の概要、並びに當該年度共通的主要事項を記載し、次に事業狀況の一欄を設けてこゝに各事業の當該年度に於ける狀況を列記した。

一　目次は一樣に之を設けた。卽ち全體的一覽の目次に就いては、其の主題を列記して之を卷頭に揭げ、次に各事業に關する詳細なる目次は、之を各事業の始めに揭げたのであるが、該目次に就いては各事業を通じて可成連絡統一を保つやうに記した。

一　更に各事業を總括し、其の狀況を一目瞭然たらしむる爲め、各事業の始めに昭和十二年度狀況一覽表を添附した。

一　記述の資料は勿論各事業主任者より報告されたものに據つたのであるが、編輯の都合上編者に於て若干取捨、選擇又は增補した箇所もあり、又「成田山史」を參考とした處も多いのである。

一

總

說

挨拶

成田山貫首　荒木照定

一國國運の隆昌を圖る爲めには、學術・法律・政治・經濟・産業・國防等各般に亙る充實改良に俟たざるべからざることは、今更多言を要しないことであるが、其の何れの分野に於ても根幹は人の問題であり、國民素質の向上といふことに歸着する。而して此の國民素質の向上は結局するところ眞の教育の普及徹底といふことになる。即ち教育は人を人たらしめるものであると共に、又社會を社會たらしめるものであり、特に國家を眞に永遠の生命ある國家たらしめるものである。

眞の教育は一面人類社會の普遍原理に立脚すると共に、他面各國家存立の理想を標目とするものである。從つて我國教育の指針は、肇國の精神を體得せしめ、

祖國日本の臣民としての根本態度を培ふにある。教育に關する勅語の首に、皇祖皇宗肇國の宏遠、樹德の深厚と、臣民の忠孝、億兆一心を說き給ひ、此の國體の精華を以て教育の淵源なりと仰せ給へるは、實に此の教育の根本義を最も明かに宣文し給へるものである。されば明治以來時の政府が此の聖旨を奉體し、不斷の努力を拂つてこれが充實徹底に意を用ひてゐるのは、これ全く國民の教育が國家存亡の岐れるところであり、國家の歷史的生命を永遠ならしめる道が教育を措てこれなきことを示すものである。

然しながら此の教育の大業は、もとより國民の充分なる理解と協力に俟なければ到底其の眞の徹底普及を期し得ないのであつて、國民の自覺の高まるにつれて、世界何れの國に於ても、先覺者は率先私學を設けて其の不足を補ひ、其の普及に協力してゐるのである。當山亦深くここに鑑みるところあり、明治初年以來淨財を淨所に投じて、地方子弟を中心とする各層各種の教育教化施設を爲し、逐年其の充實改善に微力を注ぎ、現在、中學校・高等女學校・圖書館・學園・新更會・幼稚園の六事業を經營し、地方文化の開發と、國運の進展とに力めて居る次第である。

今や支那事變を繞る未曾有の難局に直面して、國民精神總動員の標幟は津々浦浦に至るまで騰翻し、物心兩面に亙る舊來の陋習混迷は日新に更正打開の道を辿り、確固たる國民的信念と全生活力との綜合による擧國一致の實行態勢を示し來れることは實に慶賀に堪へないところであるが、我々は此の非常時に於て、如上の信念と活力との總合によつて銃後の護りを固むると共に、更に次に來るべきものゝ爲めに備へ、これを導きこれを育成するといふ二重の大任務を擔ふものであることを忘れてはならない。此の點に於て當山六事業の使命と責務とは從來に比して層一層重且つ大であるのである。

此の非常大轉換期に於て、恰も相約したるが如く、當山開基一千年を迎へて記

念大祭を奉修し、皇恩祖恩の廣大に酬い奉ると共に、當山開創の根本使命たる鎭護國家の法幢を高揚し、時局に對應して强敵の調伏、障碍の排除に、御本尊明王の靈驗の顯著を讃仰するは實に不思議な緣由であると轉感慨を深めるものである。これと同時に、此の千載一遇の大祭を契機として益々本分を盡して世人の信嚮を喚起し、更に當山諸事業の充實改善に邁進したいと念願するものである。乃ち大祭と前後して新に「六和會」を組織し、中學校乃至幼稚園諸教育事業の相互關係連絡に一層の緊密を加へ、彼此和衷協力以て其の各の使命の達成を促進し、新日本の建設と東亞永遠の和平に力强き役割を果し、眞に報國の實を擧げたいと祈念するものである。冀くは各事業關係諸氏、此の眞意と責務とを確と心肝に銘して倍々奮勵努力せられんことを。今こゝに當山六事業年報新修に際し一言を卷頭に寄す。

昭和十三年十月

成田山事業概要

成田山の事業は、始め中學校・高等女學校・幼稚園・學園圖書館の五事業であつたが、昭和三年六月に至り、新更會が創設され、同十月には公園が生れ、玆に從來の五事業は七事業となつた。

由來成田山は、歷代の貫首進取思想に富み、公共の精神に厚く、一方明王の靈德を四海に光被して、國家の鎭護、人心淨化の宗教的使命に努められて來たと共に、他方莫大の淨財を公共の爲めに投ぜられ、夙に幾多の教育事業並びに社會事業を起し、既に五事業に關しては、大なる實績を擧げてゐるのであるが、更に進んで二事業を加へ、ますますこれが成果を收めつゝあるのである。今各事業の概要を示せば次の通りである。

一　成田中學校　本校は舊成田英漢義塾の昇格である。明治二十年、前々貫首故三池僧正には、夙に此の地に中等教育機關の缺乏を慨かれて、英漢義塾なるものを設立したが、明治三十一年時の貫首故石川僧正は其の組織に改善を加へ、英漢義塾を廢し、成田中學校設置を文部大臣に申請して、其の認可を得たのである。

本校の教育方針は、一に教育勅語の聖旨を奉戴し、特に實踐要目として剛毅・禮讓・報恩・規律を重んじ、勤勉にして勞作を厭はない習慣と、實力の養成とに努めてゐる。設置以來四拾年、卒業生數千三百四十三名に達し、現在生三百七十四名を算してゐる。施設多き中に、特に生徒用圖書室備附の學科綜合檢索カード（目下準備中）の如きは、他に類例を見ない施設である。

二　成田高等女學校　同校は中學校の設立に對し、女子中等教育機關の必要を痛感された結果、明治四十四年二月前貫首故石川僧正時代に設置されたものである。

教育方針は、教育勅語の趣旨を奉戴し、飽くまでも其の實行を期し、學業を勵み淑德を修め、女子の本分を盡すこと、卽ち實用的才藝に秀でた良妻賢母たるの人格を完成することを目的としてゐるものである。

如上の趣旨に基き、正科の外、隨意科として手藝・挿花・茶の湯・按摩を課し、體操科に薙刀を加へ、形式を通じて武士道的精神を體得せしめようと努めてゐる。現在生徒數二百十六名。

三　成田幼稚園　幼兒保育の教育機關として、明治三十八年設置されたもので、我國では最古のものに屬してゐる。現在

園兒數百二十八名。保育課目は、唱歌・遊嬉・手藝・談話・觀察等、年齡に應じて適當にこれを課してゐる。特に保育方面以外、衛生・體育・運動方面には最も注意を拂つてゐる。

四　成田學園　不遇なる少年の感化教護を目的として、明治十九年一月千葉縣下各宗合同發企の下に、千葉町に創設された千葉感化院の後身である。明治二十一年四月成田山の經營に移管され、其の後四十一年三月千葉町より現地に移轉、成田山感化院と改稱、昭和三年三月成田學園と改稱したが、成田山へ移管以來、三池・石川・荒木の三貫首、相踵いで鋭意事業の發展に努められ、大正十三年よりは少年審判所の委託する少年の收容にも從ひ、以て今日に至つてゐる。現在生二十二名修了生二百三十八名、創立以來五十二年を經過し、斯種の社會事業としては最古のものに屬してゐる。

教育の方針は、教育勅語の趣旨を奉戴し、信仰を中心として、學科の教授並びに訓育に當つてゐるが、其の團欒的、家庭的な教育は本園の特徴である。

五　成田圖書館　明治三十四年一月前貫首故石川僧正の設置されたもので、現在藏書數拾壹萬五千七百餘冊、殊に藏書中佛教雜誌の如きは、明治後半期より蒐集したもので、其の數頗る多く、專門學徒に裨益するところが尠くない。

特種の施設としては、參籠堂文庫・家庭配本・貸出並びに團體文庫・展覽會・讀書奬勵に關する印刷物等がある。閲覽者は每日平均百九十人四分。

六　新更會　我國は維新以來時勢の推移に伴ひ、國民的思想に動搖を來し、動もすれば其の嚮ふ所を誤らんとするので、現貫首荒木僧正玆に見る所あり、時弊を匡救し、人心の不安を除去して健全なる國民精神を作興せんが爲めに、昭和三年六月創設された成人教育の機關である。

其の施設としては講演會・講習會・夏季大學講座・展覽會其の他一般の成人教育・社會教育を實施してゐるが、更に青少年の教育機關として、修業一箇年の新更學院がある。現在生徒數四十七名。

七　成田山公園　前貫首故石川僧正在職二十五年記念として大正七年五月起工、前後十一年を費して昭和三年十月現貫首荒木僧正に至つて竣工した、總面積四萬六千九百八拾八坪を有する現代的の公園である。

從來當山五事業の名は、廣く世に知られてゐたが、それは主に教育關係の事業であつた。然るに公園は全くこれと趣を異にし、現代の焦燥に、日夜疲勞を感ずる人々の爲めに、家族相携へて此の靈園に悠遊し、以て積日の塵垢を洗ひ、休養慰安をなさしめようとする目的のもので、社會政策上に於ける一つの施設である。

以上は七事業の概要であるが、現貫首荒木僧正にはよく前貫首の後を繼承し、更に時勢の推移に着眼して新事業を起し各事業に對して多大の努力を注がれてゐるので、其の成績何れも顯著である。

成田山六和會に就て

六和會相談役　三橋金太郎

成田山新勝寺が鎭護國家の道場として、天下の名刹であることは、何人も異議なく肯首するところであります。しかし如何に名山大刹であつても、住持に其人を得なければ其の使命の眞の實現は望まれません。幸にも新勝寺は過去一千年間各の時代にそれ〴〵好適な名僧碩德が出られまして、各時代に卽應する施設を爲され、かくして今日の隆盛を致したものであります。今私共がよく承知致して居りまする近代の歷史に就て申しましても、常に淨財を淨所に投ぜられて、地方文化の向上と社會福祉の增進とに努められて居ります。中にも教育又は社會事業に就きましては、特に大なる關心を持たれ範を天下に垂れるの意氣と熱情とを示して居られます。卽ち曩に故三池僧正は英漢義塾を興して地方子弟の中等教育機關に充てられ、又社會事業として感化院の經營に協力盡瘁されましたことは今尙ほ記憶に新なところであります。次で故石川僧正は、前記英漢義塾を改めて中學校に昇格し、感化院を名實共に成田山の一手經營に移され、更に高等女學校、幼稚園及び圖書館を設けられて、地方各層の教養機關を整へ、所謂成田山五事業の完成を見るに至つたのでありますが、現貫首猊下には、社會教育の振興改善等の爲めに滿三ヶ年に亙つて歐米各國のそれ等を視察研究致され、御歸朝後、成人教育の必要を認められ「新更會」を新設されまして、逐年其の施設を擴充振興され、玆にこれを先師の御遺業に加へて六大事業を經營されてゐるのであります。申すまでもなく、これ等六事業は何れも皆新勝寺の經營に屬して居りますとはいへ、事業の生立、歷史の關係上、動もすれば個々獨立の觀があり從つて其の間に眞の統制と有機的組織を缺く恐れがないでもなかつたのであります。こゝに深く慮るところがあられまして、猊下には、この度の御開基一千年祭を好機として、新に「六和會」なるものを組織せられ、これ等諸事業の經營萬端を名實共新勝寺の統制下に纒められることになつたのであります。右につきまして左記のやうな規則を制定せられ、これによつて六事業の內容の充實は勿論、相互連絡融和の圓滿なる統制下に各事業それ〴〵獨自の使命達成進展を圖られんとするものであります。卽ち「六和會」なる會名も猊下御躬ら命名なされたものでありまして、事大小となく其の眞の發達は和を以て最先とするといふ聖德太子の御思召を强調されました次第であります。こゝに我々は新に生れました六和會の

名を辱しめず、眞の實を結ぶことに邁進を誓ひますると同時に、六事業關係の諸君に於かれましても、この御趣旨を體して眞に協力一致以て各自の本分を盡されんことを念願やまない次第であります。

成田山六和會規則

第一條　本會ハ成田山新勝寺ノ經營ニ係ル左記六事業ノ統一進展ヲ計ルヲ以テ目的トス

一、成田中學校　一、成田高等女學校
一、成田圖書館　一、成田幼稚園
一、成田學園　一、成田山新更會

第二條　本會ヲ成田山六和會ト稱ス

第三條　本會ノ事務所ヲ新勝寺內ニ置ク

第四條　本會ハ六事業代表者並ニ特別關係者ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、會長　一名
一、副會長　一名
一、相談役　二名
一、委員　五名
一、臨時委員　六名
一、幹事　一名
一、書記　若干名

第六條　役員ノ選任

一、會長ハ成田山貫首之レニ當リ會務ヲ總攬ス
一、副會長ハ成田山執事トシ會長ヲ補佐シ會長不在ナル時ハ其任ニ當ル
一、相談役ハ會長ノ囑託ニヨリ其ノ諮問ニ應ジ會議ニ參加スルモノトス
一、委員ハ成田山檀徒總代人トシ臨時委員ハ六事業代表者ヲ以テ之ニ充テ六事業經營ニ關シ協議ニ與ルモノトス
一、幹事ハ會長之レヲ任命シ會長ノ命ヲ受ケ其ノ事務ヲ處理ス
一、書記ハ會議ニ際シ其ノ事務ヲ掌ル

第七條　本會ハ年二回總會ヲ催シ六事業代表者ヨリ豫算決算並ニ經營ニ關スル經過報告ヲ聽取スルモノトス

第八條　本會ハ毎月一回例會ヲ開ク

第九條　凡テ重要ナル事項ハ總裁之ヲ決ス

以上

成田山開基

一千年祭を顧みて

本編は成田山に於て、昭和十三年三月二十八日より同年五月二十八日まで奉修された同山開基一千年祭中、同大祭の記錄を司つた成田圖書館本橋清氏が、同年七月發行の「新更」雜誌に掲載した其の狀況の全文（但し同氏に於て一部訂正）であるが、該大祭の狀況並びに大祭と各事業側との關係の一斑を知るに便ずる爲め、玆に之を轉載することゝした。

豪華絢爛の大繪卷を展開し、法燈の下、全國數百萬信徒の隨喜參拜と、全山、全町を擧げての奉仕裡に、法悅感激の坩堝と化した當山開基一千年祭御開帳は、春風駘蕩として櫻花將に綻びんとする三月二十八日の開白御練り行列・同大法會を開幕として、四月二十八日には中回向御練り行列、同大法會を奉修され、此の前後に亙りて十四回の特殊大法會は營まれ、新綠滴る五月二十八日の結願御練り行列・同大法會を閉幕として、此の輝かしき大祭は最後の御帳を下ろされたが、更に此の期間中諸行事として、國民精神總動員講演會・靈寶展覽會・布敎傳道・御詠歌奉詠・奉納餘興演藝等を開催して、本大祭の趣旨を一層高調されたのである。幸にして期間中は氣候も好く天氣にも惠まれたので、人出も多く殷賑を極め、諸法會は申すに及ばず、諸行事までも豫期以上の結果を收められたことは、寔に慶賀祝福に堪へない所である。

申す迄もなく本大祭は、鎭護國家の使命を根本とする當山の報恩感謝に基く一大法會であつて、開基以來靈德儼然寺運隆隆たる一千年の歷史を有する御本尊に對しての、敬仰奉讚の一大供養であつたことは勿論であるが、尙ほ特に感激を深くする所以のものは、本大祭が圖らずも支那事變に直面し、擧國一致此の難局を打開するに努むるの秋、玆に此の大法會が嚴修されると云ふことになつた一事であるが、是れは事柄に於て大小の差はあつても、當山開基寬朝大僧正が天慶の亂に際して、朝敵調伏の大祈願を込められた其の當時の狀況に彿乎として似た所があり、偶然といふよりも寧ろ必然的にめぐり合はせた神秘靈妙の異瑞であるかと考へさせられるのである。

是に於てか當山に於ては、開山以來の使命達成に着眼され本大祭奉修の行事は、之を現下の非常時局に對處すべく立案され、期間中行はるゝ大法會は主として皇軍の武運長久・國威宣揚の祈願を目的とせられ、又國民精神總動員の標幟を揭げて、之が運動の强調に當るべく實施され、又町內の裝飾、戶毎に飾る軒提灯を始め、境內アーチ其の他のこまごまに至るまで、武運長久、國威宣揚、國民精神總動員の標語を明記强調して時局の認識を深める事に努めたが、更に此の期間中本大祭の記念として、陸海軍兩省に對して戰鬪機各々一機づ

つを献納され、終始一貫報國の赤誠を棒げ、時艱克服、國威宣揚に、寄與することを主眼とされたのである。

期間中の人出

從つて本大祭は多方面より絶大の關心を以て迎へられ、期間中の人出は頗る多く、一般信徒は勿論、出征將兵家族・遺家族・軍部關係・官廳關係・宗派關係其の他各階各層各職業に亙りて、其の總數は凡そ百八萬九千五百十六人（これには乘物利用者と徒歩登山者の概數を含めてある）一日平均凡そ一萬七千五百七十三人と云ふ大數を示し、豪華な大祭そのものゝ狀況を如實に現はしてゐる。今登山者の內譯を示して見れば、省線に依る登山者は三十二萬一千八百四十五人、一日平均五千百九十一人、京成電車に依る登山者は、四十萬八千九百十三人、一日平均六千五百九十五人、其の他は自動車、乘合バス又は徒歩で登山されたものであるが、此の期間中に登山された大型自動車は凡そ三千三百十六臺（これは各方面から登山の自動車について調査、以下同じ）一日平均凡そ五十三臺、小型自動車は凡そ千八百五十臺、一日平均凡そ二十九臺といふ數であり、又各方面から集る乘合バスの如きも臨時を運轉し、何時も鈴なりの滿員といふ狀態であつた。此の自動車並びに乘合バス利用者と、當町內及び四隣町村よりの徒歩者數を合すれば、其の總數は凡そ三十五萬八千七百五十八人、一日平均凡そ五千七百八十六人となつてゐる。

又期間中に來賓として登山された方は、多數に上つてゐるが、其の中でも最も主なるものを擧げて見ると、文部大臣代理稻田宗務課長・宗教局長松尾長造・侯爵大隈信常・伯爵堀田正恒・千葉縣知事多久安信・警察部長田中省吾・總務部長上田誠一・文學博士白鳥庫吉・同高楠順次郎・貴族院議員森平兵衛・衆議院議員今井健彥・同宇賀四郎・檢事正德井治之助・東京帝大教授宮本照尊・檢事金澤次郎・東京女高師校長下村壽一・帝國圖書館長松本喜一・大橋圖書館長坪谷善四郎高島米峰・加藤咄堂・千葉刑務所長安東福男・山田博士・神奈川縣師範學校長佐藤禮云其の他數十名（來賓氏名は順序不同、敬稱略以下同じ）。軍部關係にては、前上海方面最高指揮官陸軍大將松井石根・松井陸軍中將夫人・陸軍中將國司伍七同井上一次・西原陸軍少將・陸軍新聞班長原守・鄉軍第一師管聯合支部長湯淺陸軍少將・陸軍少將堀吉彥・佐倉步兵聯隊長長友大佐・陸軍步兵學校教官岡本大佐・陸軍新聞班松井大佐・海軍中佐前田直・小松中佐・野中中佐・篠原少佐・石井少佐・飯田少佐・榎本千葉聯隊區司令官・遠藤中佐・忍足中佐・高岡中佐・大友中佐外十數名である。

宗派關係にては、管長齋藤隆現僧正・前々管長武藤範秀僧正・前管長旭純榮僧正・川崎大師高橋隆超僧正外數十名。

更に右登山者中事務局內團參部扱に依る團體總數は、千三百五十四團體、一日平均二十二團體、其の人員は十六萬二千三十六人、一日平均二千六百十三人となつてゐる。

而して是等の登山者は、每日省線並びに京成驛より、絡驛として長蛇の如く、蜿蜒十數町に亙つて絶え間なく、狹き街衢の本通りは往き來の人波で恰も織るが如く混雜したが、警察方面の取締で、交通事故は殆ど起らなかつたやうである。

開白・中回向・結願

御開帳中の呼び物は何といつても、稚兒行列の加はつた三大御練り行列であつて、此の時の人出は實に容易のものではなかつた。開白御練り行列は、三月二十八日であつたが、此の日は朝來春雨蕭々として、一日中止まなかつたが、四月二十八日の中回向、五月二十八日の結願日は申分なき日本晴れで、何れも凡そ八萬の人出があり、これは本大祭の最高記錄である。

御練り行列は、三回共大體同じで、何れも午前十時を期し集會所當町論田（開白は阿利耶橋畔より、中回向・結願は成田鐵道會議所より）より進發された。此の日數多の職衆は、直綴七條に威儀を正し、各々伊達傘（朱傘）に擁せられ、伶人十弟子、靑侍、其の他の面々は、朱衣七條に端然颯爽たる大導師御貫首猊下の輦臺を中心として肅々と歩を運び、省線驛前よりは、奉讃會長及び顧問・檀徒總代・宗內耆宿・講社町長・町名譽職・四隣町村長・十善講代表・其の他來賓參加し、町內途中よりは何れも艶麗典雅、見るからに愛らしき五百の稚子加はり、是れより國威宣揚・武運長久の錦旗を先頭として古風に則る山伏の法螺、箏々たる篳篥の奏樂と共に、街路の兩側山なす觀覽人の間を縫ふが如く、蜿蜒長蛇の大繪卷を繰り展げて、緩やかに然かも嚴かにお練りを進め、午前十一時四十分山門着、此處にて對向法要の儀を行ひ、十二時頃奏樂裡に本堂着。大法會は成田中學校並びに成田高等女學校生徒の奉讃歌合唱後、嚠喨たる奏樂、鎧々たる鐘鼓の合圖によつて御帳は靜かに開かれ、次いで眞言秘密の最高典禮たる、二箇法要付大護摩奉修、此の間奠供・祭文・表白・唄匿・散華付對・揚唱禮・前讃・調聲・後讃・回向の儀を行ひ、次に御貫首猊下の祈願文より、來賓の祝辭朗讀・祝電披露があり、最後に執事小島僧正の謝辭・奉讃歌の合唱ありて午後一時半閉式、奏樂裡に一同還列に就かれたが、此の日の參拜者は、成田中學校・成田高等女學校・成田小學校・成田幼稚園・成田學園・新更學院・成田清聚學院・成田青年學校・成田實科高等女學校及び隣村各學校の職員生徒、並びに當町內外各種團體、其の他一般信徒で、道路の兩側は十重二十重の人垣、人家は二階三階までも人で埋まり、殊にホテル前や、本堂內外は身動きならぬ大滿溢を呈し、其の盛況は迚も筆舌に盡す

ことが出來なかつた。

特殊大法會

次に特殊大法會であるが、これは六十二日間に十四回行はれてゐる。即ち四月三日には寶祚長遠國體鞏固大祈禱會を本堂に於て行ひ、其の翌四日小島執事には宮内省に出頭、御札を献上されたことは、本大祭中特筆すべき一事である。四月十二日には派祖興教大師報恩講を大師堂に於て行ひ、四月十五日には皇軍健勝國威發揚大祈禱會を本堂に於て行ひ、同二十一日には宗祖弘法大師正御影供を大師堂に於て行ひ、同二十三日には出征將兵武運長久大祈禱會を本堂に於て行ひ、同二十九日には仁王護國大祈禱會を本堂に於て行つたが、此の日は天長の佳辰に當るので、聖壽萬歳・國運隆昌を祈願し奉り、全山擧げて奉祝の意を表した。五月一日には皇軍健勝國威發揚大祈禱會を本堂に於て行ひ、五月五日には出征將兵武運長久大祈禱會を本堂に於て行ひ、同八日には午前中當山鎭守法樂會を鎭守堂（清瀧權現）に於て、午後三時より釋尊降誕會を大師堂に於て行ひ、同十二日には草木も眠ると云ふ朝まだき午前二時頃夜の帳の靜けさを破つて、開山寛朝大僧正御厨子假遷座式を開山堂に於て、午後三時よりは同所にて報恩大法會を行つたが、此の日は不思議にも午後四時頃より、一天俄かにかき曇りて大雷雨となり、閃光强烈遂に境内に落雷を見、中天を震撼したが、該法要將に終らんとする午後四時には、カラリと晴れて片雲なく、一同其の異常な奇瑞に驚歎されたのである。同十七日には千葉聯隊區司令部と合同主催にて、支那事變戰死病歿者追悼大法會を新更會館西側太子堂建設敷地前の大テント張式場に於て行つたが、此の日特筆すべき事項は、午前十一時五十分より前上海方面派遣軍最高指揮官陸軍大將松井石根閣下が出席されて弔祭文を朗讀された後、此處に居並ぶ遺家族並びに關係者に對して心からなる涙の挨拶を陳べられたので、一同は非常に感激し、嗚咽歔欷する者さへ多かつた。又式場千葉縣知事・千葉聯隊區司令官の弔祭文朗讀・陸軍總長宮殿下・陸海軍大臣其の他の弔電披露後燒香等も行はれ、感激場面の一大法會であつた。同二十一日には歴代先師追恩大法會を光明堂に於て行ひ、當町七十歳以上の敬老會をも併せて開かれたが、三百八名の老翁老媼は何れも此の盛儀に參列して感涙に咽んだ。

以上の大法會は一、二を除き何れも御練り行列が伴はれたので、參列者以外に山なす多數の觀覽者もあり、頗る盛大であつた。

諸行事

次に諸行事として實施されたものに就いて概述すれば、國民精神總動員講演會は、左記の通り七回に亘り、新更會館

樓上に於て開催された。聽講者は何時も成田中學校並に成田高等女學校職員生徒と其の他一般で、凡そ六、七百名。毎回秋山宣傳部長の開會の辭・宮城遙拜・奉讃歌合唱・講演・奉讃歌合唱といふ順序で催されたが、講演は何れも有益で、該運動の高調に多大の效果があつた。

第一回　四月九日(土)午後一時より
革新原理としての日本精神　中央教化聯盟理事　高島米峰氏
非常時と國民精神總動員　文部省宗教局長　松尾長造氏

第二回　四月十六日(土)午後一時より
堅忍持久と大和の精神　智山專門學校教授　高神覺昇氏
時局と思想戰　内閣情報部書記官　西村直巳氏
支那事變の實戰談　陸軍歩兵學校教官陸軍大佐　岡本保之氏

第三回　四月二十三日(土)午後一時より
精神作興の要諦　東京女子高等師範學校長　下村壽一氏
成田山不動明王の本誓　智山專門學校長　高井觀海氏
時局と國民の覺悟　陸軍新聞班陸軍歩兵大佐　松井眞二氏

第四回　四月二十九日(土)午後一時より
支那事變と帝國海軍　海軍中佐　前田直氏
最近の思想犯罪に就て　東京刑事地方裁判所長　鬼頭豊隆氏

第五回　五月七日(土)午後一時より
現下時局に處する道　明星中學校長　兒玉九十氏

第六回　五月十四日(土)午後一時より
國家總動員の要諦　企畫院書記官　内田源兵衛氏

第七回　七月二十一日(土)午後一時より

靈寶展覽會は、第一會場（新更會館）・第二會場（圖書館）・第三會場（高女校）の三ケ所に開設され、第一會場には、能面・刀劍・軸物・繪馬等、第二會場には、書畫・錦繪等・第三會場には、緣起物語模型人形等を出陳されたが、入場觀覽者總數六十二萬七千七百四十二人、一日平均一萬百二十四人、第一會場には一日平均五千九百七十八人、第二會場には同千九百七十八人、第三會場には同二千百五十一人と云ふ入場者があつた。

布教傳道は第一會場（水行場前）・第二會場（本坊前休憩所）・第三會場（新更會館前）の三ケ所に設けられ、各所より集れる本派布教師十有五名が、雨天を除く外連日に亘つて熱心布教講演に從事され、其の聽講者は總數七萬九千三百三十人、

一日平均千四百四十四人といふ多數に上つてゐる。

御詠歌奉詠は、藥師堂に於て開催、成田山遍照講員外全國各流團體の競詠を行ひ、併せて一千年祭奉讃御詠歌の放送も行はれた。

奉納餘興演藝は、成田町協讃會主催で、公園内二の池のほとり兒童遊園地に開設、九重演藝部演出の萬歳・狂言・奇術落語其の他があり、又時々成田藝妓の手踊や、青年團の鄕土演藝等も行はれ、觀覽人に多大の慰安を與へられた。

放送は、毎日行はれた。即ち事務局内一隅の放送室より、マイクロホンを通じて、一般登山者に參拜其の他案内、レコード演奏・ラヂオ中繼・時報・迷子・遺失品の知らせ、其の他に就いて放送し、多大の便益を與へられた。

奉仕團

最後に特筆すべきことは、各團體の奉仕である。即ち成田町協贊會にては、町内の裝飾、煙花の打揚げ、奉納餘興演藝等を實施して、奉祝の意を表され、成田參光協會にては、成田町協贊會と協力して、各方面の斡旋に當られた外、煙花の打揚げ、懸賞スナツプ寫眞の募集・奉納縣下詩吟大會を開催され、又成田町青年團にては、毎日二十名づゝの團員出動して、交通整理に當り、成田町消防組には毎日徹宵警備の任に當り、愛國婦人會・國防婦人會成田町分會にては、毎日十數名づゝの會員出場して、登山者接待の任に當り、新更會にては、毎日支部員七十名、學院生徒六十五名づつを出して、受付、接待其の他に從事された。尙ほ成田中學校・成田高等女學校生徒には、境内の清掃其の他に當り、成田學園生徒は山内の手傳をなし、成田町醫師團にては、臨時救護所を境内並びに町内各所に設置して、登山者の醫療救護に當られた等、是等の方々の勞は沒すべからざるものがあつた。

以上は該大祭に對する狀況の概要であるが、要するに此の盛況は恐らく全國に類例を見ない所であらう。斯くの如き成果を得たと云ふことは、偏に御本尊明王の御威德の光被であらせらるゝことは勿論であるが、更に御貫首猊下の御高風と、主腦部各役員方の熱誠に加へて、奉讃會・軍部・官廳・宗派其他の翼贊支援を背景として、全山打つて一丸となり、不屈不休汗だくの奮鬪を續けられた賜物と考へられる。而して其の結果は時局奉仕への意義深き第一歩を印して、然かも其の貢獻は頗る大に、傳承の美風は是に由つて頓に更張され、法燈に永く此の榮えある輝きを留めることゝなつた。

二　事業狀況

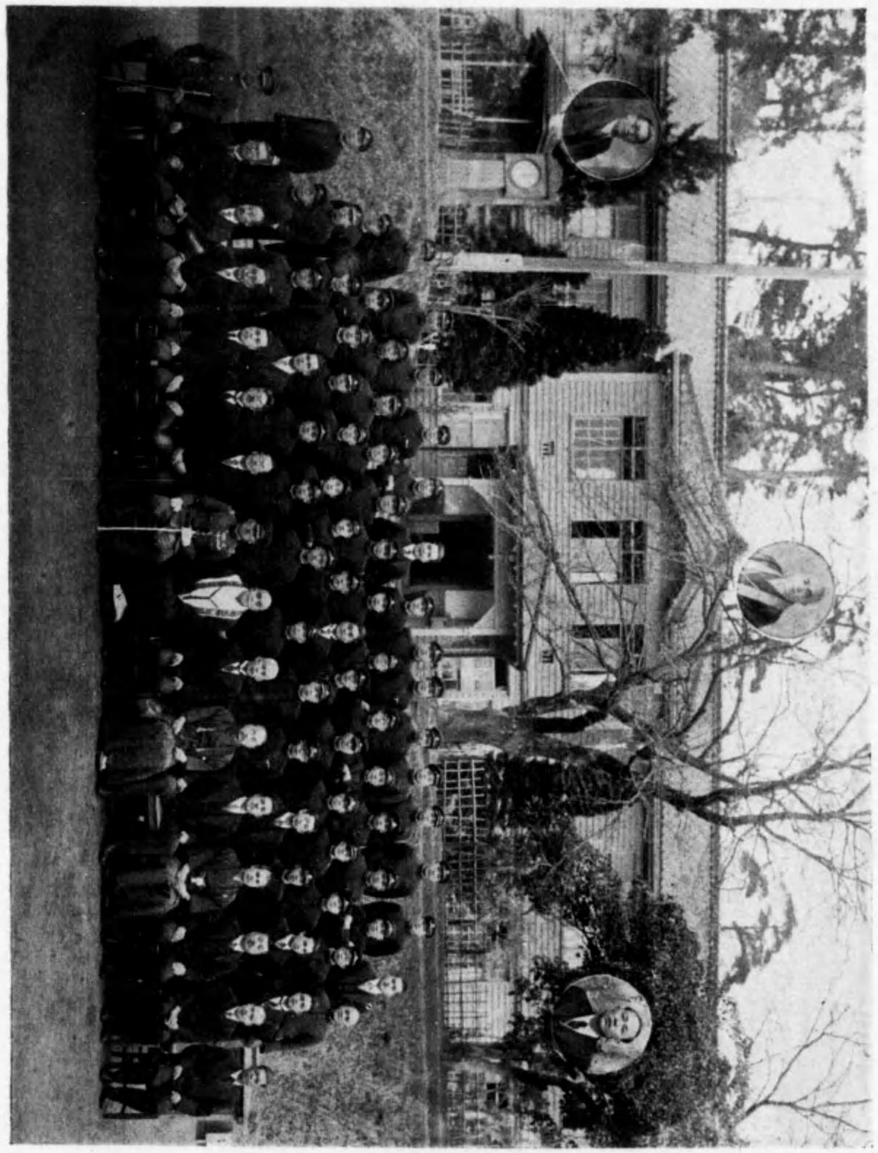
成田中學校

寫眞
成田中學校々歌
昭和十二年度成田中學校一覽

目次

第壹　位置及び沿革……一頁
一　位置……一頁
二　沿革……一頁
第貳　設備及び施設……一八
一　設備……一八
二　學校經營及び教育方針……一九
三　學校則……一九
四　昭和十二年度行事概要……二三
五　一般的施設……二四
六　時局關聯施設……二九
第參　生徒狀況……二九
一　年度別卒業生數……二九
二　本年度(第三十七回)卒業生氏名……三〇
三　上級學校入學者調……三三
四　卒業生卒業後の狀況調……三三
五　過年度卒業生數……三三
六　各學年別及び生徒氏名……三四
七　卒業生生年別及び生徒總數……三九
第四　歷代校主・顧問・主事・校長……四〇
第五　職員……四一
第六　經費……四三

成田中學校



生業卒回十十三第（業卒月三年三十和昭）

成田中學校々歌

尾上八郎作歌
小松耕輔作曲

（一）東の海の夜あけて　うねりよる思想の怒濤
大八洲岸をとよもす　さめよさめよ成邸の健兒

（二）靈域は不落のとりで　御すがたは降魔の守
葉牡丹の校旗のもとに　つどへつどへ成邸の健兒

（三）勤勉と克己と慈悲と　忠勇と剛毅と素朴
楯となし劒となして　立てよ立てよ成邸の健兒

（四）すさまじき主義のたゝかひ　おそろしき智識のいくさ
國のため勝利の冠　とれよとれよ成邸の健兒

（第十八回卒業生寄贈）

昭和十二年度 成田中學校一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田二十七番地、成田山新勝寺境内ノ東部成田山公園櫻山ノ丘腹（電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接續）

沿革

本校ハ成田山ノ經營ニ屬スル教育事業ニシテ英漢義塾ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ

英漢義塾時代
- 明治二十年十月創立、前々貫首故三池僧正塾主トナリ、同二十一年一月開校、同二十七年塾主示寂、同年六月前貫首故石川僧正其ノ後ヲ承ケテ塾主トナル、同三十一年廢止、此間塾長交迭四名、卒業生ヲ出スコト九回四十八名、外ニ選科履修生六名
- 明治三十一年十月設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナリ、同年十一月開校、

成田中學校時代
- 明治三十三年徵兵令第十三條ノ特典ヲ受ク、同年校舍新築落成、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナリ、同時ニ名譽校長ニ推戴セラル、創立以來卒業生ヲ出スコト三十七回、校長ノ交迭十三名

設備

校地 三、五〇〇坪、校舍ハ木造二階建（講堂ハ鐵筋コンクリート造）ニシテ普通教室一〇・特別教室八・講堂・校長室・職員室・事務室其他ノ各室アリ、之ニ附屬建物ヲ合シテ其ノ坪數八九〇坪

方針

中學校令ニ據リ中等教育ヲ施シテ國家有用ノ材ヲ育成シ、日本人トシテ恥シカラヌ立派ナル人間ヲ作ルコトヲ主眼トス

教育施設

教授

- 各學年教授ニ校則ニ據ル
- 學習施設
  - 課外教授
    - 上級學校入學特別指導
    - 劣等生特別指導
  - 各教科綜合カード作成
  - 修學旅行

訓練

- 要目ニ剛毅・禮讓・報恩・規律・勤勉
- 施設
  - 朝禮・不動尊並神社參拜・先師靈墓參・謝恩會・奉仕作業

連絡・監督

- 父兄會（家庭トノ連絡）
- 校外監督・家庭訪問

校友會

- 本部ニ會務總轄・會議・施設立案
- 學藝部
  - 學術部ニ毎月「成丘の光」發行
  - 藝術部ニ圖畫・手工等ノ指導
  - 製作
  - 圖書部ニ圖書室ニテ圖書閲覽
- 體育部
  - 種類ニ劍道部・柔道部・庭球部・野球部・競技部
  - 事業ニ指導練習・競技・運動會・武道・寒稽古・剛健旅行・水泳

校務

- 教務ニ校務整理ニ會議ニ施設立案
- 事務ニ庶務・會計

施設

- 訓話・揭示
- 不動尊並ビニ埴生神社參拜
- 香取神宮參拜祈願（皇軍必勝武運長久祈願）
- （同）
- 防空防火講話・同演習
- 佐倉陸軍病院慰問
- 國民精神總動員强行徒歩
- 故山内高女教諭ノ出征歡送
- 國民精神總動員講話聽講十二回（成田山開基一千年祭主催）
- 出征將兵ノ歡送迎
- 故山内高女教諭其他戰死者ノ町葬ニ參列燒香
- 故山内高女教諭ノ慰靈祭ニ參列
- 出征家族ノ慰問並ビニ幇助
- 本縣主催中等學校總動員ニ參加
- 「成丘の光」ニ皇運慰問號ヲ戰線ニ配布

生徒狀況

卒業生總數	學級數	生徒數	入學者	卒業者	年度内卒業者	卒業後ノ狀況
一、三四三	一〇	三七四（昭和十三年六月末現在）	八九	五二	一八	上級學校入學者
					二一	職業從事者
					一三	其ノ他

校主	名譽校長	顧問	校長	職員	經費
成田山貫首大僧正	荒木熙定	文學博士	白鳥庫吉	今澤慈海	三〇	昭和十二年度決算額 四一、九四八・八五円

成田中學校

第壹　位置並びに沿革

一　位置

成田中學校は、成田町成田二十七番地に在り、東南部は成田町の一部に面し、西は成田高等女學校に接し、北には成田山公園櫻山の勝地を控へ、一望開豁、遠く田園を見渡す閑靜な丘腹に位置してゐる。

二　沿革

本校は明治三十一年十月七日、其の前身である成田英漢義塾を廢止して、新に成田中學校を設置、其の筋の認可を得て開校したものであつて、成田圖書館・成田高等女學校・成田幼稚園・成田學園・新更會と共に成田山の經營に係る教育事業の一に屬してゐる。今其の沿革の大要を示せば次の通りである。

英漢義塾時代

現成田中學校の前身である英漢義塾は、明治二十年十月三日當時の住職故三池僧正が地方中等教育機關の缺乏を嘆き、故石川甚兵衞氏（正英翁）・故諸岡勝太郎氏（先代）等と謀つて創立、成田區成田字東谷の地、卽ち現圖書館敷地の下に校舍を建て、翌二十一年一月五日開校式を擧げた中等程度の學塾で、修業年限三ケ年、高等小學校卒業以上及びそれと同等以上の學力あるものを收容した。

而して開校と同時に、最初の塾長に宮村三多氏を迎へ、明治二十三年第壹回の卒業生を出し、相次いで第九回に及ぶ。其の間別に選科履修生を出すこと貳回。然るに明治三十一年十月七日成田尋常中學校設置と共に、同塾は廢止されたが、創設後實に拾有壹年の星霜を經、多數有爲の士を輩出してゐる。此の間塾長の交迭は、宮村三多氏・濱田義雄氏・福山龜太郎氏・和田玉一氏の四名であつた。

同塾に關して當時の事情を知る爲め、當町三橋金太郎氏が成田中學校三十年記念式に述べられた「回顧三十年」の一節を次に掲ぐることとする。

三橋金太郎氏「回顧三十年」の一節

英漢義塾――それは故石川甚兵衛（正英翁）と故諸岡勝太郎（先代）兩氏が、その當時の有志として、まだ汽車もない不便な頃であつたにも拘はらず、四方知名の政客と交り、時々名士を招聘して、政談又は學術の演說會を開いたり、或は國會の請願をしたり、或は教育の普及發達を圖つたりする爲めに、心力を傾注されたのであります。それが因となつてやがて實果を結んだものゝ一つが、即ち英漢義塾であるのです。當時成田山住職は三池照鳳師でありました。さて三池師に於かれましては、石川、諸岡兩氏から申出でられました學校設立のことは、別段異議なく御快諾になられまして、明治二十一年に之を實現されたのであります。學科は英漢數を骨子とし、當時千葉中學校及び師範學校の教職に居られた宮村三多氏を招聘して、塾長と致しました。ところが此の宮村氏は資性謹嚴で、而も稀世の雄辯家でありました。さて英漢義塾と命名して今の圖書館の下に建てられましたのが、間口十三間、奥行四間半の二階建で、これは後に中學校の寄宿舍になりましたが、實は其の當時校舍として使用したのであります。一體英漢義塾といふ校名は、その頃印旛郡久住村土室と申す所に、小倉良則と云ふ漢學の先生がありまして、五六年前から自分の家を塾に使用し、英漢義塾と名づけ、英語の教師と數學の教師を賴み、なほ自ら漢文や擊劍などを教へて、私塾を經營されてゐたのであります。ところで此の小倉先生と云ふ方は、まことに器量拔群で、其の爲め郡民に推されて縣會議員となり、次いで縣會議長、衆議院議員などにもなられました。從つて家の方は自然とお留守勝ちになりますところから、遂に塾を閉づるの止むなきに立ち至りました。たま〳〵成田に學校が創設されることを聞き、かねて交友の間柄であつた石川、諸岡兩氏に會見し「英漢義塾の名を遺したいからその名を繼いで呉れるやうに」と懇請されましたので、兩氏は其の希望を容れ、ここに英漢義塾と命名されたのであります。

然る所、宮村先生は滿三年にならないで鄕里へ歸られることになりました。それは國會に打つて出る爲めの準備であつた。果して衆議院議員に當選し、議政壇上の人となられました。

宮村塾長去つて後任に來られた方が濱田義雄氏で、私共は濱田塾長の時代に卒業致しました。濱田先生の後任は福田龜太郎氏でありました。

此の方は島根の人で、同縣人和田玉一、同木村鋭市の兩氏、それから理科に後藤敬三氏等を聘しまして、着々内容の改善に力められました。此の當時の學生は、今日地方樞要の地位を占めて居られませう。福山氏は現在行政裁判所の許定官、木村氏は亞細亞局長を經て公使になつて居られます。兎に角義塾も漸く學校らしくなりました。福山、木村兩氏去つて和田氏が塾長となられましたが、至つて熱心な方でした。然しどういふものか、學校の實績が餘り振はないので、一時は廢校論なども出た程です。恰も其の頃です。貫首三池僧正猊下が遷化せられまして、石川照勤師が其後を承けられ貫首となられました。私は廢校論に對して石川僧正猊下に建白書を捧呈したことがあります。それは單に廢校の不可

なるを論じた許りでなく、最早教育の必要と云ふことが、誰言ふとなく地方にも擡き出した折からであり、かたがた是非共學校を維持していただきたいと云ふことを懇願したのであります。猊下も亦聊かの御異議がございません。たゞ當時は官學だけが尊ばれて、私學は更に顧みられぬと云ふ世の中の有樣でありましたから、「義塾を改めて尋常中學校にしたい」と云ふことを切望したのであります。何故と云ふに、尋常中學校の卒業者でなければ高等の學校に進む道が無く、又徴兵猶豫の特典が與へられません。しかもこれが一般の歡迎するところであつたのです。折から石川僧正猊下には時代の趨勢を洞察せられ、御自身としても「若し現狀のままで推移するならば到底呉下の阿蒙に甘んじなければなるまい。それでは成田町の前途をどうしよう」と、玆に奮然志を決して歐米漫遊を發表せられました。これを聞いて誰一人として驚愕しないものはありませんでした。固より種々の議論もありましたさうですが、遂に内議も一決して御出發になられました。

（昭和三年二月編、成田中學校々友會誌第二十三號同校三十年記念號より）

成田中學校時代

英漢義塾が成田中學校と改稱されるまでの經緯は、大體上述の如くであるが、其の後の模樣を「成田中學校沿革史」其の他によつて記せば、

明治三十一年八月十三日少僧正峯川（後服部と改姓）照和師は當時在歐中の塾主石川僧正の命を受け、英漢義塾を廢して中學校を設置しようとする件に就いて、其の筋へ稟請し、同年十月七日を以て認可された。

かくして同年十一月舊英漢義塾を現在の理化教室裏に移轉し、喜田貞吉氏を聘して初代の校長とし、十一月一日から中學校としての授業を開始した。しかし當時の生徒數は一年級五十五名、二年級三十五名、三年級十二名、計百二名であつた。越えて同三十二年六月十三日校舍改築の件が認可となつたので、すぐ淺井造氏・宮田半左衛門氏・諸岡市郎左衛門氏飯倉郁太郎氏・三橋金太郎氏等が委員となつて、校舍改築に着手したが、喜田校長には同年八月退職され、本校の顧問となつた。而して同三十三年には徴兵命第十三條により、徴兵猶豫の特典に浴し、且つ改築中の校舍も同年六月に至つて竣工した。時恰も石川僧正は外遊を終へて歸朝せられたので、同月二十七日盛大な落成式を擧行し、文部大臣樺山資紀閣下並びに朝野の名士が多數參列された。其の後同四十二年に至り武道場（四十坪）を運動場の北側に新築する外、銃器庫・（十八坪二五）の新築生徒控場の改築（七十二坪）を行ひ、大正三年十月には生徒定員二百五十名に增加の件認可、同十二月三日には定員二百九十名に增加の件認可、昭和二年九月には同定員四百五十名と、五學年一學級づつ增加の件認可となり、十學級となつた。

尙ほ昭和三年五月には、講堂理化教室の新築並びに普通教

室の增築が竣成し、又運動場の擴張を行ひ、武道場を增築して現在の所に移轉した。更に同六年には工作室、金工室完成同七年十二月には武道場表玄關の完成、同八年九月には博物教室（四十坪）の新築が完成した。

しかして明治三十一年創立以來昭和十三年三月に至るまで三十七回の卒業生を出し、其の數千三百四十三名に及んでゐる。此の間文部次官奥田義人氏・商工局長木内重四郎氏・板垣退助伯・文部省普通學務局長田所美治氏・文部省參政官大津淳一郎氏・陸軍大將福島安正閣下・文科大學長上田萬年氏千葉縣知事石原健三閣下・同折原己一郎閣下等の諸名士が或は卒業式に、或は實況視察に來校せられ、當山の文化事業に對する努力に深甚の敬意を表せられた。明治二十年英漢義塾創立以來昭和十三年三月に至る迄、年を閲すること五十一年（滿四十九年六ケ月）中學校と改稱してから四十年（滿三十九年六ケ月）に及んでゐる。

昭和七年創立三十五周年記念式を擧行。故三池・石川・服部僧正・故石川正英翁・故諸岡勝太郎氏に・墓前報告を行ひ、理事三橋金太郎氏に感謝狀を贈つた。

本校に理事を置き、三橋金太郎は創立當初から、石川甚兵衛氏は昭和三年四月から共に其の任に當られてゐたが、昭和十三年三月十九日「成田山六和會」の組織せらるゝに及んで理事制は廢止となつた。尙ほ石川氏は、同年四月十七日病氣の爲め遂に他界せられた。

第貳　設備並びに施設

一　設備

一　校地坪數　三、五〇〇坪
二　校舍建物坪數　六五〇坪
三　設備（校舍）木造二階建、但し講堂は鐵筋コンクリート造

室名	數	坪數	室名	數	坪數
勅語奉安室	一	●七五	講堂	一	八一●〇〇
校長室	一	八●七五	職員室	一	一九●二五
事務室	一	六●〇〇	圖書室	一	九●〇〇
應接室	一	六●〇〇	休養室	一	六●〇〇
普通教室	10	一七九●〇〇	理化教室	一	三〇●〇〇
博物教室	一	三〇●〇〇	博物標本及準備室	一	二二●〇〇
圖畫手工室	一	六一●七五	金工室	一	二七●五〇
理化準備室	一	一六●〇〇	機械室	一	三二●二五
天秤室	一	三●〇〇	寫眞暗室	一	一●五〇
藥品室	一	三●〇〇	會議室	一	九●〇〇
昇降口	一	一八●〇〇	生徒控室	一	七二●〇〇
武道場	一	八〇●〇〇	銃器庫	一	一八●二五
便所	三	九●五〇	物置	二	一五●〇〇
小使室	一	四●〇〇	湯飲所	一	四●〇〇
薪炭庫	一	三●〇〇	體操器具置場	一	四●〇〇
階下倉庫	一	四●〇〇	廊下階段等		二五●五〇
計		八七〇●〇〇			

二　趣旨並びに教育方針

設立の趣旨

本校は成田山新勝寺經營六大教育事業の一として、地方子弟に中等教育を施して、國家有用の材たらしむる爲めに、設立されたものである。

教育方針

本校設立の趣旨に基いて「先づ人を作る」こと、尙ほ分り易くいへば「日本人として恥しからぬ立派な人間を作る」ことを眼目としてゐる。從つて訓育の核心は、一に勅語・詔書の聖旨を奉戴し、特に實踐の要目としては、剛毅・禮讓・報恩・規律を重んじ、勤勉で勞苦を厭はない習慣と實力の養成とに努めてゐる。

三　校則

成田中學校校則

第一章　總則

第一條　本校生徒定員ハ四百五十名トス

第二條　本校ノ修業年限ヲ五箇年トシ一年ヲ以テ一學年トス

但學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第三條　一學年ヲ分チテ三學期トス左ノ如シ

第一學期　四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

第二學期　九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル

第三學期　一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル

第四條　休業日左ノ如シ

各日曜日、開校記念日（毎年十月七日）大祭日、祝日、夏期休業（七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル）冬期休業（十二月二十五日ヨリ一月七日ニ至ル）春期休業（三月二十五日ヨリ四月七日ニ至ル）

第二章　學科課程及授業時間

第五條　各學科ノ配當並ニ每週ノ時間表ハ別表ニ依ル

第三章　課程ノ選修

第六條　生徒ハ第四學年以後ニ於テハ第一種課程若シクハ第二種課程ノ何レカヲ選修スルモノトス

第七條　課程ノ選擇ハ第三學年ノ終リニ保證人連署ノ上願ヒ出デ學校長ノ許可ヲ受クベシ

第四章　考査

第八條　各學年ノ課程終了又ハ全學年ノ卒業ハ平素ノ學業成績並ニ操行ヲ考査シテ之ヲ定ム

第五章　入學退學休學賞罰

第九條　生徒ノ入學ハ每學年ノ始メトス但缺員アル時ハ第二學期ノ始メニ於テ募集スルコトアルベシ

第十條　本校第一學年ニ入學ヲ許可スベキ者ハ尋常小學校第六學年卒業ノ者及ビ入學資格檢定ニ合格セル者ニツキ入學考査ノ上銓衡ス

第十一條　入學資格檢定ハ尋常小學校卒業程度ニヨリ全學科ニ就イテ之ヲ行フ

第十二條　第二學年以上ニ入學ヲ許可スベキ者ハ相當年齡ニ達シ其ノ學年ニ相當スル學力檢定ニ合格シタル者ニ限ル

第十三條　他ノ中學校ヨリ轉校セント欲スル者アル時ハ缺員アル場合ニ限リ入學ヲ許可スルコトアルベシ但全學科ニ就キ檢定ヲ行フ

第十四條　本校ニ入學セント欲スル者ハ體格檢査ニ合格スルヲ要ス

第十五條　入學ヲ希望スル者ハ本校所定ノ用紙ニ必要事項ヲ記入ノ上願出ヅベシ

第十六條　入學ノ許可ヲ得タル者ハ一週間以內ニ左式ノ在學證書並ニ戶籍謄本ヲ差出スベシ（在學證書雛形省略）

第十七條　保證人ハ二名ヲ要シ其ノ一名ハ親權者、後見人又ハ親族トシ他ノ一名ハ成田町在住ノ一家計ヲ立ツル男子トス

第十八條　保證人ノ資格上不適當ト認ムル時ハ之ヲ變更セシムルコトアルベシ

第十九條　左ノ場合ニ於テハ退學ヲ命ズ

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二　學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三　引續キ一箇年以上缺席シタル者

四　正當ノ事由ナクシテ引續キ一ケ月以上缺席シタル者

五　授業料怠納二ケ月以上ニ亙ル者

六　疾病事故ニ因リ學業ヲ履修シ能ハズト認メタル者

學科課程每週教授時間表

學年 / 科目	第一學年 時數	第二學年 時數	第三學年 時數	第四學年 第一種 時數	第四學年 第二種 時數	第五學年 第一種 時數	第五學年 第二種 時數
修身	一	一	一	一	一	一	一
公民科				二	二	二	二
國語漢文	七	六	六	六	六	六	六
歷史地理	三	三	三	三	三	三	三
外國語（英語）	五	五	六	三	三	三	三
數學	三	三	五	五	五	五	五
理科	二	三	三	四	四	四	四
實業			四	四	四		
圖畫	一	一	一	一	一	一	一
音樂	一	一	一	一			
作業科	二	二	一	一	一		
體操	五	五	五	五	五	五	五

修身：一　社會生活國家生活法（第二學年）／個人生活社會生活作法（第一學年）

公民科：二　家鄉土府縣（第四學年第一種）／道德原理社會生活原理國民道德作法（第四學年第二種）

國語漢文：七　國語講讀作文文法習字（第一學年）／六　國語講讀漢文講讀作文習字（第二學年）／六　國語講讀漢文講讀（第三學年）／六　同上（第四學年第一種）／六　同上（第四學年第二種）／六　同上（第五學年第一種）／六　同上（第五學年第二種）

歷史地理：三　國史外國地理（第一學年）／三　外國史日本地理（第二學年）／三　外國史國史（第三學年）／三　同上（第四學年第一種）／三　國史自然地理概說人文地理概說（第四學年第二種）／三　同上（第五學年第一種）／三　同上（第五學年第二種）

外國語（英語）：五　讀方讀方解釋語方作文書取文法（第一學年）／五　同上（第二學年）／六　讀方讀方解釋語方作文書取文法（第三學年）／六　同上（第四學年第一種）／六　同上（第四學年第二種）／五　同上（第五學年第一種）／五　同上（第五學年第二種）

數學：三　綜合數學（第一學年）／三　同上（第二學年）／五　同上（第三學年）／五　同上（第四學年第一種）／五　同上（第四學年第二種）／五　同上（第五學年第一種）／五　同上（第五學年第二種）

理科：二　一般理科（第一學年）／三　博物物理化學（第二學年）／三　同上（第三學年）／四　同上（第四學年第一種）／四　同上（第四學年第二種）／四　應用理科（第五學年第一種）／四　同上（第五學年第二種）

實業：綜合實業（第四學年第一種）／四　綜合實業（第四學年第二種）

圖畫：一　自在畫（第一學年）／一　同上（第二學年）／一　自在畫用器畫（第三學年）／一　同上（第四學年第一種）／一　自在畫用器畫（第四學年第二種）／一　同上（第五學年第一種）／一　同上（第五學年第二種）

音樂：一　歌曲樂典（第一學年）／一　同上（第二學年）／一　同上（第三學年）／一　同上（第四學年第一種）／一　歌曲樂典（第四學年第二種）／一　同上（第五學年第一種）／一　同上（第五學年第二種）

作業科：二　園藝及工作（第一學年）／二　同上（第二學年）／一　同上（第三學年）／一　同上（第四學年第一種）／一　同上（第四學年第二種）／一　同上（第五學年第一種）／一　同上（第五學年第二種）

體操：五　體操教練遊戲武道（第一學年）／五　同上（第二學年）／五　同上（第三學年）／五　同上（第四學年第一種）／五　同上（第四學年第二種）／五　同上（第五學年第一種）／五　同上（第五學年第二種）

計	三〇	三〇	三二	三四	三二	三四	三二

七　出席常ナラザル者

第二十條　中途退學セント欲スル者ハ保證人連署ヲ以テ其ノ理由ヲ具シ願出ヅベシ

第廿一條　生徒兵役ニ服スル場合ハ休學ヲ許可ス

第廿二條　品行方正學術優等ノ者ニハ賞品賞狀ヲ授與ス但特ニ優秀ナル者ニ對シテハ一學年間ノ授業料ヲ免除スルコトアルベシ

第廿三條　規則命令ニ違反シ又ハ校紀ヲ紊ル者ハ戒飭謹慎停學放校ノ罰ニ處ス

第廿四條　學校ノ建物器具器械標本ヲ毀損又ハ亡失シタル時ハ相當ノ賠償ヲナサシムルコトアルベシ

第六章　授業料及入學料

第廿五條　授業料ハ一ケ月金三圓五十錢トス

第廿六條　生徒在學中ハ出席ノ有無ニ拘ラズ毎月五日迄ニ納ムベシ但毎年八月ハ納ムルヲ要セズ

第廿七條　授業料納付期日ヲ經過シ尚ホ五日以内ニ納メザル者ハ納入濟マデ停學ヲ命ジ保證人ヲシテ之ヲ納メシム

第廿八條　入學志願者ハ入學考査料金壹圓ヲ納メ入學ノ許可ヲ得タル時ハ更ニ入學金壹圓ヲ納ムベシ

第廿九條　左ノ各項ニ該當スル者ハ授業料ヲ減免ス

一　學力優等品行方正ニシテ他生ノ模範タルベキ者

二　戰時若シクハ事變ニ際シ召集セラレタル者ノ子弟

三　貧困ニシテ資力ナク學力品行共ニ佳良ナル者

但第三項ノ場合ニ於テハ父兄又ハ後見人ヨリ特ニ願書ヲ差出サシメ又本人ニ對シテハ相當ノ義務ヲ負ハシム

第三十條　休學ヲ許可シタル場合ハ授業料ヲ徴收セズ

第七章　服　制

第卅一條　生徒登校ノ際ハ必ズ制規ノ服裝ヲナスベシ

制帽ノ地質ハ黑羅紗ニシテ本校ノ徽章ヲ附スベシ

制服ノ地質ハ紺色又ハ黑色ノ小倉織ニシテ詰襟ホツク止メトス、但夏服ハ霜降リノ小倉織トス

靴ハ黑色編上ゲヲ用フベシ

外套ハ指定ノ型ニヨリ黑羅紗金ボタン附トス

但一、二學年ハ調製セザルコトヲ得

制服ヲ汚損シタル者若シクハ身體上ノ故障ニヨリ着用不能ナル者ハ許可ヲ得テ代用服ヲ着用スルコトヲ得

代用服ハ筒袖ニシテ袴ヲ着用スベシ

新入學生ニ限リ指定ノ期間中代用服ヲ許可ス

第八章　附　則

第卅二條　本校則ハ昭和六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第卅三條　本校則施行ニ關スル細則並ニ生徒取締ニ關スル規定其ノ他必要ナル内規ハ學校長之ヲ定ム

四　昭和十二年度行事概要

昭和十二年四月

八　日　始業式・入學式　（新入學生八七名、父兄八四名參列（因ニ應募者九十五名合格者八十七名））

九　日　不動尊參拜

十　六　日　新入生指導

二十六日　靖國神社遙拜式

二十九日　天長節拜賀式

五　月

五　日　端午祭

十二日　身體檢査（一、二年）

十三日　同　（三、四、五年）

十四日　口腔檢査（全學年）

二十一―二十二日　中間考査

二十四―二十六日

二十七日　海軍記念日

午前十時十分ヨリ校庭ニ於テ柔、劍道仕合ヲ爲ス

六　月

三　日　故三池僧正御命日墓參

十二日　一年生筑波山ヘ修學旅行

十四日　二年生水戸方面ヘ修學旅行

十六―十九日（三泊）　四年生熱海・箱根方面ヘ修學旅行

十八―十九日（一泊）　三年生日光方面ヘ修學旅行

二十四―二十六日（五泊）　五年生關西方面ヘ修學旅行

配屬將校飯田少佐ノ講話アリ

七　月

三　日　防空演習講話　配屬將校飯田少佐ノ講話アリ
九—十五日　第一學期考査
二十日　終業式・成績發表
二十一—二十日　一年生特別指導
二十一—廿一日　水泳練習　安房北條海岸ニテ、參加生徒二年三五名、三年三名計三八名

八　月

一　日　午前八時ヨリ成田山ニ於テ國威發揚祈願大護摩奉修ニ付、職員生徒一同參拜、終テ埴生神社ニ參拜祈願

九　月

一　日　始業式、終ツテ不動尊參拜　當日教職員生徒一同ヨリノ皇軍慰問袋ヲ取纏ム
七　日　本校防空演習規程成リ配布
十一日（土、小雨強風）　午前十時—十一時、防空豫行演習ヲ爲ス　當日ハ先ヅ班別ニ行フ
十五日（木、晴）　關東防空演習ニ付生徒一同ニ傳達、各自待機ノ心構ヲ爲サシム
十八日（土、曇）　午前十時—十一時防空演習ヲ行フ　當日ハ綜合的ニ行フ
二十三日　秋季皇靈祭

十　月

二　日　遵法週間ニ付午前八時ヨリ講話ヲ爲ス　講師千葉地方裁判所判事中野次郎氏
七　日　本校創立記念式
十三日　國民精神總動員强調週間ニ付戊申詔書ヲ奉讀訓話ヲ爲ス
十六日　皇大神宮遙拜
十七日　神嘗祭午前八時ヨリ職員生徒一同埴生神社ニ參拜
二十五日（月、晴）　午前八時ヨリ本校教練査閲、午後零時半終了、査閲官根岸中佐外一名來校　關係ニ縣ヨリ
二十七—二十九日　中間考査
二十八日　午後六時半ヨリ成田山主催ノ上海方面戰勝祝賀提灯行列ニ參加、九時二十分終了
三十日　教育勅語御下賜記念式

十　一　月

三　日　明治節拜賀式
三（木、曇）日　全校生徒長距離競爭ヲ爲ス　一、二、三年午後一時十分發　法華塚方面ヘ四、五年午後一時二十分發　大清水方面ヘ　午前八時發、午後三時着、午後五時十三分歸着
六（土、雨）日　香取神宮參拜
七（日、晴、後曇）日　五年生長瀧耕一、伊勢神宮ニ代表參拜ノ爲メ出發

十　二　月

一　日　校長防火用心講話ヲ爲ス
十一—十二—十八日　第二學期考査
十二日（日、晴）　午後六時ヨリ成田山主催南京陷落祝勝ノ提灯行列ニ參加ス、九時十分歸校
二十二日　校内大掃除
二十三日（木、晴）　午前中父兄會、午後一時ヨリ成田小學校ニ於ケル故山内先生、神崎壽君ノ町葬ニ參列燒香
二十四日　終業式成績發表、終ツテ午前十時ヨリ成田高女ニ於ケル故山内先生慰靈祭ニ職員及ビ生徒總代參列燒香
二十五—二十六日　一年生特別指導ヲ爲ス

昭和十三年一月

一　日　新年拜賀式　始業式、終ツテ不動尊參拜、次デ校主猊下ニ新年ノ御挨拶ヲ爲ス
八　日　午前五時—七時二十分武道寒稽古、最終日ニ武道大會ヲ催ス
十二—十二日（十日間）　午前十時ヨリ入學試驗ニ付附近小學校長會開催、參會者十三名、正午閉會
二十九日　故石川僧正御命日墓參
三十日

二　月

二—三日（二泊）　五年生東京見學
九日（水、晴）　午後零時半發、職員生徒代表、佐倉陸軍病院慰問、鉢植花卉及ビ「皇軍慰問號」ヲ呈ス

十一日　紀元節拜賀式、終ツテ午前十時ヨリ建國祭ニ列シ次デ不動尊埴生神社參拜

十二日（土、晴）　千葉中ニ於テ催サレシ縣下公私立中等學校國民精神總動員ニ參加、四五年生ハ佐倉成田間徒歩行進午後四時半着

十四—十九日　五年生學期末考査

二十六日　全校職員生徒第一回チブス豫防注射ヲ行フ

三月

三日　第三十七回卒業式

四日（金、曇）　午後五時二十分本校講堂出火（假想）ニ付職員非常召集ヲ爲シ、防火臨機練習ヲ爲ス、午後六時十二分鎭火

五日　全校職員生徒第二回チブス豫防注射ヲ行フ

七日　成田小學校ニ於テ執行ノ故梅澤勝弘君町葬ニ職員生徒代表參列燒香

十日　陸軍記念日

八—十二日—十四日　四年以下第三學期考査

十四日　五ケ條御誓文ニ關スル訓話ヲ爲シ宮城遙拜

十九—二十日　新入學生考査　應募者百〇七名、合格者七十五名

二十一日　春季皇靈祭

二十二日　校内大掃除

二十四日　終業式・成績發表

二十六日　校門前ニ成田山開基一千年祭奉祝塔建立開始、二十七日落成（職員生徒ノ醵金ニヨル）

二十八日（月、小雨）　一千年祭開白大法要ニ付午前八時半職員生徒一同停車場附近街路ニ堵列、行列ヲ迎フ、尚特選五十名ノ生徒ハ岩本教師指揮ノ下ニ法要前後奉讃歌ヲ合唱ス

五　一般的施設

學校長は職員を統率して、事務の分擔を定め、校務遂行の圓滑を圖り、併せて生徒の訓育、智育、心身の鍛錬、向上に資する爲め、左の施設を行つてゐる。

一　校務部

(1) 教務（重要會議・監督・時間割・統計）

教務主任（首席教諭）　教務係四人（教諭）

生徒主事（教諭）　生徒監二人（教諭）

學級主任・學科主任

(2) 事務（庶務・會計）

書記

二　校友會

(1) 本部

役員　校長・教務係

本部は新學期毎に校長司會の下に會議を開き、各部提出の豫算案を審議して之を定める。

(2) 學藝部

（イ）學術部

役員　部長（教諭）・委員（生徒若干名）

事業　(1)生徒の教化・思想の表現・鄕土文化の研究等の發表機關として、毎月「成邱の光」を發行す。今回の支那事變に際しては多額の費用を投じて、「皇軍慰問號」を作製し、陸海兩省に獻じ、戰線の勇士に夫々配布方を依頼した。

(2)時々斯界の大家を招聘して詩吟會を開催し、偉人の風格に接せしむると同時に、國體觀念の涵養に資せしめてゐる

(3)毎年一回學藝會を開き、修得した學科並びに研究を發表せしめる。

（ロ）藝術部

役員　部長（教諭）・委員（生徒若干名）

事業　夏期休暇を利用して圖畫、手工等を指導製作せしめ、休暇後展覽會を開く。

（ハ）圖書部

役員　部長（教諭）・委員（生徒若干名）

事業　受驗參考書、偉人傑士の傳記等毎年數百冊を購入し、生徒の自學自修を奬勵すると共に精神の修養に資せしめてゐる。

(3) 體育部

（イ）劍道部

（ロ）柔道部

（八）野球部
（ニ）庭球部
（ホ）競技部
役員　各部長（教諭）・委員（生徒若干名）
事業　指導練習・競技・運動會・此の外尚武、並びに剛健の氣を涵養する爲め、毎年寒氣凜冽の期を選び、校長以下職員生徒總動員の下に、毎朝五時より七時半まで、十日間の武道寒稽古を行つてゐる。
不撓不屈、困苦缺乏に耐ふる精神を養ふ爲め、春秋剛健旅行を行つてゐる。又水泳術の修得・心身の鍛錬團體生活指導の爲め、毎年希望者を募り、七月二十一日より十日間、安房北條海岸に於て水泳教練を行つてゐる。

三　課外教授
上級學校に進む者に對しては、毎週放課後英語・數學及び國語・漢文の特別指導をなし、日曜には模擬試驗を行ひて學力の向上を圖り、成績不良の者に對しては、夏期冬期の休暇を利用して特別指導を行つてゐる。

四　カード作製
各學科を連絡綜合して智識を確實にする爲め、其の教育手段として、目下カード作製中。

五　修學旅行
第一學期中、第五學年は皇大神宮に參拜し、併せて名所舊蹟を見學の爲め、關西地方に五泊一週間、第四學年は熱海・箱根地方に二泊三日間、第三學年は日光方面に一泊二日間、第二學年は水戸地方に一日間、第一學年は横須賀鎌倉地方に一日間修學旅行をなす。

六　校外監督
映畫館・飲食店等風紀上面白からざる場所に立入ることを防止する爲め、教諭二名に校外監督を委囑し、嚴重に取締らしめてゐる。

七　家庭連絡
毎年父兄會を催して、父兄との懇談を遂げ、必要に應じて父兄の來校を求め、尚ほ機會ある毎に家庭を訪問して學校と家庭との連絡を圖る。

八　朝禮
毎朝始業前、校庭或は雨天體操場に集合し、校長訓話後ラヂオ體操をなす。

九　參拜・年賀・墓參
毎月一日並に大祭日には、埴生神社に參拜し、毎月一日並に毎學期始業日には不動尊に參詣する。
年頭始業日には不動尊に參詣後校主猊下（現貫首）に年頭の挨拶をなす。
三池・石川僧正の御命日には職員生徒一同墓參燒香をなす。

一〇　謝恩會
報恩感謝の微衷を表する爲め、卒業式終了後卒業生一同は主任引率の下に、不動尊に參詣し、歸校後謝恩會を開く

六　時局對應施設

本年度中時局對應の施設として實施せる事項を記せば、大要次の如くである。

一　訓話、掲示
一　不動尊並びに埴生神社參拜、皇軍必勝武運長久祈願
一　香取神宮參拜祈願　同
一　防空防火講話・同演習
一　佐倉陸軍病院慰問
一　國民精神總動員强行軍
一　故山内高女教諭の出征歡送
一　國民精神總動員講話聽講　十二回（成田山開基一千年祭主催）
一　出征將兵の歡送迎
一　故山内高女教諭其他戰死者の町葬に參列燒香
一　故山内高女教諭の慰靈祭に參列
一　出征家族の慰問並びに幇助
一　本縣主催中等學校總動員に參加
一　「成丘の光」皇軍慰問號を戰線に配布

第參　生徒狀況

一　年度別卒業生數

成田英漢義塾年度別卒業生數

年度別	回數	卒業者數	年度別	回數	卒業者數
明治二十三年	一	三	明治二十八年	六	一一
明治二十四年	二	二	明治二十九年	七	六
明治二十五年	三	六	明治三十年	八	七
明治二十六年	四	四	明治三十一年	九	五
明治二十七年	五	四	計		四八

外ニ選科履修生六

成田中學校年度別卒業生數

年度	回數	卒業者數	年度	回數	卒業者數
明治三十五年	一	六	同三十六年	二	八
同三十七年	三	一八	同三十八年	四	二二
同三十九年	五	二二	同四十年	六	二二
同四十一年	七	二九	同四十二年	八	二二
同四十三年	九	二一	同四十四年	一〇	二三
同四十五年 大正元年	一一	三二	大正二年	一二	二八
同三年	一三	二八	同四年	一四	二八
同五年	一五	三五	同六年	一六	三七
同七年	一七	三五	同八年	一八	三七
同九年	一九	三四	同十年	二〇	三六
同十一年	二一	三八	同十二年	二二	三八
同十三年	三三	三四	同十四年	二四	四五
同十五年 昭和元年	二五	四五	昭和二年	二六	四八
同三年	二七	三九	同四年	二八	六二
同五年	二九	四八	同六年	三〇	五五
同七年	三一	五五	同八年	三二	五六
同九年	三三	四九	同十年	三四	四七
同十一年	三五	五八	同十二年	三六	五〇
同十三年	三七	五二	計		一、三四二

二　本年度（第三十七回）卒業生氏名（昭和十三年三月卒業）

氏名	原籍	入學上級學校名 就職先
青柳武	印旛、成田	東京中央郵便局
足立弘	印旛、成田	商業
岩澤秀亮	印旛、遠山	農業
植木健次	印旛、成田	早稲田大學專門部
小田垣次郎	印旛、成田	物理學校
大木晃	印旛、八生	
大木公平	印旛、公津	
大木俊一	印旛、安食	商業
大島一郎	印旛、遠山	東京鐵道局
大木正男	印旛、成田	電機學校
大坂凞	印旛、遠山	中央氣象臺
大木昌一	印旛、成田	早稲田大學專門部
金井誠一	印旛、成田	滿洲國工藤公館
川邊敏	印旛、成田	
勝田吉郎	印旛、安食	
川村茂	印旛、成田	
川村國夫	印旛、成田	早稲田大學專門部
京增廣吉	印旛、成田	商業
桑原庄一	印旛、安食	中央氣象臺測候技術官講習科
栗原廣德	埼玉縣	東京瓦斯電氣株式會社
小出博	印旛、成田	農業
小泉善一	印旛、久住	東京計器株式會社
後藤敏雄	印旛、成田	新潟高等學校
齋藤修	埼玉縣	
椎名清介	印旛、成田	
鈴木正	印旛、八生	札幌鐵道局
諏訪貫之	山武 千代田	
鈴木輝一	印旛、成田	東京藥學專門學校
清宮豐	印旛、遠山	
田谷藤二	印旛、成田	
谷忠助	印旛、公津	滿蒙開拓少年義勇軍內原訓練所
竹本武男	印旛、公津	横須賀海軍工廠
辻正男	印旛、遠山	電機學校
長瀧耕一	香取 本大須賀	日本大學
長澤文雄	印旛、富里	日本精工株式會社
根本貫治	印旛、八生	
野口佐武郎	印旛、豐住	
平澤信行	印旛、成田	
弘海堯閲	印旛、安食	
蛭田光城	印旛、豐住	
日暮正雄	印旛、安食	
日暮久彌	印旛、成田	
藤崎貞治	印旛、富里	
藤崎正一	印旛、遠山	
藤崎悅三郎	印旛、遠山	
宮田憲三	印旛、成田	
山本太一	印旛、安食	
山田二郎	印旛、安食	
山本望	印旛、安食	
山田晴之助	印旛、安食	
湯淺茂雄	印旛、八生	東京無線電氣株式會社
吉田清	印旛、公津	千葉師範二部
		千葉師範二部
		三井物產株式會社川崎埠頭事務所
		日本大學齒科
		株式會社佐々木商店（東京・丸ノ內）
		農業
		明治大學
		物理學校
		南滿洲鐵道株式會社
		大日本體育會體操學校
		北條稅務署
		合資會社國華製作所

計五二名

三　上級學校入學者調（自昭和十二年三月至同十三年四月）

學校名	卒業回次	氏名
東京高等工藝學校	36	新橋康雄
福井高等工業學校	36	長谷川篤佑
北海道大學豫科（工科）	35	石原巍一
電機學校	37	大木正男
電機學校	37	辻正男
慶應義塾大學豫科	35	宮崎廣二
早稲田大學法學部	34	淺井禮三
早稲田大學商科專門部	37	植木健次
早稲田大學商科專門部	37	大木昌一
早稲田大學法科專門部	37	川村國夫
早稲田第二高等學院	34	渡邊洪
明治大學法科專門部	37	宮田憲三
中央大學商科專門部	35	黑川順三
日本大學齒科	37	日暮久彌
東京藥學專門學校	30	青野七衛
東京藥學專門學校	37	鈴木輝一
物理學校	37	山本太一
物理學校	37	大木晃
靜岡高等學校	35	大須賀三郎
富山高等學校	35	青柳謙一
新潟高等學校	37	齋藤修
陸軍士官學校	35	篠田忠義
陸軍士官學校（昭和一二、一三）		高橋豐日
千葉縣師範學校二部	35	柏熊壽
千葉縣師範學校二部	35	金子義正
千葉縣師範學校二部	37	蛭田光城
千葉縣師範學校二部	37	弘海堯圓
慶應義塾醫大豫科	35	香取四郎
道德科學研究所	36	諸岡謙一
國士館專門學校	36	中島輝郎
東京農業大學	36	鈴木悌三
東京農業大學耕地整理講習科	34	石原三夫
滿蒙開拓青少年義勇軍茨城訓練所	37	谷忠助
日本體操學校	37	山田晴之助
日本大學高等師範科	36	森一郎
明治大學專門部	36	藤崎義治
東京第一高等無線工科學校（昭和一三、四）	36	川嶋襄
合計		三十七名

備考　以上卒業回次に拘らず、昭和十二年三月から同十三年四月末までの調査である。次に特に第三十七回の上級學校入學者並びに卒業後の情況に關する調査を示せば左表の如くである。

四　卒業生卒業後の狀況調（昭和十三年三月卒業生）

（昭和十三年四月末日現在）

昭和十三年三月卒業生第三回	事項＼年度	
1	上級學校入學志願者入學者數	高等學校大學豫科
0		高等師範學校
0		陸軍士官學校
9		實業專門學校
2		醫藥專門學校
2		師範學校第二部
4		其の他の學校
18		計
5	職業に就きたる者の數	官公吏となりたる者
		教員となりたる者
3		農業に從事する者
3		商業に從事する者
		工業に從事する者
10		其の他の職業に從事する者
21		計
6	其の他の者	家庭に在る者　受驗準備中の者　家庭準備中に於ける者
6		豫備校等準備中に於ける者
1		家事手傳の者
		動靜不明・死亡等の者
13		計
52		卒業者數合計

五　學級數並びに生徒數（昭和十三年六月末現在）

學年＼種別	學級數	生徒數
第一學年	二	七六
第二學年	二	八五
第三學年	二	八五
第四學年	二	六五
第五學年	二	六三
計	一〇	三七四

六　各學年別生徒氏名

（昭和十三年六月末現在）

◎印は特待生　△印は正副級長、級長以下は身長順

第五學年A組（三十二名）　主任（廣岡城泉　寺内保）

△小川平次　印旛遠山
藤崎秀雄　同遠山
藤崎富哉　同成田
大谷皓　同久住
長谷川成男　同成田
豊田博美　同成田
小川清　同中郷
吉岡正洋　同富里
藤崎四郎　同成田
荒井義一　同安食
△中島克雄　同成田
丸友衛　同公津
椎名治喜治　同公津
行方規矩夫　山武二川

關口金次　印旛公津
藤崎忍　同遠山
清宮敬雄　同八生
齋藤啓義　同成田
根本清　同久住
泉水俊　同公津
石井正一　同遠山
小島忠良　同成田
石井勇　同豊住
蕨博　同公津
渡邊靜夫　同成田
加藤豊次　同成田
山口宰男　茨城縣金江津
杉田睦男　匝瑳八日市場

第四學年A組（三十二名）　主任（松山俊雄　堀口龜重）

加藤貢　印旛成田
宮本武　同公津
小川保　同成田
宮本精　同安食
高木松雄　同富里
小窪利秋　同本埜
櫻井俊　香取小御門
伊藤市平　印旛中郷
遠田金幸　香取高岡
久津春三　印旛遠山
清宮昌　同遠山
坂本益男　同成田
伊藤愛治　同八生
長谷川武雄　同成田
田谷廣　同成田
木内佐男　同八生

△鈴木武夫　印旛公津
高梨良英　同成田
石橋淨光　同富里
△藤崎隆二　同遠山
山田一郎　同安食
郡司武夫　同遠山
萩原孝雄　山武千代田
土井重次郎　印旛公津
竹内弘　同成田
末吉繁　同安食
石川敏夫　同成田
武藤秋民　同永治
中野榮藏　同遠山
小川豊　同中郷
石橋佳志　同成田
石原吉三　同富里

第四學年B組（三十三名）　主任（松山俊雄　堀口龜重）

大須賀恒　印旛安食
石橋成一郎　印旛成田
山田孝一郎　印旛成田
齋藤輝夫　同中郷

相京政德　印旛公津
貝原塚茂　同八生

第五學年B組（三十一名）　主任（廣岡城泉　寺内保）

梶谷博　印旛安食
木川要　山武二川
松田武信　印旛八生
後藤敏夫　同八生
澤田泰助　同成田
椎名義　同成田
小川義久　同中郷
高橋省次　同成田
林晃　同成田
山本忠男　同安食
石井源祐　同本埜
齋藤鐵夫　同成田
弘海堯輝　同安食
生駒正　山武二川
鵜澤戊六　印旛中郷
大木光雄　同中郷

宮内行雄　印旛八生
藤本謙　同成田
浮島芳次郎　同安食
山野勝二　同成田
石井新作　同豊住
櫻田國雄　同成田
◎△青原匡典　同成田
甲田正夫　同遠山
鹽澤清　同成田
△廣田新太郎　同遠山
出山進　山武千代田
岡田富美也　印旛本埜
原偉敬　同富里
岩澤健三郎　同中郷
齋藤伍市　山武千代田

第三學年A組（四十一名）　主任（片山辰雄　橋崎紀男）

大須賀尙二　印旛安食
關三郎　同酒々井
清水保　山武二川
小川俊男　印旛成田
◎△高野政司　神奈川縣横濱
竹村淳　印旛富里
黑田照信　茨城縣伊崎
富澤孝　印旛永治
岩井伊惠門　同本埜
大木禮二　同成田
秋山好弘　同中郷
平山茂　同中郷
小川照豊　同成田
若林守司　同成田
櫻井克衛　同成田
神崎功有　同遠山

△山崎昇　印旛遠山
渡邊浩治　同成田
三橋博雄　同成田
萩原正德　同遠山
小川安之助　同公津
吉田憲八　同成田
川口峰作　同成田
小島皓　山武千代田
林田亨　印旛成田
江原良雄　同公津
河崎五三雄　同安食
森定雄　同成田
加藤正敏　同中郷
丸勉　同公津
岩間照盛　同成田

宮崎良二　香取佐原

◎△大隅忠義　東京下谷

立花文夫　印旛富里
松本義雄　同木下
大友成彦　同成田
古川英一　同成田
關谷忠雄　同公津
新藤　健　埼玉縣佐谷田
石井正三　印旛豊住
宮内千秋　同八生
高木保　同公津
勝田英朗　同安食
岩澤延光　同遠山
關川正誼　同成田
石橋愛治　同成田
藤本時造　同成田
河崎美津留　同安食
山田良輝　同成田
中村茂　同成田
小川秀平　同遠山
小川邦輔　香取滑河
谷武雄　印旛公津

山田隆信　印旛八生
富澤太郎　香取滑河
藤崎保　印旛遠山
大木惠介　同公津
木内正　山武千代田
諸岡壽一　印旛成田
鶴山俊郎　同成田
小川俊雄　山武千代田
石原芳文　印旛成田
菅澤啓　同成田
加藤尚武　同成田
小川弘　同八生
石井晃　同安食
押田吾道　山武千代田
淺野守　印旛中郷
△木内・信三　同成田
宮本宏之　同公津
丸侃　同公津
三橋喜重　同富里

第二學年A組（四十二名）主任（膳吹明　島田政治）

鈴木和夫　印旛成田
山田重衛　同成田
稲葉恒雄　同木下
小川倚造　香取滑河

園部稱次　香取高岡
田中末治　山武千代田
鈴木敏雄　君津吉野
藤崎民也　印旛遠山

林允夫　印旛八生
郡司行雄　同遠山
高柳健　同豊住
一鍬田英　同中郷
石橋幹司　同公津
三須幸雄　同成田
△伊達敏夫　同中郷
荒木幸榮　同安食
青柳恭　同公津
篠原喜好　同富里
芹山嘉幸　同遠山
湯淺幸平　同八生
高木善一　同公津
△角河勝美　同成田

松本茂　印旛成田
關口善一郎　同久住
幡谷勇　同八生
椎名英三郎　同久住
石原重因　香取小御門
佐久間好松　印旛久住
山田神一　同豊住
佐藤正夫　同成田
鶴田慎一　同成田
澤田功　同中郷
齋藤富男　同公津
栗山次雄　同豊住
山田紀男　同成田
伊藤進　山武千代田

第三學等B組（四十四名）主任（片山辰雄　橋崎紀男）

足立明　印旛成田
△加藤順三　同中郷
成毛勘一　同豊住
篠崎浩一　同富里
山田幸吉　同成田
龍崎恒　山武菱田
金井互　印旛成田
大川幸一　同富里
大竹仁一良　香取小御門
山崎孝男　印旛公津
大德省　香取小御門
成毛昇　同滑河
根本敏雄　印旛豊住
篠田幸男　同豊住
小川好平　山武千代田
桑原象雄　香取高岡
糸川眞雄　印旛富里
清宮浩　同八生

栗原廣信　印旛遠山
根本俊郎　同八生
△堀越秀一　茨城縣金江津
齋藤顯一　印旛公津
小泉太平　同中郷
相川主計　同富里
早川邦夫　同遠山
吉澤正夫　同成田
木村貞一　山武千代田
木原茂一　印旛成田
紅谷宇吉　同成田
諏訪原稔治　同八生
内田重信　山武千代田
諏訪原健吉　印旛成田
岡本武夫　香取高岡
神崎輝雄　印旛遠山
關野一雄　同成田
鈴木功一　同成田

加藤辰雄　印旛成田
鈴木博之　同成田
鈴木正一　同富里
圓城寺敏夫　同公津
戸村信行　同遠山
鵜澤胖　香取多古
長谷川操佑　印旛成田

萩原正義　印旛成田
香取利昌　同久住
石井一行　同富里
伊藤春重　同遠山
野々宮毅　同遠山
岩瀨隆　同成田
吉川洋一　同中郷

第二學年B組（四十三名）主任（膳吹明　島田政治）

淺野勉　香取高岡
後藤浩　印旛八生
長谷川良三　同成田
今仲鐵雄　同遠山
武士田泰一　香取多古
伊藤和一　印旛富里
青柳靜雄　同成田
郡司喜三郎　同遠山
鈴木芳雄　同成田
高野忠大　同安食
△伊藤進　山武千代田

池田壯吉　山武千代田
蘆田勝二　印旛成田
岩館昌喜　香取滑河
吉岡幸雄　印旛富里
松岡久夫　同成田
出山慶一　同成田
鵜澤多美夫　同六合
△岩澤宏　山武千代田
高木武夫　印旛公津
惣領欣一　同成田
諸岡中　同成田

生駒重太郎　印旛遠山　小島和夫　印旛成田
片山一郎　同成田　河部康男　同成田
林田幸雄　同富里　丸一郎　同公津
山本昌良　同安食　秋山隆夫　香取本大須賀
黒田譜逸　同成田　加藤源進　印旛成田
木村嘉明　香取多古　丸正明　同公津
弘海堯光　印旛安食　邊田文男　香取高岡
遠藤祥平　同富里　桑原榮　印旛安食
渡邊能邦　同成田　石井康夫　同成田
大島志郎　同安食　萩原一夫　山武千代田
松本哲　同酒々井

第一學年A組（三十八名）主任（三門健一　齋藤半六）

大木信勝　印旛中郷　山口茂雄　印旛木下
川野邊茂　同成田　大木永夫　山武二川
崎山元治　海上矢指　伊藤彰爾　印旛豊住
加藤岱助　印旛中郷　櫻井良門　香取小御門
△成毛平　同中郷　山本明　印旛安食
伊藤和夫　同木下　河合功　同成田

栗原政敬　印旛富里　長谷川正躬　印旛成田
小梶孝夫　同久住　山田毅　同公津
根本金二　同久住　岩館武　同中郷
相川義雄　同富里　成田誠　同安食
廣瀬武夫　同成田　中島昭夫　同成田
小川徹男　香取滑河　湯淺和　同八生
小宮正夫　印旛富里　京須廣司　同久住
高見德衛　同安食　山田雅己　同八生
篠田正平　同安食　梶谷潤一郎　同安食
石橋利男　同富里　小川英　山武千代田
林義孝　同成田　服部保民　印旛公津
戸村晃　山武千代田　鈴木廣通　同遠山
藤崎光彌　印旛遠山　△石井小十郎　山武千代田

第一學年B組（三十八名）主任（三門健一　齋藤半六）

△赤尾照次　印旛成田　長澤清　印旛布鎌
伊藤廣敬　同中郷　加藤進　同遠山
大里竹次　同遠山　鈴木嘉信　同遠山
蛭田耕平　同豊住　伊藤源衛　同中郷
秋山正誼　同成田　相京定一　同公津

伊達甚衛　印旛中郷　松本喜久男　印旛木下
高橋三郎　同公津　小島照男　同公津
甲田幸男　同遠山　古矢穂美雄　同成田
郡司晃　同遠山　木内隆　同成田
五木田榮藏　山武二川　諸岡政富　同成田
瀧澤元　印旛成田　寺内毅　同中郷
下山豊　同久住　青柳和男　同公津

關谷忠雄　印旛公津　丸善雄　印旛公津
大三川圓夫　同安食　高橋智龍　山武千代田
小宮敬雄　同富里　鹽澤繁男　印旛成田
市川榮一　同成田　押尾廣之　同富里
南井允　同成田　吉田實　同成田
國本蒼生　同富里　△鈴木邦夫　同成田
坂田順　同富里　△平澤和一　同成田

七　卒業生並びに生徒郡別表

（昭和十三年六月末現在）

學年＼郡		印旛	香取	山武	千葉	市原	東葛	匝瑳	海上	長生	夷隅	君津	安房	他府縣	計
第五學年	A	二九		一				一						一	三二
	B	二七		四											三一
第四學年	A	二九	二	一											三二
	B	二九		二											三三
第三學年	A	三三	三	三										二	四一
	B	三一	六	五										一	四四
第二學年	A	三九	二	一											四二
	B	三三	六	四											四三

第一學年 A	第一學年 B	計	卒業生
三二	三六	三一八	一、〇三七
二		二一	九二
三	二	二六	七七
			八
			四
			三
		一	五
一		一	一
			五
			三
		一	四
			七
		六	九七
三八	三八	三七四	二、三四三

第四　歷代校主・顧問　校長・主監

一　校主

石川照勤（明治三十一年七月――大正十三年一月）
校主兼名譽校長

荒木照定（大正十三年二月――現在）

二　顧問

白鳥庫吉（明治四十一年九月――現在）

三　校長・主監

喜田貞吉（明治三十一年十一月――三十二年八月）

竹內楠三（明治三十二年八月――三十四年七月）

石川照勤（明治三十四年七月校主自ラ學校長ヲ兼ネ、以後大正十三年笹川氏就任マデ、實務ニハ事務代理又ハ主監ヲ置キテ統督ス）

粟根鐵藏（校長事務代理）―（明治三十五年七月―四十一年九月）

葛原運次郎（校務主監）―（明治四十一年九月―大正二年七月）

佐竹元二（同）―（大正二年七月―大正五年三月）

佐藤禮云（同）―（大正五年三月―大正八年七月）

濱田丑之助（同）―（大正八年七月―大正九年九月）

名川彥作（同）―（大正九年九月―大正十三年一月）

笹川種郎（學校長就任）―（大正十三年一月―同十四年三月）

小林力彌（同）―（大正十四年三月―昭和三年五月）

增田榮（同）―（昭和三年五月―同九年五月）

今澤慈海（同）―（昭和九年五月―現在）

第五　職員

（昭和十三年六月末現在）

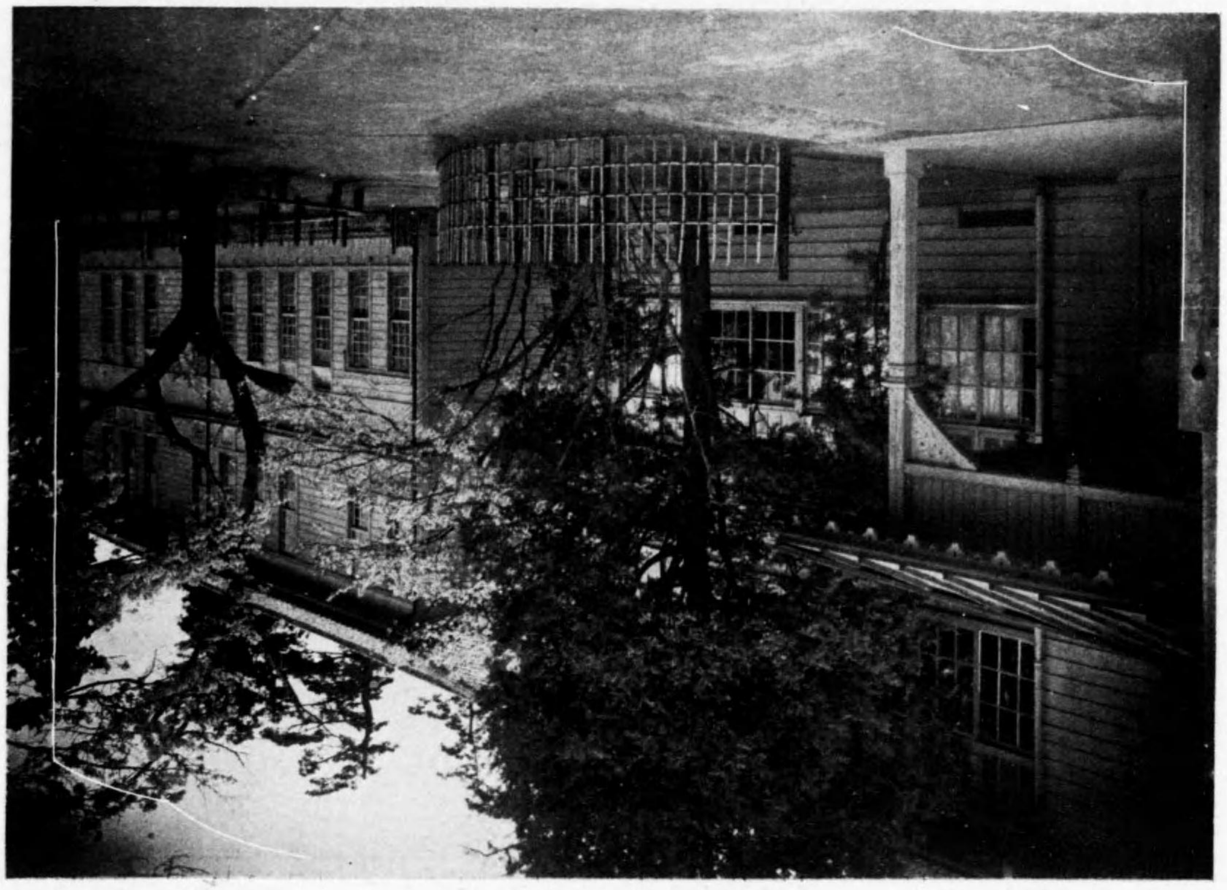
受持學科	職名	氏名	原籍	就職年月
修身	校主兼名譽校長	荒木照定	千葉縣	大正十三年二月
修身・歷史・漢文	顧問	白鳥庫吉	千葉縣	明治四十一年九月
英語	文學博士	今澤慈海	愛媛縣	昭和九年五月
博物一般理科	校長兼教諭	甲斐重五	熊本縣	昭和九年九月
物理・化學	教務主任	西原鹿之助	靜岡縣	昭和四年四月
國語・漢文	生徒主事	吹明	東京府	昭和十年四月
地理・公民	教諭	久住雅治	靜岡縣	昭和七年二月
國語	教諭	瀧澤榮亮	千葉縣	大正十二年二月
歷史	教諭	片山辰雄	崎長縣	昭和四年四月
國語・漢文	教諭	內寺保	千葉縣	大正十四年四月
圖畫・作業	教諭	三門健一	千葉縣	大正十五年四月
英語	教諭	松岡城泉	京都府	昭和四年九月
數學・地理・實業	教諭	土屋俊雄	千葉縣	昭和九年十月
數學	教諭	石井壽一勇	靜岡縣	昭和八年四月
	教諭	榎男	茨城縣	昭和十年四月
	教諭	崎紀男	東京府	昭和十二年四月
	教諭	藤牛六	埼玉縣	昭和十二年十月

成田高等女學校

同	教諭	阿部松榮	新潟縣	昭和十三年五月	
體操	教諭	島田取次	千葉縣	昭和十三年四月	
柔道	教諭兼書記	榎田正巳	千葉縣	大正七年一月	
教練・劍道	教諭心得	細矢末吉	千葉縣	昭和三年四月	
教練	囑託	齋藤理平	千葉縣	昭和十二年十月	
劍道・習字	囑託	邊田金治郎	千葉縣	昭和五年四月	
英語	囑託	堀口龜重	埼玉縣	昭和十二年九月	
國語・漢文	囑託	大石雅次郎	福岡縣	昭和三年九月	
音樂	囑託	岩本政藏	栃木縣	昭和六年四月	
英語	囑託	栗和田勝信	東京府	昭和十三年六月	
劍道	教師兼會計	南井榮助	千葉縣	明治三十四年四月	
教練	配屬將校	飯田喜好	東京府	昭和十一年三月	
	步兵中佐				
	配屬將校	梅澤富賀美	千葉縣	昭和十三年五月	
	步兵少尉	高川直三郎	千葉縣	明治三十三年九月	
	校醫	萩原村次	千葉縣	昭和五年五月	
	齒科作業助手	實川賢雄	千葉縣	昭和六年六月	

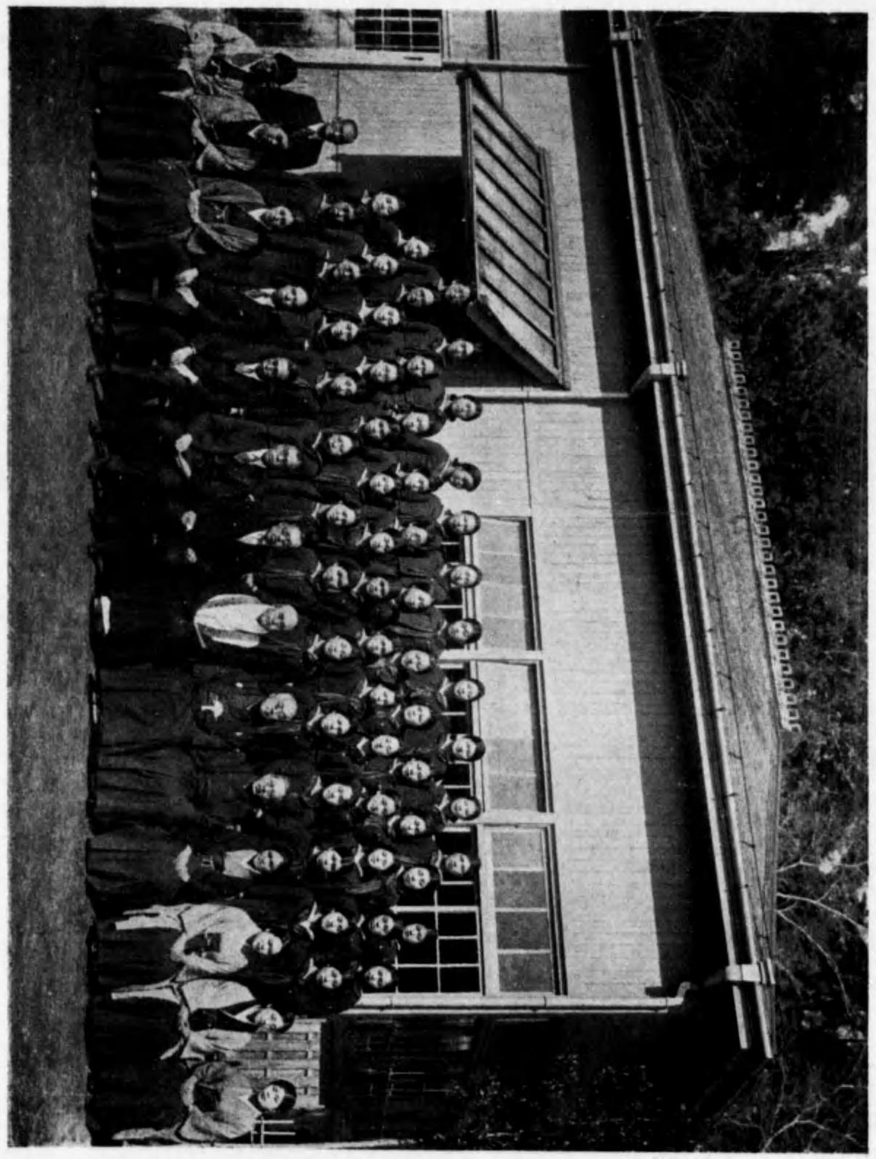
第六　經費

費目 / 年度	俸給	雜給	需用費	雜費	賞與	營繕費	計
昭和十二年度決算額	二七五七・〇〇円	三三五二・二五円	一〇九四・四二円	三五九七・一六円	三四〇六・〇〇円	二九六一・〇三円	四一・九四八・八五円



校學女等高田成

緒言
一 沿革……一
二 位置及交通……四
三 校地……五
四 校舎……五
五 教育方針……六
六 學級……六
七 生徒……七
八 職員……八
九 學級別生徒數……九
十 學級別生徒數……十
十一 學級別生徒數……十一
十二 學級別生徒數……十二
十三 學級別生徒數……十三
十四 學級別生徒數……十四
十五 學級別生徒數……十五
十六 學級別生徒數……十六
十七 學級別生徒數……十七
十八 學級別生徒數……十八
十九 學級別生徒數……十九
二十 學級別生徒數……二十
二十一 學級別生徒數……二十一
二十二 學級別生徒數……二十二
二十三 學級別生徒數……二十三
二十四 學級別生徒數……二十四
二十五 學級別生徒數……二十五
二十六 學級別生徒數……二十六
二十七 學級別生徒數……二十七
二十八 學級別生徒數……二十八
二十九 學級別生徒數……二十九
三十 學級別生徒數……三十
三十一 學級別生徒數……三十一
三十二 學級別生徒數……三十二
三十三 學級別生徒數……三十三
三十四 學級別生徒數……三十四
三十五 學級別生徒數……三十五
三十六 學級別生徒數……三十六
三十七 學級別生徒數……三十七
三十八 學級別生徒數……三十八
三十九 學級別生徒數……三十九
四十 學級別生徒數……四十
四十一 學級別生徒數……四十一
四十二 學級別生徒數……四十二
四十三 學級別生徒數……四十三
四十四 學級別生徒數……四十四
四十五 學級別生徒數……四十五
四十六 學級別生徒數……四十六
四十七 學級別生徒數……四十七
四十八 學級別生徒數……四十八
四十九 學級別生徒數……四十九
五十 學級別生徒數……五十
五十一 學級別生徒數……五十一
五十二 學級別生徒數……五十二
五十三 學級別生徒數……五十三
五十四 學級別生徒數……五十四
五十五 學級別生徒數……五十五
五十六 學級別生徒數……五十六
五十七 學級別生徒數……五十七
五十八 學級別生徒數……五十八
五十九 學級別生徒數……五十九
六十 學級別生徒數……六十
六十一 學級別生徒數……六十一
六十二 學級別生徒數……六十二
六十三 學級別生徒數……六十三
六十四 學級別生徒數……六十四
六十五 學級別生徒數……六十五
六十六 學級別生徒數……六十六
六十七 學級別生徒數……六十七
六十八 學級別生徒數……六十八
六十九 學級別生徒數……六十九
七十 學級別生徒數……七十
七十一 學級別生徒數……七十一
七十二 學級別生徒數……七十二
七十三 學級別生徒數……七十三
七十四 學級別生徒數……七十四
七十五 學級別生徒數……七十五
七十六 學級別生徒數……七十六
七十七 學級別生徒數……七十七
七十八 學級別生徒數……七十八
七十九 學級別生徒數……七十九
八十 學級別生徒數……八十
八十一 學級別生徒數……八十一
八十二 學級別生徒數……八十二
八十三 學級別生徒數……八十三
八十四 學級別生徒數……八十四
八十五 學級別生徒數……八十五
八十六 學級別生徒數……八十六
八十七 學級別生徒數……八十七
八十八 學級別生徒數……八十八
八十九 學級別生徒數……八十九
九十 學級別生徒數……九十
九十一 學級別生徒數……九十一
九十二 學級別生徒數……九十二
九十三 學級別生徒數……九十三
九十四 學級別生徒數……九十四
九十五 學級別生徒數……九十五
九十六 學級別生徒數……九十六
九十七 學級別生徒數……九十七
九十八 學級別生徒數……九十八
九十九 學級別生徒數……九十九
一百 學級別生徒數……一百
一百一 學級別生徒數……一百一
一百二 學級別生徒數……一百二
一百三 學級別生徒數……一百三
一百四 學級別生徒數……一百四
一百五 學級別生徒數……一百五
一百六 學級別生徒數……一百六
一百七 學級別生徒數……一百七
一百八 學級別生徒數……一百八
一百九 學級別生徒數……一百九
一百十 學級別生徒數……一百十
一百十一 學級別生徒數……一百十一
一百十二 學級別生徒數……一百十二
一百十三 學級別生徒數……一百十三
一百十四 學級別生徒數……一百十四
一百十五 學級別生徒數……一百十五
一百十六 學級別生徒數……一百十六
一百十七 學級別生徒數……一百十七
一百十八 學級別生徒數……一百十八
一百十九 學級別生徒數……一百十九
一百二十 學級別生徒數……一百二十
一百二十一 學級別生徒數……一百二十一
一百二十二 學級別生徒數……一百二十二
一百二十三 學級別生徒數……一百二十三
一百二十四 學級別生徒數……一百二十四
一百二十五 學級別生徒數……一百二十五
一百二十六 學級別生徒數……一百二十六
一百二十七 學級別生徒數……一百二十七
一百二十八 學級別生徒數……一百二十八
一百二十九 學級別生徒數……一百二十九
一百三十 學級別生徒數……一百三十
一百三十一 學級別生徒數……一百三十一
一百三十二 學級別生徒數……一百三十二
一百三十三 學級別生徒數……一百三十三
一百三十四 學級別生徒數……一百三十四
一百三十五 學級別生徒數……一百三十五
一百三十六 學級別生徒數……一百三十六
一百三十七 學級別生徒數……一百三十七
一百三十八 學級別生徒數……一百三十八
一百三十九 學級別生徒數……一百三十九
一百四十 學級別生徒數……一百四十
一百四十一 學級別生徒數……一百四十一
一百四十二 學級別生徒數……一百四十二
一百四十三 學級別生徒數……一百四十三
一百四十四 學級別生徒數……一百四十四
一百四十五 學級別生徒數……一百四十五
一百四十六 學級別生徒數……一百四十六
一百四十七 學級別生徒數……一百四十七
一百四十八 學級別生徒數……一百四十八
一百四十九 學級別生徒數……一百四十九
一百五十 學級別生徒數……一百五十
一百五十一 學級別生徒數……一百五十一
一百五十二 學級別生徒數……一百五十二
一百五十三 學級別生徒數……一百五十三
一百五十四 學級別生徒數……一百五十四
一百五十五 學級別生徒數……一百五十五
一百五十六 學級別生徒數……一百五十六
一百五十七 學級別生徒數……一百五十七
一百五十八 學級別生徒數……一百五十八
一百五十九 學級別生徒數……一百五十九
一百六十 學級別生徒數……一百六十
一百六十一 學級別生徒數……一百六十一
一百六十二 學級別生徒數……一百六十二
一百六十三 學級別生徒數……一百六十三
一百六十四 學級別生徒數……一百六十四
一百六十五 學級別生徒數……一百六十五
一百六十六 學級別生徒數……一百六十六
一百六十七 學級別生徒數……一百六十七
一百六十八 學級別生徒數……一百六十八
一百六十九 學級別生徒數……一百六十九
一百七十 學級別生徒數……一百七十
一百七十一 學級別生徒數……一百七十一
一百七十二 學級別生徒數……一百七十二
一百七十三 學級別生徒數……一百七十三
一百七十四 學級別生徒數……一百七十四
一百七十五 學級別生徒數……一百七十五
一百七十六 學級別生徒數……一百七十六
一百七十七 學級別生徒數……一百七十七
一百七十八 學級別生徒數……一百七十八
一百七十九 學級別生徒數……一百七十九
一百八十 學級別生徒數……一百八十
一百八十一 學級別生徒數……一百八十一
一百八十二 學級別生徒數……一百八十二
一百八十三 學級別生徒數……一百八十三
一百八十四 學級別生徒數……一百八十四
一百八十五 學級別生徒數……一百八十五
一百八十六 學級別生徒數……一百八十六
一百八十七 學級別生徒數……一百八十七
一百八十八 學級別生徒數……一百八十八
一百八十九 學級別生徒數……一百八十九
一百九十 學級別生徒數……一百九十
一百九十一 學級別生徒數……一百九十一
一百九十二 學級別生徒數……一百九十二
一百九十三 學級別生徒數……一百九十三
一百九十四 學級別生徒數……一百九十四
一百九十五 學級別生徒數……一百九十五
一百九十六 學級別生徒數……一百九十六
一百九十七 學級別生徒數……一百九十七
一百九十八 學級別生徒數……一百九十八
一百九十九 學級別生徒數……一百九十九
二百 學級別生徒數……二百
二百一 學級別生徒數……二百一
二百二 學級別生徒數……二百二
二百三 學級別生徒數……二百三
二百四 學級別生徒數……二百四
二百五 學級別生徒數……二百五
二百六 學級別生徒數……二百六
二百七 學級別生徒數……二百七
二百八 學級別生徒數……二百八
二百九 學級別生徒數……二百九
二百十 學級別生徒數……二百十
二百十一 學級別生徒數……二百十一
二百十二 學級別生徒數……二百十二
二百十三 學級別生徒數……二百十三
二百十四 學級別生徒數……二百十四
二百十五 學級別生徒數……二百十五
二百十六 學級別生徒數……二百十六
二百十七 學級別生徒數……二百十七
二百十八 學級別生徒數……二百十八
二百十九 學級別生徒數……二百十九
二百二十 學級別生徒數……二百二十
二百二十一 學級別生徒數……二百二十一
二百二十二 學級別生徒數……二百二十二
二百二十三 學級別生徒數……二百二十三
二百二十四 學級別生徒數……二百二十四
二百二十五 學級別生徒數……二百二十五
二百二十六 學級別生徒數……二百二十六
二百二十七 學級別生徒數……二百二十七
二百二十八 學級別生徒數……二百二十八
二百二十九 學級別生徒數……二百二十九
二百三十 學級別生徒數……二百三十
二百三十一 學級別生徒數……二百三十一
二百三十二 學級別生徒數……二百三十二
二百三十三 學級別生徒數……二百三十三
二百三十四 學級別生徒數……二百三十四
二百三十五 學級別生徒數……二百三十五
二百三十六 學級別生徒數……二百三十六
二百三十七 學級別生徒數……二百三十七
二百三十八 學級別生徒數……二百三十八
二百三十九 學級別生徒數……二百三十九
二百四十 學級別生徒數……二百四十
二百四十一 學級別生徒數……二百四十一
二百四十二 學級別生徒數……二百四十二
二百四十三 學級別生徒數……二百四十三
二百四十四 學級別生徒數……二百四十四
二百四十五 學級別生徒數……二百四十五
二百四十六 學級別生徒數……二百四十六
二百四十七 學級別生徒數……二百四十七
二百四十八 學級別生徒數……二百四十八
二百四十九 學級別生徒數……二百四十九
二百五十 學級別生徒數……二百五十
二百五十一 學級別生徒數……二百五十一
二百五十二 學級別生徒數……二百五十二
二百五十三 學級別生徒數……二百五十三
二百五十四 學級別生徒數……二百五十四
二百五十五 學級別生徒數……二百五十五
二百五十六 學級別生徒數……二百五十六
二百五十七 學級別生徒數……二百五十七
二百五十八 學級別生徒數……二百五十八
二百五十九 學級別生徒數……二百五十九
二百六十 學級別生徒數……二百六十
二百六十一 學級別生徒數……二百六十一
二百六十二 學級別生徒數……二百六十二
二百六十三 學級別生徒數……二百六十三
二百六十四 學級別生徒數……二百六十四
二百六十五 學級別生徒數……二百六十五
二百六十六 學級別生徒數……二百六十六
二百六十七 學級別生徒數……二百六十七
二百六十八 學級別生徒數……二百六十八
二百六十九 學級別生徒數……二百六十九
二百七十 學級別生徒數……二百七十
二百七十一 學級別生徒數……二百七十一
二百七十二 學級別生徒數……二百七十二
二百七十三 學級別生徒數……二百七十三
二百七十四 學級別生徒數……二百七十四
二百七十五 學級別生徒數……二百七十五
二百七十六 學級別生徒數……二百七十六
二百七十七 學級別生徒數……二百七十七
二百七十八 學級別生徒數……二百七十八
二百七十九 學級別生徒數……二百七十九
二百八十 學級別生徒數……二百八十
二百八十一 學級別生徒數……二百八十一
二百八十二 學級別生徒數……二百八十二
二百八十三 學級別生徒數……二百八十三
二百八十四 學級別生徒數……二百八十四
二百八十五 學級別生徒數……二百八十五
二百八十六 學級別生徒數……二百八十六
二百八十七 學級別生徒數……二百八十七
二百八十八 學級別生徒數……二百八十八
二百八十九 學級別生徒數……二百八十九
二百九十 學級別生徒數……二百九十
二百九十一 學級別生徒數……二百九十一
二百九十二 學級別生徒數……二百九十二
二百九十三 學級別生徒數……二百九十三
二百九十四 學級別生徒數……二百九十四
二百九十五 學級別生徒數……二百九十五
二百九十六 學級別生徒數……二百九十六
二百九十七 學級別生徒數……二百九十七
二百九十八 學級別生徒數……二百九十八
二百九十九 學級別生徒數……二百九十九
三百 學級別生徒數……三百
三百一 學級別生徒數……三百一
三百二 學級別生徒數……三百二
三百三 學級別生徒數……三百三
三百四 學級別生徒數……三百四
三百五 學級別生徒數……三百五
三百六 學級別生徒數……三百六
三百七 學級別生徒數……三百七
三百八 學級別生徒數……三百八
三百九 學級別生徒數……三百九
三百十 學級別生徒數……三百十
三百十一 學級別生徒數……三百十一
三百十二 學級別生徒數……三百十二
三百十三 學級別生徒數……三百十三
三百十四 學級別生徒數……三百十四
三百十五 學級別生徒數……三百十五
三百十六 學級別生徒數……三百十六
三百十七 學級別生徒數……三百十七
三百十八 學級別生徒數……三百十八
三百十九 學級別生徒數……三百十九
三百二十 學級別生徒數……三百二十
三百二十一 學級別生徒數……三百二十一
三百二十二 學級別生徒數……三百二十二
三百二十三 學級別生徒數……三百二十三
三百二十四 學級別生徒數……三百二十四
三百二十五 學級別生徒數……三百二十五
三百二十六 學級別生徒數……三百二十六
三百二十七 學級別生徒數……三百二十七
三百二十八 學級別生徒數……三百二十八
三百二十九 學級別生徒數……三百二十九
三百三十 學級別生徒數……三百三十
三百三十一 學級別生徒數……三百三十一
三百三十二 學級別生徒數……三百三十二
三百三十三 學級別生徒數……三百三十三
三百三十四 學級別生徒數……三百三十四
三百三十五 學級別生徒數……三百三十五
三百三十六 學級別生徒數……三百三十六
三百三十七 學級別生徒數……三百三十七
三百三十八 學級別生徒數……三百三十八
三百三十九 學級別生徒數……三百三十九
四百 學級別生徒數……四百
四百一 學級別生徒數……四百一
四百二 學級別生徒數……四百二
四百三 學級別生徒數……四百三
四百四 學級別生徒數……四百四
四百五 學級別生徒數……四百五
四百六 學級別生徒數……四百六
四百七 學級別生徒數……四百七
四百八 學級別生徒數……四百八
四百九 學級別生徒數……四百九
四百十 學級別生徒數……四百十
四百十一 學級別生徒數……四百十一
四百十二 學級別生徒數……四百十二
四百十三 學級別生徒數……四百十三
四百十四 學級別生徒數……四百十四
四百十五 學級別生徒數……四百十五
四百十六 學級別生徒數……四百十六
四百十七 學級別生徒數……四百十七
四百十八 學級別生徒數……四百十八
四百十九 學級別生徒數……四百十九
四百二十 學級別生徒數……四百二十
四百二十一 學級別生徒數……四百二十一
四百二十二 學級別生徒數……四百二十二
四百二十三 學級別生徒數……四百二十三
四百二十四 學級別生徒數……四百二十四
四百二十五 學級別生徒數……四百二十五
四百二十六 學級別生徒數……四百二十六
四百二十七 學級別生徒數……四百二十七
四百二十八 學級別生徒數……四百二十八
四百二十九 學級別生徒數……四百二十九
四百三十 學級別生徒數……四百三十
四百三十一 學級別生徒數……四百三十一
四百三十二 學級別生徒數……四百三十二
四百三十三 學級別生徒數……四百三十三
四百三十四 學級別生徒數……四百三十四
四百三十五 學級別生徒數……四百三十五
四百三十六 學級別生徒數……四百三十六
四百三十七 學級別生徒數……四百三十七
四百三十八 學級別生徒數……四百三十八
四百三十九 學級別生徒數……四百三十九
四百四十 學級別生徒數……四百四十
四百四十一 學級別生徒數……四百四十一
四百四十二 學級別生徒數……四百四十二
四百四十三 學級別生徒數……四百四十三
四百四十四 學級別生徒數……四百四十四
四百四十五 學級別生徒數……四百四十五
四百四十六 學級別生徒數……四百四十六
四百四十七 學級別生徒數……四百四十七
四百四十八 學級別生徒數……四百四十八
四百四十九 學級別生徒數……四百四十九
五百 學級別生徒數……五百
五百一 學級別生徒數……五百一
五百二 學級別生徒數……五百二
五百三 學級別生徒數……五百三
五百四 學級別生徒數……五百四
五百五 學級別生徒數……五百五
五百六 學級別生徒數……五百六
五百七 學級別生徒數……五百七
五百八 學級別生徒數……五百八
五百九 學級別生徒數……五百九
五百十 學級別生徒數……五百十
五百十一 學級別生徒數……五百十一
五百十二 學級別生徒數……五百十二
五百十三 學級別生徒數……五百十三
五百十四 學級別生徒數……五百十四
五百十五 學級別生徒數……五百十五
五百十六 學級別生徒數……五百十六
五百十七 學級別生徒數……五百十七
五百十八 學級別生徒數……五百十八
五百十九 學級別生徒數……五百十九
五百二十 學級別生徒數……五百二十
五百二十一 學級別生徒數……五百二十一
五百二十二 學級別生徒數……五百二十二
五百二十三 學級別生徒數……五百二十三
五百二十四 學級別生徒數……五百二十四
五百二十五 學級別生徒數……五百二十五
五百二十六 學級別生徒數……五百二十六
五百二十七 學級別生徒數……五百二十七
五百二十八 學級別生徒數……五百二十八
五百二十九 學級別生徒數……五百二十九
五百三十 學級別生徒數……五百三十
五百三十一 學級別生徒數……五百三十一
五百三十二 學級別生徒數……五百三十二
五百三十三 學級別生徒數……五百三十三
五百三十四 學級別生徒數……五百三十四
五百三十五 學級別生徒數……五百三十五
五百三十六 學級別生徒數……五百三十六
五百三十七 學級別生徒數……五百三十七
五百三十八 學級別生徒數……五百三十八
五百三十九 學級別生徒數……五百三十九
五百四十 學級別生徒數……五百四十
五百四十一 學級別生徒數……五百四十一
五百四十二 學級別生徒數……五百四十二
五百四十三 學級別生徒數……五百四十三
五百四十四 學級別生徒數……五百四十四
五百四十五 學級別生徒數……五百四十五
五百四十六 學級別生徒數……五百四十六
五百四十七 學級別生徒數……五百四十七
五百四十八 學級別生徒數……五百四十八
五百四十九 學級別生徒數……五百四十九
六百 學級別生徒數……六百
六百一 學級別生徒數……六百一
六百二 學級別生徒數……六百二
六百三 學級別生徒數……六百三
六百四 學級別生徒數……六百四
六百五 學級別生徒數……六百五
六百六 學級別生徒數……六百六
六百七 學級別生徒數……六百七
六百八 學級別生徒數……六百八
六百九 學級別生徒數……六百九
六百十 學級別生徒數……六百十
六百十一 學級別生徒數……六百十一
六百十二 學級別生徒數……六百十二
六百十三 學級別生徒數……六百十三
六百十四 學級別生徒數……六百十四
六百十五 學級別生徒數……六百十五
六百十六 學級別生徒數……六百十六
六百十七 學級別生徒數……六百十七
六百十八 學級別生徒數……六百十八
六百十九 學級別生徒數……六百十九
六百二十 學級別生徒數……六百二十
六百二十一 學級別生徒數……六百二十一
六百二十二 學級別生徒數……六百二十二
六百二十三 學級別生徒數……六百二十三
六百二十四 學級別生徒數……六百二十四
六百二十五 學級別生徒數……六百二十五
六百二十六 學級別生徒數……六百二十六
六百二十七 學級別生徒數……六百二十七
六百二十八 學級別生徒數……六百二十八
六百二十九 學級別生徒數……六百二十九
六百三十 學級別生徒數……六百三十
六百三十一 學級別生徒數……六百三十一
六百三十二 學級別生徒數……六百三十二
六百三十三 學級別生徒數……六百三十三
六百三十四 學級別生徒數……六百三十四
六百三十五 學級別生徒數……六百三十五
六百三十六 學級別生徒數……六百三十六
六百三十七 學級別生徒數……六百三十七
六百三十八 學級別生徒數……六百三十八
六百三十九 學級別生徒數……六百三十九
六百四十 學級別生徒數……六百四十
六百四十一 學級別生徒數……六百四十一
六百四十二 學級別生徒數……六百四十二
六百四十三 學級別生徒數……六百四十三
六百四十四 學級別生徒數……六百四十四
六百四十五 學級別生徒數……六百四十五
六百四十六 學級別生徒數……六百四十六
六百四十七 學級別生徒數……六百四十七
六百四十八 學級別生徒數……六百四十八
六百四十九 學級別生徒數……六百四十九
七百 學級別生徒數……七百
七百一 學級別生徒數……七百一
七百二 學級別生徒數……七百二
七百三 學級別生徒數……七百三
七百四 學級別生徒數……七百四
七百五 學級別生徒數……七百五
七百六 學級別生徒數……七百六
七百七 學級別生徒數……七百七
七百八 學級別生徒數……七百八
七百九 學級別生徒數……七百九
七百十 學級別生徒數……七百十
七百十一 學級別生徒數……七百十一
七百十二 學級別生徒數……七百十二
七百十三 學級別生徒數……七百十三
七百十四 學級別生徒數……七百十四
七百十五 學級別生徒數……七百十五
七百十六 學級別生徒數……七百十六
七百十七 學級別生徒數……七百十七
七百十八 學級別生徒數……七百十八
七百十九 學級別生徒數……七百十九
八百 學級別生徒數……八百
八百一 學級別生徒數……八百一
八百二 學級別生徒數……八百二
八百三 學級別生徒數……八百三
八百四 學級別生徒數……八百四
八百五 學級別生徒數……八百五
八百六 學級別生徒數……八百六
八百七 學級別生徒數……八百七
八百八 學級別生徒數……八百八
八百九 學級別生徒數……八百九
八百十 學級別生徒數……八百十
八百十一 學級別生徒數……八百十一
八百十二 學級別生徒數……八百十二
八百十三 學級別生徒數……八百十三
八百十四 學級別生徒數……八百十四
八百十五 學級別生徒數……八百十五
八百十六 學級別生徒數……八百十六
八百十七 學級別生徒數……八百十七
八百十八 學級別生徒數……八百十八
八百十九 學級別生徒數……八百十九
八百二十 學級別生徒數……八百二十
八百二十一 學級別生徒數……八百二十一
八百二十二 學級別生徒數……八百二十二
八百二十三 學級別生徒數……八百二十三
八百二十四 學級別生徒數……八百二十四
八百二十五 學級別生徒數……八百二十五
八百二十六 學級別生徒數……八百二十六
八百二十七 學級別生徒數……八百二十七
八百二十八 學級別生徒數……八百二十八
八百二十九 學級別生徒數……八百二十九
八百三十 學級別生徒數……八百三十
八百三十一 學級別生徒數……八百三十一
八百三十二 學級別生徒數……八百三十二
八百三十三 學級別生徒數……八百三十三
八百三十四 學級別生徒數……八百三十四
八百三十五 學級別生徒數……八百三十五
八百三十六 學級別生徒數……八百三十六
八百三十七 學級別生徒數……八百三十七
八百三十八 學級別生徒數……八百三十八
八百三十九 學級別生徒數……八百三十九
八百四十 學級別生徒數……八百四十
八百四十一 學級別生徒數……八百四十一
八百四十二 學級別生徒數……八百四十二
八百四十三 學級別生徒數……八百四十三
八百四十四 學級別生徒數……八百四十四
八百四十五 學級別生徒數……八百四十五
八百四十六 學級別生徒數……八百四十六
八百四十七 學級別生徒數……八百四十七
八百四十八 學級別生徒數……八百四十八
八百四十九 學級別生徒數……八百四十九
九百 學級別生徒數……九百
九百一 學級別生徒數……九百一
九百二 學級別生徒數……九百二
九百三 學級別生徒數……九百三
九百四 學級別生徒數……九百四
九百五 學級別生徒數……九百五
九百六 學級別生徒數……九百六
九百七 學級別生徒數……九百七
九百八 學級別生徒數……九百八
九百九 學級別生徒數……九百九
九百十 學級別生徒數……九百十
九百十一 學級別生徒數……九百十一
九百十二 學級別生徒數……九百十二
九百十三 學級別生徒數……九百十三
九百十四 學級別生徒數……九百十四
九百十五 學級別生徒數……九百十五
九百十六 學級別生徒數……九百十六
九百十七 學級別生徒數……九百十七
九百十八 學級別生徒數……九百十八
九百十九 學級別生徒數……九百十九
九百二十 學級別生徒數……九百二十
九百二十一 學級別生徒數……九百二十一
九百二十二 學級別生徒數……九百二十二
九百二十三 學級別生徒數……九百二十三
九百二十四 學級別生徒數……九百二十四
九百二十五 學級別生徒數……九百二十五
九百二十六 學級別生徒數……九百二十六
九百二十七 學級別生徒數……九百二十七
九百二十八 學級別生徒數……九百二十八
九百二十九 學級別生徒數……九百二十九
九百三十 學級別生徒數……九百三十
九百三十一 學級別生徒數……九百三十一
九百三十二 學級別生徒數……九百三十二
九百三十三 學級別生徒數……九百三十三
九百三十四 學級別生徒數……九百三十四
九百三十五 學級別生徒數……九百三十五
九百三十六 學級別生徒數……九百三十六
九百三十七 學級別生徒數……九百三十七
九百三十八 學級別生徒數……九百三十八
九百三十九 學級別生徒數……九百三十九
九百四十 學級別生徒數……九百四十
九百四十一 學級別生徒數……九百四十一
九百四十二 學級別生徒數……九百四十二
九百四十三 學級別生徒數……九百四十三
九百四十四 學級別生徒數……九百四十四
九百四十五 學級別生徒數……九百四十五
九百四十六 學級別生徒數……九百四十六
九百四十七 學級別生徒數……九百四十七
九百四十八 學級別生徒數……九百四十八
九百四十九 學級別生徒數……九百四十九



生業第十回（昭和三十年三月卒業）

校歌・記念日唱歌

成田高等女學校々歌

笹川種郎作歌
山田耕筰作曲

（一）曉の榮ある光
眠より覺めし乙女ら
美しき望は滿てり
永の夜の闇を破る
なれの世ぞ今目の前に
學びの窓は樂しき園生
幸ある前途いざことほがん

（二）成田なる岡の邊に咲く
雪霜を凌ぎ堪へつゝ
清き香は四方に漂ふ
千枝五百枝萬枝の梅
さきがけし色匂やかに
學びの窓は樂しき園生
幸ある前途いざことほがん

（三）鐘の音は朝な夕なに
御堂より森へと響く

怠るな勤めはげめと
澄み渡る心耳に冴えて

我等をば教へ導く
學びの窓は樂しき園生
幸ある前途いざことほがん

成田高等女學校創立記念日唱歌

佐藤國二作歌

(一) 君が代の榮ある光浴みて
幸先ゆたけく產聲高く
祝ひて歌はん嬉しき此の日

松の綠そふ成田丘邊
生れし園生に學ぶ我等

(二) 梅が香のけ高き望胸に
長へに榮えん學びの窓の
喜びしのばんゆかしき此の日

清く潔き操もちて
開けし其の上今日にぞある

(三) 春來れば櫻の雲の臺
懇に少女の若やぐ心
歌ひて祝はん樂しき此の日

秋は萩の花匂ひこぼれ
導き敎ゆる美しき園生

位置

千葉縣印旛郡成田町成田十五番地、成田山新勝寺境內ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹、(電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接續)

本校ハ成田山經營ニ屬スル教育事業ニシテ私立成田山女學校ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ

(一) 君が代の榮ある光浴みて
幸先ゆたけく產聲高く
祝ひて歌はん嬉しき此の日

(二) 梅が香のけ高き望胸に
長へに榮えん學びの窓の
喜びしのばんゆかしき此の日

(三) 春來れば櫻の雲の臺
懇に少女の若やぐ心
歌ひて祝はん樂しき此の日

松の綠そふ成田丘邊
生れし園生に學ぶ我等
清く潔き操もちて
開けし其の上今日にぞある
秋は萩の花匂ひこぼれ
導き敎ゆる美しき園生

昭和十二年度 成田高等女學校一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田十五番地、成田山新勝寺境內ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹、（電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接續）

沿革

本校ハ成田山經營ニ屬スル敎育事業ニシテ私立成田山女學校ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ
明治四十一年二月成田山女學校設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナル、同四十四年二月成田山女學校廢止、成田高等女學校設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナル、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナル、昭和二年三月荒木校主名譽校長ニ推戴セラル、明治四十五年三月第一回卒業生ヲ出シテヨリ昭和十三年三月ニ至ル迄二十七回ノ卒業生ヲ出ス
此間校務主監ノ交迭五名、校長ノ交迭二名

設備

校地一、〇六八坪、校舍ハ木造二階建ニシテ普通敎室四・講堂一・特別敎室七・外ニ職員室・校長室其他各室アリ、其ノ坪數計四〇一坪

方針

本校ノ敎育方針ハ敎育勅語ノ御趣旨ヲ奉戴シテ其ノ實踐ヲ期シ、學業ヲ勵ミ、淑德ヲ重ンジ、將來健全ナル一家ノ主婦タリ母タルベキノ人格ヲ完成スルコトヲ主眼トス

敎育施設

- 敎授
  - 各學年敎授＝學則ニ據ル
  - 學習的施設
    - 課外敎授
      - 上級學校入學特別指導
      - 劣等生特別指導
    - 修學旅行
- 訓練
  - 要目＝貞淑・明朗・節制・感謝・勤勞
  - 施設
    - 朝禮・禮拜・參拜・墓參・護摩修業・慰問・奉仕・自治會・來客接待・新聞雜誌郵便物整理・校舍內外淸掃
- 連絡＝父兄會開催・家庭訪問
  - 文藝部＝學藝會・講演會・展覽會・圖書閱覽・映畫會・雜誌發行
- 校友會
  - 運動部
    - 種類＝庭球部・籠球部・卓球部
    - 事業＝指導練習・競技・遠足運動
  - 園藝部＝花卉栽培
- 校務
  - 敎務＝敎授訓練指導・監督・調査研究・衞生・統計等
  - 事務＝庶務・會計
- 訓話・揭示
  - 不動尊・埴生神社參拜
  - （皇軍必勝武運長久祈願）
  - 防空講話・防空演習
  - 故山內敎諭ノ出征歡送
  - 時局ニ對スル申合
  - 國民精神總動員講話聽講 十二回
  - （成田山開基一千年祭主催）
  - 國民精神總動員行事徒步强行
  - （小御門神社ニ往復徒步）
  - 出征家族ノ慰問並ビニ幫助
  - 慰問袋ノ獻納
  - 出征將兵ノ歡送迎
  - 故山內敎諭ノ聯隊葬並ビニ同町葬ニ參列
  - 故山內敎諭ノ慰靈祭
  - 本縣主催中等學校總動員參加
  - 町內戰死者町葬ニ參列

生徒狀況

卒業生數	學級數	生徒數	年度內入學者	年度內卒業者	卒業後ノ狀況
一、〇二〇	四	二一六	五五	二〇	各種學校入學者
		（昭和十三年六月末現在）	卒業者	三九二	職業從事者
					其ノ他

校主	名譽校長	顧問	校長	職員	經費
成田山貫首大僧正	荒木照定	荒木照定	笹川種郎	一九	昭和十二年度決算額 二二、七四二・九〇圓
		文學博士	佐藤國二		

成田高等女學校

第壹　位置並びに沿革

一　位　置

本校は成田町成田十五番地にあり。東に中學校を控へ、西に圖書館を擁し、背部卽ち北方は、成田山公園舊花園の丘腹に接して、亭々たる古松、巨木は鬱蒼と茂り、南は成田の街衢を展望し、夏は涼しく、冬暖かに眞に女子教育の場所として好適の所である。

二　沿　革

本校は成田山經營に屬する女子教育事業にして、もと「私立成田山女學校」として創立し、後「私立成田高等女學校」と改稱せられたものであるが、創立當時前貫首故石川大僧正校主兼校長となりてこれが經營の任に當られ、大正十三年一月同師遷化後は、現貫首荒木僧正校主兼名譽校長として其經營を繼承し、逐年發達益々其の實績を向上されつゝある。

本校には校主の補佐として理事を置く。理事中石川甚兵衛氏、三橋金太郎氏は創立當初より其の任に當り、石川氏は專務理事となる。(石川氏には、昭和十三年四月十七日病氣の爲め他界せらる。)

創立當初よりの沿革を列記すれば、大體次の通りである。

一　明治四十一年二月二十一日本縣知事より私立成田山女學校設置の件認可さる。

一　明治四十四年二月十三日文部大臣より私立成田山女學校を廢止し、成田高等女學校設置の件認可さる。

一　明治四十四年三月二十一日校則を制定す。

一　明治四十四年四月一日成田中學校教諭中島喜一校務主監兼教諭に任ぜらる。

一　明治四十四年四月一日、二日の兩日を以て二・三・四年の編入試驗を行ふ。

一　明治四十四年四月五日合格者八十四名に入學を許可し、

これを本科第四學年以下に編成し、同日始業式を行ふ。

一 明治四十五年三月第一回卒業生を出し、千葉縣知事臨席す。

一 大正元年十一月增築の講堂兼雨天體操場・理科教室・普通教室等竣工す。

一 大正二年九月校務主監兼教諭中島喜一休職を命ぜらる。

一 大正二年十月、理學士菅野皆可校務主監兼教諭に任ぜらる。

一 大正六年十一月菅野校務主監休職を命ぜらる。

一 大正六年十一月文學士中村安之助校務主監兼教諭に任ぜらる。

一 大正八年十月中村校務主監死去。

一 大正八年十二月文學士矢野太郎校務主監兼教諭に任ぜらる。

一 大正十二年十二月矢野校務主監依願解職。

一 大正十三年一月校主兼校長石川大僧正御遷化。

一 大正十三年二月成田山貫首荒木僧正校主の認可を受く。

一 大正十三年二月文學士笹川種郎校長に任ぜらる。

一 大正十三年五月（元神奈川縣立横濱第一中學校教諭）佐藤國二校務主監兼教諭に任ぜらる。

一 大正十四年三月笹川校長辭任。

一 大正十四年三月校務主監兼教諭佐藤國二校長兼教諭に任ぜらる。

一 大正十四年四月笹川前校長本校顧問となる。

一 大正十四年七月理事小野寺精三郎死去。

一 昭和二年三月校主荒木僧正を名譽校長に推戴す。

一 昭和二年四月理事三橋重郎兵衛病氣辭任す。

一 昭和十三年三月第二十七回卒業生五十二名を出す、これを以て卒業生累計一千二十名となる。

第貳　設備並びに施設

一　設　備

一 校地坪數

二 校舍建物坪數

三 設備（校舍ハ木造二階建）

室名	數	坪數	室名	數	坪數
普通教室	四	八一・五〇	校長室	一	八・七五
職員室	一	一二・二五	講堂（兼音樂室）	一	六〇・〇〇
事務室（兼宿直室）	一	三・七五	物置	二	一四・〇〇

昇降口	二	一二・五〇	小使室	一	六・二五
家事室	二	二二・〇〇	洗面所	三	三・二五
理科室	一	二二・五〇	便所	三	一〇・〇〇
器械標本室	二	一七・五〇	理裝室（兼傷生室）	一	三・七五
裁縫室	二	二二・五〇	作法室	一	一五・〇〇
圖書室	一	八・七五	寫眞暗室	一	一・〇〇

二　教育方針

本校の教育方針は、教育勅語の御趣旨を奉戴して其の實行を期し、學業を勵み、淑德を重んじ、女子たるの本分を遵守せしむるは勿論、特に貞淑・明朗・節制・感謝・勤勞を訓練の要目として、之が良習を養ひ、常に心身の鍛錬を怠らず、以て將來一家の健全なる主婦たり、母たるの人格を完成することに努めてゐる。

而して生徒の學資に關しては、可成父兄の負擔を輕減することに留意し、學資支辨に困難なる者の爲めには、貸費若くは補助制度を設け、奬學の爲めには特待生・優等賞・精勤賞等の制をも定め、又學科に於ては、正科の外隨意科目として手藝・挿花・茶の湯・按摩を課し、體操科には、薙刀を加へて武士道精神を體得せしめ、音樂科にはオルガン數基の外ピアノ二基を備へて、生徒に指導練習せしめ、校歌並びに創立記念日唱歌を制定して、本校の理想を明示し、併せて溫雅優美の情操を助長せしめることに努めてゐる。

三　校　則

第壹章　總　則

第一條　本校ノ修業年限ハ本科四箇年トス

第二條　生徒定員ハ二百人トス

第三條　休日ハ左ノ如シ

一　祝日、大祭日

二　日曜日

三　皇后陛下御誕辰

四　創立記念日二月十三日

五　夏季休業七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

六　冬季休業十二月二十六日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

第貳章　學科課程教授時數

第四條　本校ノ學科目ニ編物袋物挿花按摩茶ノ湯ヲ加ヘ隨意科目トス

第五條　學科課程及ビ教授時數左ノ如シ

學科目＼年	第一學年 毎週時數	第二學年 毎週時數	第三學年 毎週時數	第四學年 毎週時數
修身	二 人倫道德要旨作法	二 同	一 同	一 同
公民			一	一
國語	六 講讀習字作文書法	六 同	五 同	五 同
英語	三 讀方譯解書取習字	三 同	三 讀方譯解文法作書取	三 同
歷史	三 本邦歷史	三 外國歷史	三 外國歷史	三 同上國史
地理	三 本邦地理	三 同上	三 同	三 同上地理通論
數學	三 整數小數諸分數倍數等	三 約分比例	三 比例代數初步	三 開平方代數初步幾何初算
理科	二 植物動物	二 前學年の續生理衛生鑛物	三 化學	三 同
圖畫	一 自在畫	一 同幾何畫	一 同	
家事			二 衣食住	三 家政看病育兒等
裁縫	四 裁縫	四 方上	四 同	四 同
音樂	二 唱歌	二 同	一 復習唱歌	一 同
體操	三 普通體操遊戲	三 同	三 同	三 同
教育				一 理論の大要
計	二九	二九	三〇	三一
編物	(一) 編物	(一) 同	(一) 袋物	(一) 同
袋物	(一) 編物	(一) 同	(一) 袋物	(一) 同
挿花	(一) 挿花	(一) 同	(一) 同	(一) 同
茶湯	(一) 挿花	(一) 同	(一) 同茶湯	(一) 同
按摩			(一) 按摩	(一) 同

備考　編物、袋物、挿花、茶湯、按摩ヲ課外ニ於テ志望者ニ課ス

第六條　第參章　入學及退學

生徒募集ハ學校長期日及人員ヲ定メ之ヲ公告スベシ

第七條　入學志願者ハ本校所定ノ入學願書ヲ差出スベシ

第八條　一學年入學志願者ハ小學校長ノ内申ニ基ヅキ試問及身體檢査ニ依リテ之ヲ檢定ス

第九條　前條ノ試問ハ小學校卒業程度ニ依リテ之ヲ行フ

第十條　他校ヨリ轉入學ヲ願出デタル者ニハ缺員アル時ニ限リ人物學力ヲ檢定ノ上許可スルコトアルベシ

第十一條　入學ヲ許可セラレタル者ハ在學證書ニ戸籍謄本ヲ添ヘテ差出スベシ

（在學證書ハ印刷シアルヲ以テ省略ス）

第十二條　保證人ハ親權者若クハ後見人又ハ親族ニシテ一家計ヲ立テ本人ニ關シ一切ノ責ヲ負フニ足ルベキモノタルベシ

第十三條　保證人ノ住所學校所在地ヨリ一里以内ニ在ラザルトキハ一里以内ニ住所ヲ有シ一家計ヲ立ツル者ヲ以テ代理保證人ト定メ保證人連署ノ上之ヲ學校長ニ屆出ヅベシ

第十四條　學校長ハ必要ト認ムルトキハ保證人又ハ代理保證人ヲ變更セシムルコトアルベシ

第十五條　保證人若クハ代理保證人住所氏名ヲ變更シ又ハ改印シタル時ニハ直チニ學校長ニ屆出ヅベシ

第十六條　生徒退學セントスルトキハ其理由ヲ記シ保證人連

第十七條　署ノ上學校長ニ願出ヅベシ
生徒病氣其ノ他止ムヲ得ザル事由ニ由リ三ケ月以上出席シ難キ時ハ期間ヲ定メ休學ヲ願出ヅルコトヲ得
但シ期間ハ一ケ年間ヲ超ユルコトヲ得ズ

第四章　修了及卒業

第十八條　各學科ノ課程ノ修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績ヲ考査シテ定ムベシ
第十九條　卒業證書及修業證書ハ所定ノ形式ニ依ル

第五章　授業料及入學料

第二十條　一　授業料ハ月額金參圓トシテ毎月十日迄ニ之ヲ納メ特ニ其期日ヲ指定シタル時ハ其當日納ムベシ
但シ毎年八月ハ之ヲ徴收セズ
二　入學志願者ハ入學考査料金壹圓ヲ納附スベシ
第廿一條　入學料ハ金壹圓トシテ入學許可ノ際之ヲ徴收ス

第六章　賞　罰

第廿二條　品行方正學術優秀ナル者ハ特待生トシテ授業料ノ全部又ハ一部ヲ免除シ若クハ賞品褒狀ヲ與フ
第廿三條　學校長ハ左ノ各項ニ該當スル者ニハ退學ヲ命ズ
一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者
二　成業ノ見込ナシト認メタル者
三　出席常ナラザル者
第廿四條　規則命令ニ違背シ學校ノ風紀ヲ害スル者ハ其ノ輕重ニ依リ戒飭停學又ハ退學ニ處ス
第廿五條　生徒取締ニ關スル規定ハ學校長之ヲ定ム

第七章　附　則

第廿六條　本校則施行ニ關スル細則及ビ其ノ他必要ナル內規ハ學校長之ヲ定ム

四　昭和十二年度行事概要

四　月

三　日　神武天皇祭
五　日　入學式並ニ始業式擧行、新入生五十五名父兄附添手續ヲ了ス、終リテ父兄會
二年級以上級長選擧
六　日　學級委員・運動部委員・文藝部委員ノ選擧
七　日　二年級以上級長・一年級假級長任命
八　日　午後新更會ニ於ケル「花祭」ニ參加
十　日　朝日新聞社「神風」號ノ歐亞飛行完成奉謝不動尊參詣ニ參加
十七日　一年級二年級ハ長沼方面ヘ、三年級四年級ハ甚

兵衞渡方面ニ遠足
十九日　本日ヨリ毎週月曜第一時ノ初五分間ヲ割キ全校共通ノ問題ヲ以テ書取ノ一齊考査ヲ施行スルコトヽシ、其ノ第一回ヲ行フ
二十二日　笹川顧問來校第四年級ニ講話
二十七日　靖國神社臨時大祭ニツキ休業
二十九日　天長節拜賀式
三十日　故校主石川大僧正ノ墓參

五　月

五　日　四年級四十一名、校長・唐木・大木・小山ノ四教諭引率ノ下ニ午前七時成田驛發ノ列車ニテ關西旅行ノ途ニ上ル、往復一週間ノ豫定
八　日　午後二時ヨリ新更會館ニ於ケル音樂講演會ニ臨ミ、田邊尚雄氏ノ講演ヲ聽講
十一日　四年級旅行隊歸還
十七日　三年級ハ並木・山內・岡・中野四教諭引率ノ下ニ日光方面ヘ、二年級ハ平野・渡貫・小倉三教諭引率ノ下ニ箱根方面ニ出發、三年二泊二年一泊ノ豫定
十八日　二年級旅行隊歸還
十九日　三年級旅行隊歸還
二十一日　旅行報告會開催
二十六日　三四年級ハ午後ヨリ新更會館ニ於ケル海軍記念講演會ニ臨ミ、一二年級ハ朝日新聞社映畫ニ臨ム
二十七日　海軍記念日講話
二十八日　身體檢査ヲ行フ
二十九日　本日ヨリ四日間第一學期中間考査
三十一日　故校主石川大僧正ノ墓參

六　月

十　日　時ノ記念日講話
十二日　一年級ハ平野・小倉・岡・中野四教諭引率ノ下ニ千葉出洲海岸ニ遠足
十六日　午後ヨリ講堂ニ於テ映畫會
十七日　口腔檢査ヲ行フ
二十四日　笹川顧問來校三年級ニ講話
二十六日　全校三里塚牧場ニ遠足
三十日　故校主石川大僧正ノ墓參

七　月

十　日　本日ヨリ六日間學期末考査
十三日　公德週間ニ關スル講話

十七日　埴生神社大祭ニ參列
二十日　第一學期終業式
二十二日　本日ヨリ一週間夏季特別講習會開催、三四年級ハ英語・數學・國語・裁縫ノ四科全部出席、一二年級ハ英語・數學・國語ニツキ擔任教師ヨリ指定セラレタル者ニツキ學力補充教授
二十六日　校友會誌第二十一號出來生徒ニ配布
二十八日　夏季講習會終了式
三十一日　故校主石川大僧正ノ墓參

八月

一日　成田山事業團體主催皇軍戰勝武運長久ノ祈願大護摩修業、並ニ埴生神社參拜ニ全校參加
二十一日　本日ヨリ九日間庭球籠球各部ノ猛練習
二十九日　運動練習終了

九月

一日　第二學期始業式、終ツテ不動尊埴生神社ニ參拜
二日　山内教諭ニ動員召集令下ル
三日　中學校細谷教師ノ防空ニ關スル講演
四日　午前十一時ヨリ山内教諭ノ出征送別式
庭球籠球卓球ノ各部選手ハ午後佐原高等女學校ニ出張練習試合ヲ行フ
五日　山内教諭ノ出征ヲ歡送ス
七日　時局ニ對スル生徒各自ノ覺悟感想ヲ取纒ム
十八日　防空演習、學校ヲ中心トシテ行フ
二十日　自治會總會、時局ニ對スル申合誓約ヲ決定
二十一日　笹川顧問來校四年級ニ講話
庭球籠球選手ハ午後佐倉高女ニ出張練習試合ヲ行フ
二十五日　千葉高女ニ於ケル縣下女子中等學校競技會ニ參加庭球籠球選手健闘
三十日　故校主石川大僧正ノ墓參

十月

十三日　本日ヨリ國民精神總動員週間
十四日　生徒父兄ノ出征者家族ヲ慰問ス
十七日　神嘗祭、不動尊並ニ埴生神社ニ參拜。皇軍必勝ト武運長久ヲ祈願
二十五日、三十日　小御門神社ニ參拜、往復徒歩
教育勅語御下賜記念奉讀式、故校主石川大僧正墓參
三十一日　運動競技會擧行

十一月

三日　明治節拜賀式擧行
八日　本日ヨリ四日間第二學期中間考査
十七日　午後新更會館ニ於ケル小泉又二郎氏ノ講演會ニ臨ム
二十二日　自治會ニ於テ慰問袋献納ヲ議決
二十三日　新嘗祭
二十五日　笹川顧問四年級ニ講話
三十日　故校主石川大僧正ノ墓參

十二月

三日　山内教諭陸軍病院ニ於テ逝去ノ報アリ
四日　午後三時成田驛ニ故山内教諭ノ遺骨ヲ迎フ
十一日　故山内教諭ノ聯隊葬執行ニツキ校長四年級生徒ヲ引率參列
十四日　南京陷落祝捷旗行列
十六日　本日ヨリ第二學期末考査
二十三日　第二學期終業式
午後故山内教諭外一名ノ町葬ニ參列
二十四日　午前十時ヨリ成田山六事業團體主催ニテ本校講堂ニ於テ故山内教諭ノ慰靈祭ヲ擧行

昭和十三年一月

一日　四方拜祝賀式
八日　第三學期始業式、不動尊參拜、新勝寺ニ年賀
校主石川大僧正ノ墓參
十二日　午後ヨリ新更會館ニ於ケル堀少將ノ講演會ニ臨ム
三十一日　弘田龍太郎氏來校、一千年祭奉讃歌ノ指導アリ
故校主石川大僧正ノ墓參

二月

一日　不動尊・埴生神社參拜
十一日　紀元節拜賀式
十時ヨリ町主催ノ建國祭ニ參列
十二日　三四年級ハ縣主催中等學校總動員ニ參加、千葉中學ノ式場ニ臨ミ、分列及合同體操ヲナシ歸途佐倉驛ヨリ徒歩
十三日　創立記念日ノ擧式、記念學藝會開催
十七日　午後小學校ニ於ケル國民精神總動員講演會ニ臨ム
二十二日　印旛郡中等學校教育研究會ヲ本校ニ開催、午前十時ヨリ中等學校八、教員十名參觀ノ下ニ平野

中野教諭ノ國史科研究授業ヲ行ヒ、午後ヨリ批評研究會ヲ催ス
二十六日　各學年チブス豫防注射
二十八日　成田驛ニ故梅澤上等兵ノ遺骨ヲ迎フ
　　故校主石川大僧正ノ墓參

三月

一日　不動尊・埴生神社ニ參拜
三日　非常防火演習、特ニ聖影・勅語ノ取扱方ニ就テ職員ノミニテ演習
五日　本日ヨリ四日間學年末考査
六日　地久節拜賀式
七日　午後成田小學校ニ於ケル故梅澤上等兵ノ町葬ニ參列ス
十日　陸軍記念日、入學考査準備
十一日　本日ヨリ二日間來年度入學志願者七十八名ニ就キ考査ヲ行フ
十二日　入學考査成績發表、合格者五十五名
十五日　卒業生豫餞會
十六日　終業式、並ニ本年度書取賞ヲ授與、卒業生ノ運動選手ニ記念品贈呈
　　伊藤書記辭任ニツキ告別式ヲ行フ
十八日　第二十七回卒業證書授與式
十九日　卒業生職員謝恩大護摩修業
　　故校主石川大僧正ノ墓參
二十一日　春季皇靈祭
二十八日　成田山開基一千年祭開白、午前十時停車場附近ニ整列シ入山行列ヲ敬迎、上級生ハ本堂ニ於テ式典ノ前後ニ奉讃歌合唱
二十九日　本日ヨリ一千年祭奉仕事業トシテ公園東部ノ清掃ト記念品包裝作業ヲナス

五　一般的施設

學校長は職員を統率して分擔を定め、校務を執行し、併せて、生徒教養上に効果あらしむる爲め、左の施設を行つてゐる。

一、校務
　1　教務部（教授・訓練・指導・監督・調査・研究・衞生・統計等）
　　教務主任　首席教諭・教務係・全教諭・學級主任
　　學科主任
　2　事務部（庶務・會計）
　　書記

二、校友會
　1　文藝部
　　役員　部長（教諭）・委員（各級生徒各二人）
　　事業　學藝會・談話會・講演會・展覽會・圖書閲覽・映畫會・雜誌發行
　2　運動部
　　イ　庭球部
　　ロ　籠球部
　　ハ　卓球部
　　役員　部長（教諭）・委員（各級生徒各二人）
　　事業　指導練習・競技・遠足・運動會
　3　園藝部
　　役員　部長（教諭）・委員（各級生徒各二人）
　　事業　花卉栽培

三、自治會
　訓育を補成し、校風の改善を圖る爲め、職員指導の下に生徒をして之を組織せしめ、學習・運動・清潔・整頓・禮儀・規律につき其の改善を圖らしめてゐる。
　1　總務部
　　役員　調査委員（第四學年生中より十人）
　　一般に關する事項の調査立案をなし、學級部に指令してゐる。
　2　學級部
　　役員　實行委員（各級各七人）
　　總務部の指令により其の實行を期す。委員は其の級の選擧に依る。但し正副級長は選擧によらずして委員たること。

四　課外教授
　第三學年の初に志望を調査し、上級學校進學者及び一般學力不足者には國語・英語・數學の課外教授を行つてゐる。

五　修學旅行
　第一學期中、第四學年は關西地方に六泊一週間、第三學年は日光、湯本地方に二泊三日間、第二學年は箱根地方に一泊二日間、之を行つてゐる。

六　家庭連絡
　主として通知簿を利用し、時に父兄會を催し、必要に應じて父兄の來校を求め或は家庭を訪問してゐる。

七　朝會禮拜
　毎朝始業前講堂に於て朝禮の際、先づ正面に奉祀せる皇大神宮に禮拜して、臣子の誠を捧げることにしてゐる。

八　參拜、年賀、墓參
　埴生神社大祭日に參拜し、毎學期始業日には不動尊に參

拜する。

年頭始業日には新勝寺に參賀し、當日及毎月末日には故校主石川大僧正の墓前に燒香する。

九　大護摩修行及び坊入

報恩感謝の誠意を表するため、卒業式翌日不動尊に參詣大護摩修行をなし、ついで新勝寺に挨拶をなす。

六　時局對應施設

時局に關しては、常に訓話・掲示其の他により認識を高あて來たが、本年度中實施せる主なる事項を記せば、次の通である。

一　不動尊・埴生神社參拜・皇軍戰勝武運長久祈願

一　防空講話・防空演習實施

一　故山内教諭の出征歡送

一　自治會總會に於て時局に對する申合

一　國民精神總動員講話聽講　十二回（成田山開基一千年祭主催）

一　國民精神總動員行事小御門神社に往復徒歩參拜

一　出征家族の慰問、家庭幇助

一　陸軍恤兵部に慰問袋献納

一　出征兵士の歡送迎

一　故山内教諭の聯隊葬並びに同町葬に參列

一　故山内教諭の慰靈祭

一　本縣主催中等學校總動員參加

一　町内戰死者町葬に參列

第參　生徒狀況

一年度別郡別卒業生數

年度別＼郡別	印旛	香取	山武	千葉	市原	東葛飾	匝瑳	海上	長生	夷隅	君津	安房	他府縣	計
明治四四	一〇													一〇
四五	七		一								一			一二
大正二	一九											一	二	二一
三	二〇	一	一	一						一				四
四	二二	二			一	一								二六
五	二五								一					二九
六	二三	一		一					一					二七
七	二一			二		一		一				一		三二
八	二九		一											三一
九	一九	一	二			一						一		二六
一〇	二八			二	二		一		一			一	五	三八
一一	三三	三	一			一								三九
一二	三六	五					一		一					四七
一三	四〇	一												四四
一四	三八	三	二											四五
一五	三九	五	一											四六

昭和二	四七												
三	四一	三											
四	四二	五											
五	四〇	一	一										
六	四一	二	一										
七	三九												
八	四九	二											
九	四四	二	二										
一〇	四一	一	二	一	一								
一一	四五												
一二	四九	二	一										
計	八八七	四〇	一六	五	二	五	二	一	二	五	二	五	四九	一〇二〇

二　本年度（第二十七回）卒業生氏名（五二名）・

（昭和十三年三月卒業）

住所	氏名	生年月日	志望
遠山村駒井野	伊藤あさ	大正一〇、一二、二〇	家事
成田町上町	伊藤允己	同 二一、三、一五	進學
同	伊藤美枝子	同 一〇、八、二八	同
同 幸町	伊豆藏和代	同 二一、二、二〇	家事
同 寺臺	稲垣シン	同 一〇、九、一四	進學
安食町矢口	糸川富美	同 一〇、一〇、二七	家事
公津村下方	石橋ひさ子	同 一〇、一〇、一五	同

山二川村	武小池郡	石井久子	同 一〇、一一、二五	同
本埜村	笠神	岩井ふさ子	同 一〇、五、二	同
中郷村	新妻	岩館ミツヱ	同 二一、一、二	同
本埜村酒直	卜杭	井上公子	同 一〇、九、一五	同
成田町	土屋	長谷川美都子	同 一〇、四、二一	同
同	田町	西内つね子	同 二一、一、三	同
大森町	六軒	戸村フミ	同 一〇、八、二九	同
成田町	奥山	土井みゑ	同 一〇、八、一六	同
同	郷部	大木かつ	同 二一、三、一五	進學
安食町	安食	尾高くに	同 二一、一、二	家事
成田町	圓護臺	吉澤英子	同 二一、三、三一	就職
公津村	北須賀	吉岡とし	同 一〇、一一、二三	家事
中郷村	下金山	吉岡加壽子	同 一〇、二、一五	進學
豐住村	興津	高野尙子	同 一〇、八、一七	家事
八生村	大竹	根本志津江	同 一〇、二、一三	同
富里村	根木名	上草とよ	同 一〇、一〇、五	進學
成田町	田町	内海琴子	同 二一、三、三	同
香多	取郡	熊坂彌生	同 一〇、五、四	家事
安食町	須賀	葛生よし	同 一〇、五、一〇	進學
八生村	山口	山田恭子	同 二一、一、八	同
安食町	安食	山本武子	同 一〇、三、二九	家事
同	須賀	山本富	同 一〇、四、一四	同
木下町	幸町	山口幸子	同 一〇、五、一	同
久住村	荒海	山岡康子	同 一〇、二、一六	同
成田町	幸町	山田きよ子	同 一〇、六、一〇	就職
公津村	宗吾	丸ゆき	同 一〇、二、二二	家事
成田町	田町	藤崎藤江子	同 九、六、一三	同
八生村	公津新田	後藤まつ	同 二一、三、一〇	進學
安食町	安食	海老原角榮	同 一〇、一一、二一	家事
成田町	寺臺	寺内とみゑ	同 一〇、七、一四	同
同	花咲町	芦田より子	同 二一、三、二〇	就職
同	同町	足立益	同 一〇、七、三一	家事
安食町	安食	荒木英子	同 九、六、二四	同
同	安食	齋藤清子	同 一〇、八、一	進學
久住村	飯岡	澤田郁子	同 一〇、八、二一	家事
香取郡小御門村	高倉	櫻井篤子	同 九、九、二八	進學
八生村	松崎	湯淺溫子	同 二一、三、一五	家事
富里村	日吉倉	三橋よし	同 二一、一、一〇	同
成田町	田町	三須榮子	同 一〇、一〇、二三	進學
同	土屋	柴田恭子	同 一〇、五、二六	就職
希鎌村	和田	鹽田マチ	同 一〇、八、二一	家事

成田町本町　日暮里惠　同　二、三、三　同
同　上町　諸岡嘉子　同　一五、八、〇　同
同　東町　關根廣子　同　二、一、一〇　同
同　仲町　關川君代　同　一〇、一〇、三一　同

三　本年度卒業生の卒業後狀況調

（昭和十三年六月末調）

各種學校入學者	二〇
職業從事者	三
其他	二九
計	五二

四　本年度卒業生の各種學校入學調

（昭和十三年六月末調）

學校名	氏名
東京市。目白保姆學校	伊藤允己
千葉市。土岐裁縫女學校	伊藤美枝子
佐倉町。大石裁縫女學校	石橋ひさ子
千葉縣農會立家政女學校	岩井ふき子
千葉縣立佐倉高女補習科	大木かつ
佐倉町。大石裁縫女學校	吉岡とし
東京市。實踐女子專門學校家政科	上草とし
千葉高女家政專攻科	内海琴子
東京市。文化服裝學院	山本武子
東京府立第五高女專攻科	山本富
千葉市。土岐裁縫女學校	山岡康子
佐倉町。大石裁縫女學校	丸ゆき
東京市。中央工學校女子製圖科	後藤まつ
千葉高女家政專攻科	荒木英子
同	齋藤清子
東京市。文化服裝學院	櫻井篤子
東京市。中央工學校女子製圖科	湯淺温子
千葉縣農會立家政女學校	三橋よし
千葉高女家政專攻科	三須榮子
千葉縣立佐倉高女補習科	鹽田マチ

五　學級數並びに生徒數

（昭和十三年六月末現在）

學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
學級數	一	一	一	一	四
生徒數	五五	五五	五四	五二	二一六

六　各學年別生徒氏名

（昭和十三年六月末日現在）

◎級長　○副級長
△校友會委員　□自治會委員

第一學年（五十五名）

主任　中野美津子

○石川正子　成田　石川みつ　富里
石渡芳江　成田　石橋康枝　成田
伊藤と志　本埜　井上聰子　成田
飯田福代　安食　飯塚信子　成田
濱田英八生　戸村尙子　山武千代田
富樫トシ子　遠山　小川節子　香取日吉
小川尊子　成田　岡野友江　成田
大久保和子　本埜　大野益世　成田
大野政子　成田　大木てる　中郷
大木文子　中郷　大嶋信子　八生
大嶋トヨ　八生　◎渡邊悅子　成田
神崎百合子　遠山　神作とし子　成田
加藤和世　成田　田中英子　成田
大德斐子　久住　長澤千代子　久住
成毛とみ　豊住　卯之木基枝子　安食
内田さち子　山武千代田　上草よし　富里
山田悅子　八生　山崎美知　公津
山崎好子　香取多古　山崎久和子　成田
山本常子　安食　古川濤　成田
藤崎英子　遠山　藤崎文江　遠山
福田せつ　成田　小泉トシ　成田
後藤しづ子　八生　後藤雅子　安食
青野方子　久住　佐藤勝代　成田
三橋サト　遠山　水野綾子　成田

東海林かな子　木下
諸岡智惠子　成田
諸岡喜代子　同
杉野美彌　安食
一鍬田えつ　中郷
諸岡保枝　成田
關屋ふみ　富里

第二學年（五十五名）

主任　小倉治子

伊藤美代　豊住
岩澤なか　中郷
市川安子　成田
△□板橋眞利　永治
萩野惠　富里
○□大河邦子　久住
大木八重　布鎌
大野靜子　木下
荻原志津子　豊住
渡邊庸子　成田
梶谷良子　安食
加藤キヨ　中郷
加藤愛子　八生
川島ツネ　遠山
石原たみ子　成田
池田百合子　富里
板橋淑子　永治
飯島千惠　公津
本多ソメ子　遠山
△大木みち　安食
大木數子　成田
岡野みさを　安食
渡邊照子　成田
渡邊愛　成田
梶谷みや　安食
加藤ふみ　成田
川邊笹子　成田
香取伊久子　山武二川
△海保あき　安食
□内海幸江　成田
□桑原美代子　安食
山田道子　成田
松川みつえ　成田
□藤崎光子　成田
◎□江上よね子　成田
新井綾子　成田
坂本敦子　成田
澤田正子　中郷
柴倉花子　成田
清水悅子　大森
麻生欣　山武千代田
村島てる　公津
野口八枝　豊住
山内榮子　成田
山田春江　安食
丸一綾子　八生
古川スミ　香取小御門
小石川淑枝　遠山
△後藤君子　安食
寺内陽子　成田
佐久間こう　成田
櫻井信子　成田
三橋節子　成田
椎名喜久惠　大森
杉山久江　大森

第三學年（五十四名）

主任　渡貫幾久

岩館カヨ　成田
伊藤ふみ　公津
稲垣とし子　成田
□岩館ユキエ　中郷
伊藤ミツ　成田
稲垣イツ　成田

伊豆藏いき　成田
石原好惠　成田
石橋菅子　本埜
石井セイ　遠山
萩原ふさ　香取多古
戸田さた　成田
△大野のぶ子　成田
川崎きくゐ　公津
金子智江　中郷
横尾みつ　富里
吉岡トシ　中郷
武田宣子　公津
土屋藤子　成田
久保田かつ子　成田
△□山田アサ　成田
丸千代　公津
松本悅子　成田
越川美比　遠山
青木敬子　成田
△□木内隆子　成田
□湯淺靜子　永治
椎名嘉留惠　大森
島田茂子　成田
井上千代子　木下
池田芳　富里
石橋德子　成田
石井さた　豊住
飯田信子　遠山
長谷川トシ　成田
德永惠以子　成田
大島しん　遠山
□加藤文子　成田
神崎敏子　中郷
吉原敏江　成田
瀧澤滋子　中郷
吉岡ネヨ　成田
△行方和歌子　公津
安原よし　成田
山本政江　成田
丸昌子　公津
◎□藤崎尙子　成田
○□後藤博子　八生
佐瀨文　永治
湯淺ふさ子　成田
宮田照　成田
芝山政　公津
森谷ヨネ　成田
諸岡靜子　成田

第四學年（五十二名）

主任　岡志づ

岩井田鶴子　本埜
井上淑子　成田
石原八重子　成田
飯塚喜美江　成田
△□萩野美慧　富里
戸村芳子　山武千代田
友金たけ　木下
大谷正子　千葉睦
大木德子　中郷
大石春子　成田
小倉かつ子　成田
渡邊米子　成田
加藤キヨ　成田
○□勝田恒子　安食
高橋よし　公津
田中靜枝　成田
根本賤子　木下
山田君江　香取佐原
伊藤元　成田
泉田クニ　成田
石原みつえ　成田
□林まさ子　香取多古
戸村明子　山武千代田
□大木榮子　安食
□大野壽美子　成田
小川ふみ　豊住
小倉芳子　成田
□川名部俊子　成田
加藤みち子　成田
□梶谷朋子　安食
高橋竹子　八生
◎□大德久枝　久住
長塚房子　木下
松本かつ代　成田

増田治江　中郷遠山
△越川富子　木下藤崎正子
淺岡伸江　成田近藤總子
秋山靜子　遠山□秋山ふみ子
酒井千代　成田堺明子
△□平野俊　成田宍倉利子
森春　成田清宮谷枝子
泉水きい　公津△杉山芳枝
鈴木靜代　遠山伊藤智江
東葛飾平間正子
成田豊住

七　生徒出身地方別調

（昭和十三年六月末現在）

出身地＼學年	一年	二年	三年	四年	計
成田町	二一	一九	二五	一九	八四
安食町	五	七		五	一七
酒々井町			一		一
木下町				三	三
大森町		一	一		二
印本					
臼井町					
公津村	一	三	六	三	一三
八生村	三	二	三		八
富里村	三	二	二	二	九
中郷村	三	三	四	一	一一
本埜村	一		一	一	三
遠山村	四	二	二	二	一〇
久住村	一	一		二	四
豊住村	一	三	一	二	七
布鎌村		一			一
根郷村	一				一
永治村	一	二	一		四
香取郡	一	一	一	三	六
山武郡	三	二	一	二	四
匝瑳郡		一			一
東葛飾郡			一		二

八　生徒家庭職業別調

（昭和十三年六月末現在）

職業＼學年	一年	二年	三年	四年	計
農業	一三	二〇	一二	七	五二
商業	二〇	一八	二〇	二〇	七八
工業	三	三	三	七	一六
交通業		一	三		四
公務自由業	一八	一一	一二	一四	五五
其他有職		一			一
無職	一	一	四	四	一〇
計	五五	五五	五四	五二	二一六
長生郡	一				一
安房郡		一			一
他府縣	五	四	四	五	一八
合計	五五	五五	五四	五二	二一六

第四　歷代校主・校長　顧問・主監

一　校主

石川照勤（明治四十四年二月―大正十三年一月）
荒木照定（大正十三年二月―現在）

二　校長・顧問・主監

荒木照定（名譽校長）（昭和二年三月―現在）
中島喜一（校務主監）（明治四十四年四月―大正二年九月）
菅野皆可（同）（大正二年十月―大正六年十一月）
中村安之助（同）（大正六年十一月―大正八年十月）
矢野太郎（同）（大正八年十二月―大正十二年十二月）
笹川種郎（校長）（大正十三年二月―大正十四年三月）
佐藤國二（校務主監）（大正十三年五月―大正十四年三月）

笹川種郎（顧問）（大正十四年四月—現在）　佐藤國二（校長）（大正十四年三月—現在）

第五　職員

（昭和十三年六月末現在）

受持學科	職名	氏名	原籍	就職年月
	校主兼校長	荒木照定	千葉縣	大正十三年二月
	顧問	笹川種郎	東京府	大正十三年二月
	文學博士	佐藤國二	新潟縣	大正十三年五月
修身	教諭	平野太市	千葉縣	昭和九年六月
國語・歴史	教諭	並木淵太	千葉縣	昭和四年九月
數學・物理	教諭	唐木順三	長野縣	昭和十年一月
英語・歴史・教育・公民	教諭	綿貫幾久	千葉縣	昭和七年四月
博物・地理・作法	教諭	齋藤好雄	群馬縣	昭和十三年四月
圖畫・習字	教諭	岡しづ	山梨縣	昭和五年四月
家事・化學・地理	教諭	大木とし	千葉縣	昭和二年四月
裁縫	教諭	小倉治子	千葉縣	昭和三年十二月
裁縫	教諭	中野美津子	千葉縣	昭和六年四月
國語・歴史	教諭	溝口滿佐子	東京府	昭和十一年五月
體操	教諭	山滿壽	東京府	昭和四年四月
音樂	囑託教諭	小櫻吉	千葉縣	大正十五年四月
挿花	同	酒井文作	福島縣	大正十四年三月
按摩	同	神尾泰純	千葉縣	昭和十三年四月
	書記			
	學校醫	山內平治郎	千葉縣	明治四十四年四月
	學校醫（齒科）	三須重五郎	千葉縣	昭和五年五月

第六　經費

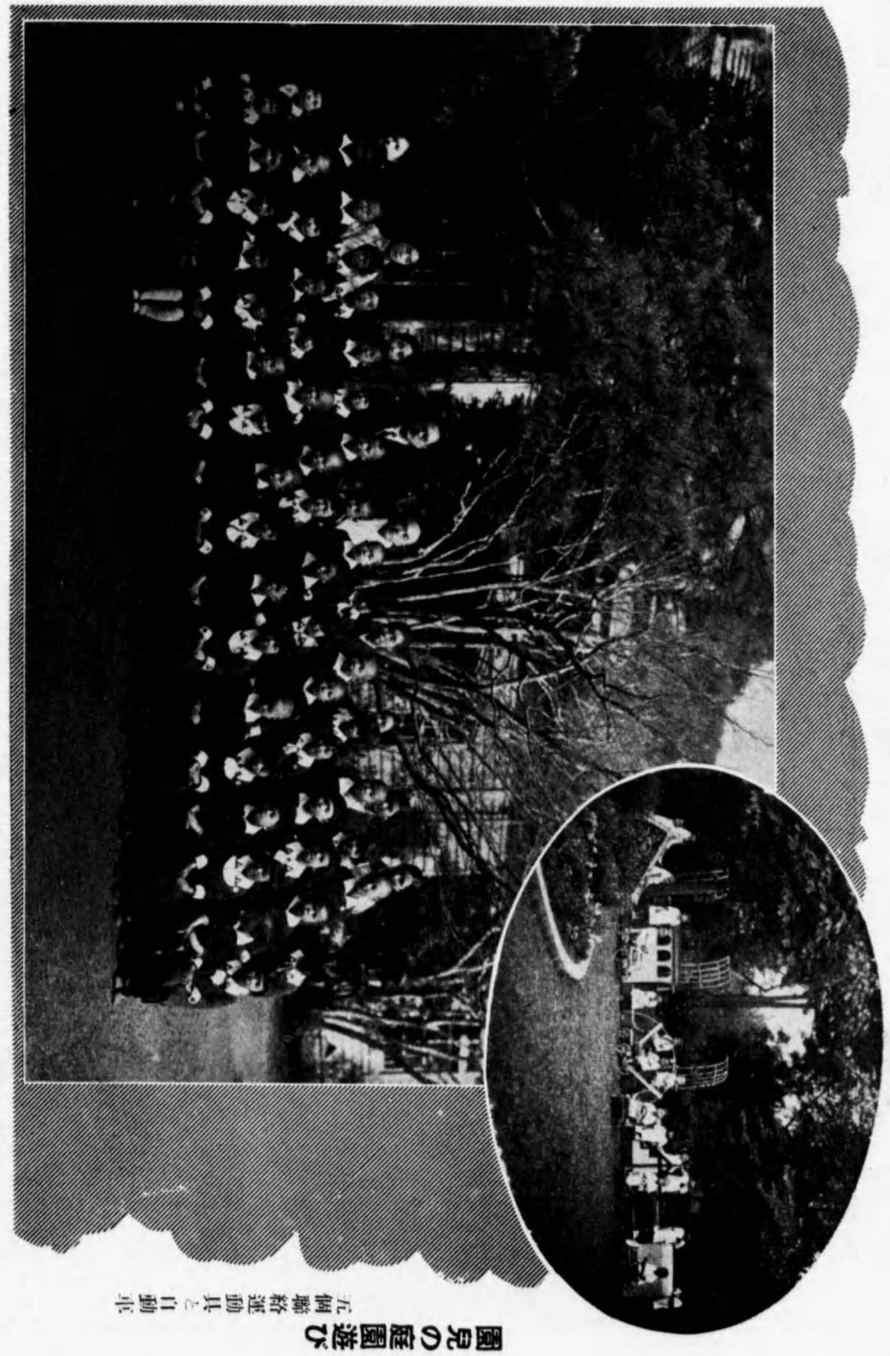
本校に於ける昭和十二年度經費決算は、次の通である。

昭和十二年度決算額	俸給	雜給	校費	修繕費	退職給與金死亡賜金	計
	一三、六一〇・〇〇円	四、五三一・〇〇円	二、二三三・六九円	一、六八〇・二一円	二、〇一〇・〇〇円	二二、七四一・九〇円

成田幼稚園

緒言 ……
緒論 ……
緒一 成田幼稚園々歴
緒二 明治十二年成田幼稚園一覧
緒三 位置及び沿革
緒四 設備
緒五 保育方針
緒六 保育中行事
緒七 保育の状況
緒八 保育の施設
緒九 園児数
緒十 園児出席状況
緒十一 園児年齢別
緒十二 本年度入園園児氏名
緒十三 本年度修了園児氏名
緒十四 園長・主任・保育者
緒十五 歴代園主・園長・主任・保育者
緒十六 各曲別園児氏名
緒十七 本年度卒園園児氏名
緒十八 園舎
緒十九 園庭
緒二十 遊具
緒二十一 教具
緒二十二 教材
緒二十三 教育費
緒二十四 教育費
緒二十五 教育費
緒二十六 教育費
緒二十七 教育費
緒二十八 教育費
緒二十九 教育費
緒三十 教育費
緒三十一 教育費
緒三十二 教育費
緒三十三 教育費
緒三十四 教育費
緒三十五 教育費
緒三十六 教育費
緒三十七 教育費
緒三十八 教育費
緒三十九 教育費
緒四十 教育費
緒四十一 教育費
緒四十二 教育費
緒四十三 教育費
緒四十四 教育費
緒四十五 教育費
緒四十六 教育費
緒四十七 教育費
緒四十八 教育費
緒四十九 教育費
緒五十 教育費
緒五十一 教育費
緒五十二 教育費
緒五十三 教育費
緒五十四 教育費
緒五十五 教育費
緒五十六 教育費
緒五十七 教育費
緒五十八 教育費
緒五十九 教育費
緒六十 教育費
緒六十一 教育費
緒六十二 教育費
緒六十三 教育費
緒六十四 教育費
緒六十五 教育費
緒六十六 教育費
緒六十七 教育費
緒六十八 教育費
緒六十九 教育費
緒七十 教育費
緒七十一 教育費
緒七十二 教育費
緒七十三 教育費
緒七十四 教育費
緒七十五 教育費
緒七十六 教育費
緒七十七 教育費
緒七十八 教育費
緒七十九 教育費
緒八十 教育費
緒八十一 教育費
緒八十二 教育費
緒八十三 教育費
緒八十四 教育費
緒八十五 教育費
緒八十六 教育費
緒八十七 教育費
緒八十八 教育費
緒八十九 教育費
緒九十 教育費
緒九十一 教育費
緒九十二 教育費
緒九十三 教育費
緒九十四 教育費
緒九十五 教育費
緒九十六 教育費
緒九十七 教育費
緒九十八 教育費
緒九十九 教育費
緒百 教育費

園 稚 幼 田 成



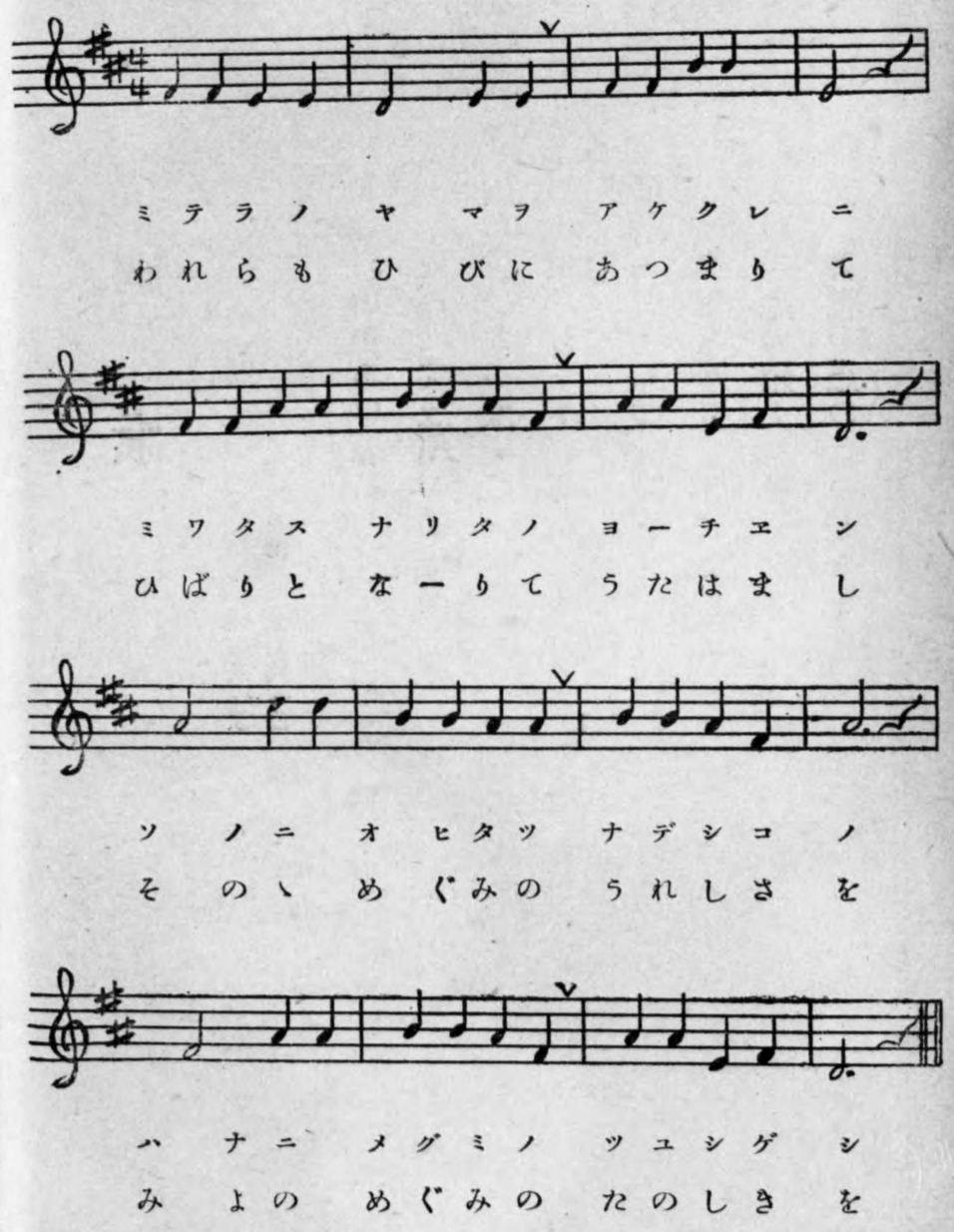
第三十三回修育保了年（昭和十三年三月修了）

園兒の遊戯

園歌

大和田　建樹氏作歌
小山　作之助氏作曲

御寺の山をあけ暮に
　見わたす成田の幼稚園
園に生ひたつ撫子の
　花にめくみの露しけし
我等も日々に集りて
　雲雀となりて謠はまし
そのゝ惠の嬉しさを
　御世の惠のたのしさを



昭和十二年度 成田幼稚園一覽

位置	千葉縣印旛郡成田町成田六百四十七番地、省線並京成成田驛ヨリ凡ソ三町ノ距離ニ在ル高燥閑雅ノ地（電話成田五九番）
沿革	本園ハ成田山ノ經營ニ屬スル幼兒保育ノ教育事業ニシテ明治三十八年六月成田尋常小學校内ニ開園、同時ニ前貫首故石川僧正園主並ビニ園長トナル、同三十九年六月現地ニ園舍新築移轉、大正十三年一月園主並ビニ園長示寂、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ園主並ビニ園長トナル、創立以來修了兒ヲ出スコト三十三回、此間主任ノ交迭三名
設備	敷地 三、一八九坪、遊園 二、九三〇坪、園舍ハ木造平屋ニシテ保育室三、遊嬉室一、玩具室一、靜養室一、其他各室四アリ、此坪數二五〇坪、外ニ職員住宅並ビニ附屬建物アリ
目的	幼兒ニ對スル心身ノ發達ニ留意シ善良ナル性情ト良習慣トヲ養フヲ主眼トス
入園	滿三歲ヨリ學齡ニ至ル迄ノ幼兒
保育施設	保育課目＝唱歌、遊嬉、談話、手技、觀察 訓練的保育〔自治心ノ養成、清潔整頓勤勞ノ習慣養成、團體的生活ノ馴致〕 體育運動〔自由運動＝滑リ臺、ハウス、太鼓橋、遠足＝本年度階段、トンネル其他谷津海岸地〕 情操陶冶＝ラヂオ、蓄音器、紙芝居、人形芝居等ニ依ル 衛生的施設〔園内外ノ清掃、共有具ノ消毒使用、手洗用トシテ藥水使用勵行〕 其他＝佐倉歩兵第五十七聯隊傷病兵慰問
保育料	修了＝一年乃至三年 保育料＝月壹圓
園兒狀況	修了兒總數 男六〇八 女五七九 計一、一八七 年度内入園兒 男三八 女三九 計七七 年度内修了兒 男二五 女二三 計四八 現在園兒數 昭和十三年六月現在組數 四 男六五 女六三 計一二八
園長	成田山貫首大僧正 荒木照定
主任	山口政子
職員	九
經費	昭和十二年度決算額 七、一五四・三五圓

成田幼稚園

第壹　位置並びに沿革

一　位置

本園は、成田驛を距ること約三町、成田町成田六百四十七番地の高燥なる地に在り、翠綠滴る森に包まれ、人家を離れた閑靜廣濶なる地域を占め、南西北の三面は成田市街に臨み成宗電車を崖下に瞰下し、東部は田圃が廣々と開けて清澄の氣漂ひ、夏は涼しく冬は暖かく、幼兒保育の地としては最適の場所である。

二　沿革

本園は成田山の經營に係る幼兒保育の教育事業であつて、前貫首故石川僧正の慈愛により、明治三十八年六月一日成田尋常小學校に於て開園され、同時に同師本園の園主兼園長となり經營の任に當られた。次いで明治三十八年十月地を向臺にトし、貳千八百四拾參坪といふ廣濶なる地域を敷地と爲し、文部省技手服部市太郎氏設計、同川田初太郎氏工事監督の任に當りて、同月二十九日新築工事に着手、翌三十九年二月二十八日竣工、六月一日移轉、此の日を以て本園の記念と定め、六月三日盛大なる落成式を擧行した。當日來賓として臨席せられたのは、貴族院議員子爵本莊壽巨閣下、同子爵板倉勝達閣下其の他二百七拾餘名であつた。大正十三年一月三十一日石川僧正示寂せらるるや、荒木現貫首代つて園主兼園長に就任した。

而して當時の入園兒は、其の數七十名、木村良主任としてこれが保育の任に當つたが、其の後明治四十年四月より猪狩ゑい、大正三年十月より山口政子主任として保育の任に當り以て今日に至つてゐるが、園兒の數も年と共に增加して、現在(昭和十三年六月)は百二十八名となり、創立以來年を重ねること三十三年、明治三十九年三月第一回の修了式を行つて以來、昭和十三年三月第三十三回の修了式までに其の修了兒

數は實に壹千壹百八拾七名の多きに達してゐる。

又創立以來理事として、石川甚兵衛、三橋重郎兵衛（幹事兼任、大正十四年病氣の爲め辭職）關川博道（園醫兼任昭和五年十二月逝去）の三氏の外、會計主任として、淺井儀助氏（昭和十年三月病氣の爲辭職、同十三年一月逝去）囑託を受けて就任、園長を輔佐されて來たのである。

第貳　設備並びに保育

一　設　備

本園々舍は綠の森に包まれた高燥なる地域に設置され、保育室は南面して北に廊下を控へ、庭園は全部芝生であつて塵は少しも揚らず、往來の雜音も聞えず、繁茂せる樹木や綠の芝生によつて、夏季は日光の直射、反射を極力緩和するやうに衞生的設備を整へ、更に又四ケ所に砂場や花壇、藤棚、小山等を設け、滑り臺、ハウス、太鼓、階段、トンネルの五種類聯絡運動員をも配置してゐる。

敷　地　三、一八九坪
園舍建坪　二五〇坪
遊　園　二、九三〇坪

園舍は木造平屋で其の內譯は次の通りである。

保育室　三（四〇、五坪）
玩具室　一（一、五坪）
遊戲室　一（四八坪）
園長室兼圖書室　一（三坪）
職員室　一（九坪）
靜養室　一（四坪）
應接室　一（四坪）
小使室附屬建物　（一七坪）
職員住宅　二（六三坪）
昇降口、電話室、廊下其他

二　保育方針

本園は幼稚園令に則り、幼兒の健康を第一とし、之に伴ひ將來の爲め幼兒時代よりの正しい用意を以て、善良なる性情と、良習慣を養ふを以て主眼としてゐる。

三　園　則

本園は滿三歲より學齡まで滿一年以上在園の者に入園を許し、其の心身の發達及び善良なる情操を涵養す。

入園期は四月、九月の兩度とす。

入園志願者には園所定の入園願書を交付し、簡易なる方法にて考査をなし選擇の上、三月末許可の通知をなし入園を決定す。收容人員は其の年度保育修了者と同數を選定し、四月入園後事故退園等の爲め人員に異動あるも臨時の補充を行はず、九月の新學期に於て同樣考査の上入園を許す。

入園證書

原籍
出生地
現住所
族籍
職業
幼兒氏名
生年月日

右は今般貴園に入園御許可相成候に就ては本人に關する一切の事件拘者引受可申候也

右保護者
千葉縣印旛郡成田町何番地

昭和　年　月　日　何　某㊞

私立成田幼稚園長荒木照定殿

經歷書二項目

一　生父健否　年齡
一　生母健否　年齡
一　兄姉
一　弟妹
一　生母ノ乳　乳母ノ乳
一　牛乳　里子
一　生來重病ニカヽリタルコトノ有無
一　性質習慣ノ著シキモノ

右報告申上候也

昭和　年　月　日　幼兒保護者　何　某㊞

私立成田幼稚園御中

保育料
保育料は月額金壹圓とす。
休園日

（大祭祝日以外）

夏季休園　自七月二十一日　至八月三十一日
冬期休園　自十二月二十五日　至翌年一月七日
學年末休園　自三月二十一日　至四月三日
法會式日　七月八日
氏神祭　七月十七日

四　保護者心得

一　家庭と幼稚園の連絡に關する事
　家庭と幼兒保育の連絡に就いては、相互に協力するにあらざれば効果を得る事能はざるはいふまでもなき事なるべし、されば家庭と幼稚園とは常に氣脈を通じ、內外相應じて保育の効を全くせざるべからず。
　今彼此の連絡に關し當園の冀望を掲ぐ。
一　家庭より當園の事に付き疑義あるか、又は幼兒の事に關して擔任保姆に問合せ協議せられたき事あらば、遠慮なく口頭又は書面にて申出でられたし。
一　父母兄姉並びに直接幼兒の保育に關係ある人は、時々來園して當園の實況を視察し、これを家庭保育の參考にせられんこと本園の最も冀望する所なり。
　又春秋の頃子供の會を開き、保護者諸君の來會を請ふを例とせり、これ一は實地保育の模樣を諸君に示し、又一は諸君より家庭の狀況を聞き、幼兒の保育に關し相互に懇話せんが爲めなり。日時は其の都度通知すべければ成るべく來會ありたし。
一　幼兒付添人に關する事
　本園に於ては付添を斷る。
　但し往復途中の送迎は隨意たるべし。
一　幼兒の遊嬉に關する事
　遊嬉は實に幼兒の仕事にして、心身の發達はこれによるものなれば最も自由快活にこれを爲さしむること必要なれども野鄙亂暴に涉るものはこれを制せざるべからざるは勿論、玩具等に就きても亦よく其の良否を選定し、繪本の如きは色彩の良否、說明せる字の如何により幼兒を害する事は恐るべき事なれば、其の內容を充分に取調べられて、幼兒に與へられる樣注意せられたし。
一　幼兒服裝に關する事
　服裝は園制定のものを着用する事。
一　幼兒の携帶品に關する事
　幼兒在園中に用ふべき器具其の他總て園のものを使用することなれば、手拭鼻紙等必要なるものゝ外は幼兒に携帶せしめざる樣致したし。
　帽子辨當携帶品、マント靴等にも必ず氏名を記されたし。
一　幼兒の往復に關する事
　幼兒の往復は近來自動車、其の他の爲めに故障生じ易ければ、風雨其の他注意保護せられたし、格別の事情なき限り必ず徒步せしめられたし。
一　幼兒の缺席並びに家庭の疾病等に關する事
　幼兒の缺席一週間を超ゆるときは、口頭又は書面にて詳に其の事由を屆出でらるべし。凡て多人數の集る所は充分注意を爲すにあらざれば、或は惡疾傳染の媒をなす虞あるを以て幼兒の家族に傳染病者ある時は、直ちに其の病名を記して屆出でられたし。
　但し玆に傳染病と稱する痘瘡及び假痘、猩紅熱、腸窒扶斯發疹窒扶斯、虎列刺、赤痢、ヂフテリア、ペスト等をいふ。
一　保護者の異動に關する事
　保護者の變更は勿論、其の轉任改氏名等異動ありたる時は直ちに屆出でられたし。

五　年中行事

一月八日　新年始業式
二月十一日　紀元節（梅の節句）
三月六日　地久節
三月二十日　保育修了式
四月七日　入園式
四月八日　花祭り
四月二十九日　天長節
五月五日　端午節句と幼兒愛護日
六月一日　創立記念日
七月七日　七夕祭
十一月三日　明治節
　其の他一回汽車、電車、自動車使用の幼兒遠足

六　保育の狀況

　昭和十二年度は、全幼兒百二十六名中四十八名保育修了、引續き新入園者激增、同十三年六月末現在では百二十七名となつた。
　園兒は年齡別によつて之を三組に分ち、更に之を四組に編成して保育してゐる。保育修了までは同一保姆之を擔任してゐる。
　保育の時間は、季節によつて一樣でないが、長きは五時間短きは夏季の二時間である。

保育は幼稚園令施行規則第二條に依り、唱歌、遊嬉、談話手技、觀察の五項目を保育課目として、各部に聯絡を取りつゝ行つてゐる。

訓練的保育としては、登園、下園其の他身廻り品の始末等より、自治心を養ひ、庭の落葉のかき集め、花壇の世話等により、勤勞、清潔、整頓の良慣並びに幼兒の德性を涵養し、尙ほ進んで團體的生活にも慣れしめるやうにしてゐる。

體育運動としては、綠の森に包まれた約三千坪の遊園で、遊ぶのみにして既に充分な運動であるが、更に園內の此處彼處に、數多き運動具を設備して自由に運動せしむる外、季節的運動をも行はしめ、秋の頃には幼兒用熊手を手にして庭の落葉掃きを行ひ運動せしめてゐる。

衞生的方面としては、常に園內外の淸淨に多大の注意を拂つてゐる外、幼兒をして知らず〳〵の裡に衞生的良慣を育成するために、登園の際は必ずハタキにて途中の塵を拂はしめ次に携帶品の整理、藥水にて手を淸めたる後に、幼兒相互の遊びを開始し、食事の前後の手洗ひ、口漱ぎより、幼兒の最も頻繁に取扱ふ積木の如きも、藥水にて洗ひ、强烈なる日光に曝したる後使用せしめてゐる。又ボールドの如きも、可成室內設置のものを避け、庭園用の小黑板を芝生の庭に備へ付け、淸き外氣に觸れつゝ自然を友として描かしめてゐる。

尙ほ情操的方面の保育としては、音樂的に意を用ひ、ラヂオの應用並びに蓄音器レコード等によりて之を行つてゐる。

七　保育の施設

本園の保育に關しては、各種教辨物、玩具、運動具其の他の施設に依つて之を行つてゐるが、更に昭和十一年度より考案中であつた教育的紙芝居は、本年度に至り漸く完成、最初の目的通り紙芝居兼人形芝居兩方面の使用が出來ることゝなり、變化の多い本園新案の五種類聯絡運動具と共に、幼兒保育上に多大の貢獻をなすことゝなつた。是れは昭和十一年度修了兒の保護者より寄贈されたものであるが、更に同十二年度の修了生によつて新案タンク二臺寄贈され、十一臺の自動車に加へて更に此の新式タンクが物珍らしく幼兒に利用さるゝことゝなつた。此の新式タンクは、三轉車に依つて運轉し、其の動きにつれて大砲の音を發する仕組みのもので、廣い遊園內は之によつて幼兒に一入の興味を添へ、體育增進上に多大の效果を與へてゐる。

更に施設上特筆すべきことは、遠足と傷病兵慰問である。

遠足　昭和十二年五月十五日谷津遊園へ遠足した。

京成電車を一臺借りきりで出發したが、車中園兒の喜びは啻ならず、途中習志野原頭に活躍する騎兵の勇壯な姿に、思はず歡聲を揚げ、移り行く風物を樂しみつゝ谷津海岸に着、海岸の見晴臺にて足を休むる中、干潮となつたので、幼兒保護者も海岸に下り海水に浸りつゝ「あさり」堀りに打興じ、ボートに乘る者、動物に親しむもの、思ひ〳〵の樂しみを味ひて歸途に就き、午後の日足もまだ高い四時頃成田驛着解散、思ひ出多き遠足を終つた。此の日の人員は二百名であつた。

慰問　昭和十三年三月十五日、そのふ會及び河合食堂に於ける佐倉步兵第五十七聯隊傷病兵慰問の催に合同、昭和十三年三月修了すべき幼兒四十八名は、そのふ會々長其他幹部の方々及び河合食堂の樂隊と、幼兒用樂隊とに步調を整へて、成田幼稚園より町內を行進、京成電車に乘車して佐倉驛着、樂隊の音勇ましく行進した。

傷病兵の方々には、廊下又は庭に集つて幼兒を迎へてくれた。幼兒よりはお見舞として手づから「グリコ」を差上げ、更に戰時にふさはしい自由畫、覺束ない筆の運びの慰問文、幼稚園に於ける手工の鯉のぼり、河合樂隊幼兒の樂隊に合せて「兵隊さん鯉のぼり」などの遊嬉をお目にかけたが、何れも皆涙を以て幼き人の好意を感謝され、又兵士の方々と共に記念撮影も行ひ、一日も早く全快せられるやう挨拶して、お別れした。

途中又樂隊に導かれて、樂しく無事慰問旅行を終り、深い思ひ出を永く幼兒の心に刻み込むことの出來たことは、偏にそのふ會の方々や、河合樂隊の御骨折に依ることゝ感謝に堪へない次第である。

第參　園兒狀況

一　年度別修了兒數

明治三十八年度	男	一三	
	女	九	計　二二
明治三十九年度	男	二三	
	女	一五	計　三八

明治四十年度	男	二二	二二	計	四二
	女	二〇			
明治四十一年度	男	一二	一二	計	二七
	女	一五			
明治四十二年度	男	二〇	二〇	計	三九
	女	一九			
明治四十三年度	男	一七	一七	計	三七
	女	二〇			
明治四十四年度	男	二三	二三	計	四〇
	女	一七			
大正元年度	男	一九	一九	計	三八
	女	一九			
大正二年度	男	二九	二九	計	五五
	女	二六			
大正三年度	男	一三	一三	計	二九
	女	一六			
大正四年度	男	一九	一九	計	二五
	女	一六			
大正五年度	男	一五	一五	計	三五
	女	二〇			
大正六年度	男	二二	二二	計	四〇
	女	一八			
大正七年度	男	二一	二一	計	四一
	女	二〇			
大正八年度	男	二二	二二	計	四五
	女	二四			
大正九年度	男	二二	二二	計	四二
	女	二〇			
大正十年度	男	二二	二二	計	四二
	女	一九			
大正十一年度	男	二〇	二〇	計	三二
	女	一二			
大正十二年度	男	一八	一八	計	三五
	女	一七			
大正十三年度	男	二六	二六	計	五〇
	女	二四			
大正十四年度	男	二一	二一	計	四二
	女	二一			
大正十五年度 昭和元年度	男	二〇	二〇	計	三七
	女	一七			
昭和二年度	男	二一	二一	計	三七
	女	一六			
昭和三年度	男	二八	二八	計	四一
	女	二三			
昭和四年度	男	一五	一五	計	三〇
	女	一五			
昭和五年度	男	一八	一八	計	三四
	女	一六			
昭和六年度	男	一五	一五	計	三一
	女	一六			
昭和七年度	男	一三	一三	計	二一
	女	八			
昭和八年度	男	二三	二三	計	二五
	女	二二			
昭和九年度	男	二三	二三	計	二三
	女	一〇			

昭和十年度	男	一三	一三	計	三八
	女	二五			
昭和十一年度	男	二一	二一	計	三一
	女	一〇			
昭和十二年度	男	二五	二五	計	四八
	女	二三			
計	男	六〇八	計一、一八七		
	女	五七九			

二　本年度入退園調

性 ／ 入退	入園	修了	半途退園	死亡	年度末現員
男	三八	二五	二		四二
女	三九	二三	一	一	三六

附　昭和十三年六月末現在園兒數
男　六五　女　六二　計一二八

三　本年度修了兒氏名

保育期間	修了幼兒姓名	保育期間	修了幼兒姓名
三年	小野寺賢藏	三年	石井雅子
三年	瀧澤仁	十ヶ月	大野道夫
三年	日暮イツ	十二年	小林義明
三年	三須利子	二年	横山正規
三年	青木武志	二年	諸岡照夫
三年	山本文江	二年	芦田孝志
三年	鈴木輝子	二年	林カネ子
三年	小川一夫	二年	林昌樹
三年	若葉美子	二年	小川榮一
二年	石橋君子	二年	門倉孝次
二年	瀧澤澄夫	二年	山崎祐子
二年	佐久間正江	二年	齋藤國彥
二年	大川季夫	二年	高根俶子
一年	青砥とし子	二年	藤倉慶一
一年	桑田宏一	二年	宮田清
一年	安井千壽子	一年	長谷川靜宏
一年	小川明子	一年	桑田富美
一年	喜多村和子	一年	河野照雄
一年	戸村柘道	一年	岩本惠美子
一年	森澤義明	一年	木原美代子
一年	宮澤勝夫	一年	大木定子
		一年	海老原輝子
		一年	小倉由江

一年中根照一　九ヶ月　阿部賢典
男二五　女二三　計四八

四　各組別園兒氏名と保護者

（昭和十三年六月末現在）

壹の組（六歳―七歳）男三六　女二四　計六〇

壹　男二三　女一七　計四〇

幼兒年齢	保護者
奥主盛富　七	奥主市太郎
德永一　六	德永操
田中浩子　六	田中勇
大澤眞澄　七	大澤龍一
加藤喜子　七	加藤健三
紺谷秀雄　七	紺谷勝雄
若葉欣保　七	若葉誠一
鶴田ケイ子　六	鶴田義治
齋藤文雄　七	齋藤啓信
郡司久惠　七	郡司榮
增淵恭子　七	增淵衛
福田芙美子　七	福田一雄
土井陽子　七	土井嘉一
粕川誠市　七	粕川勝
瀧澤孝始　七	瀧澤誠
大竹亮　七	大竹寛
飛田信正　七	飛田贊之助
高野貞亮　七	高野和伊知
川島喜三郎　六	川島重雄
古川祐子　七	古川一二
石原卓　七	石原武夫
石原誠治　七	石原茂明
龍崎智英　七	龍崎明
山田よし子　七	山田末治郎
守屋てる　七	守屋忠平
櫻井博　七	櫻井忠治
竹田弘平　七	竹田正吉
山本富美子　七	山本なを
小田垣房江　七	小田垣松三郎

貳　男一三　女七　計二〇

幼兒年齢	保護者
紺谷誠　七	紺谷はつ
阿部良子　七	阿部留吉
伊藤俊榮　七	伊藤美榮
阿諏訪房子　七	阿諏訪辰男
佐藤治雄　六	佐藤保雄
吉田康雄　六	吉田延秋
新井活右　六	新井德次郎
龜谷秀夫　六	龜谷榮助
山田麗子　七	山田孝治
增村文甫　六	增村清
京須俊一　七	京須勝義
土屋精一　七	土屋美弱
河合靜子　七	河合富士
松室利治　七	松室東洋
中里隆子　七	中里ゆき
諸岡智惠子　七	諸岡康
稻岡次雄　七	稻岡小二郎
安藤雄三　七	安藤佐中郎
横山金次郎　七	横山なつ
依田敬明　七	依田司郎

貳の組（五歳―六歳）男一九　女二九　計四八

幼兒年齢	保護者
三橋哲二　六	三橋善藏
長谷川好代　六	長谷川錄太郎
林虔樹　六	林正雄
伊藤悅子　六	伊藤庫治
瀧澤孝　六	瀧澤榮亮
大澤伸存　六	大澤龍一
大川章惠　六	大川益雄
久保田陽子　六	久保田潔
鈴木信子　六	鈴木藤吉
土井喜久子　六	土井豐
桑原惠美江　六	桑原一郎
高橋保　六	高橋太一郎
石川澄子　六	石川虎之助
深山富美子　六	深山閏岩
寺内民江　六	寺内政義
門倉ケイ　六	門倉福松

石原春男	六	石原文造
石原一久	六	石原一義
桑田伸一	六	桑田宗一
宮嶋章	六	宮嶋静
青野のふ子	六	青野俊一郎
小泉博嗣	五	小泉國衛
大塚勝彦	五	大塚榮三郎
牧野幸子	五	牧野榮三郎
高根博子	六	高根豊吉
磯山芳子	六	磯山茂
小川文子	六	小川忠
近藤喜美子	六	近藤博
齋藤包夫	六	齋藤源兵衛
小川榮	六	小川良春
田中千代子	六	田中國太郎
福智久子	六	福智七郎
大見川京子	六	大見川庄藏
金澤保吉	六	金澤定一
金澤壽男	六	尹炳城
齋藤毅	六	齋藤利雄
鈴木康尹	六	鈴木恒夫
瀧澤幹	六	瀧澤千代
佐久間千晴	六	佐久間弘
秋山歓一	六	秋山作一郎
内海芳子	六	内海喜男
宮田惠子	六	宮田久男
紺谷千代子	六	紺谷勝雄
三橋道子	六	三橋麻治
三橋和子	六	三橋茂
木内節子	六	木内芳男
増田富美子	六	増田義雄
吉田瑞江	六	吉田春吉

参の組（四歳―五歳）男一〇　女一〇　計二〇

大塚仁三	五	大塚謹三
諸岡智惠子	五	諸岡常吉
信田揚子	五	信田繁
關川克巳	五	關川良人
宇井佐知子	五	宇井聖
渡邊正生	五	渡邊正
小川静子	五	小川房吉
三須秀男	五	三須重五郎
庄司見友次	五	庄司見京次郎
新井義生	五	新井勇
高須賀伊藏	五	高須賀益
日暮芳正	五	日暮勝重

伊藤雅子	五	伊藤きん
豊田千惠子	五	豊田眞一郎
井清	五	石井勝男
清宮澄子	五	清宮清
淺井純子	四	淺井義一
大澤静枝	四	大澤龍一
高田敦生	四	高田定吉
古矢妃壽奈	四	古矢誠助

第五　職員

職名	氏名	原籍	就職年月
園主兼園長	荒木照定	千葉縣	大正十三年二月
主任	山口政子	徳島縣	大正三年十月
保姆	若命喜美	神奈川縣	大正十年三月
保姆	瀧澤とし	千葉縣	大正七年十月
保姆	高田よしゑ	千葉縣	大正十年五月
保姆	西内せゑ	千葉縣	昭和六年四月

第四　歴代園主・園長・主任

園主、園長	
石川照勤	自明治三十八年四月至大正十三年一月
荒木照定	自大正十三年二月至現在
主任	
木村良	自明治三十八年五月至同九月
猪狩ゑい	自明治四十年四月至大正三年三月
山口政子	自大正三年十月至現在

園醫（醫學博士）	保姆	千葉あや	千葉縣
	保姆	高岡たい	千葉縣
		藤崎公道	千葉縣

昭和十二年四月
昭和十二年四月
昭和六年一月

第六　經費

本園には豫算なるものがない。從つて年により其の金額は、一樣でないが、臨時の支出なき限りは、毎年大體左記決算額の金額によつて經營してゐる。

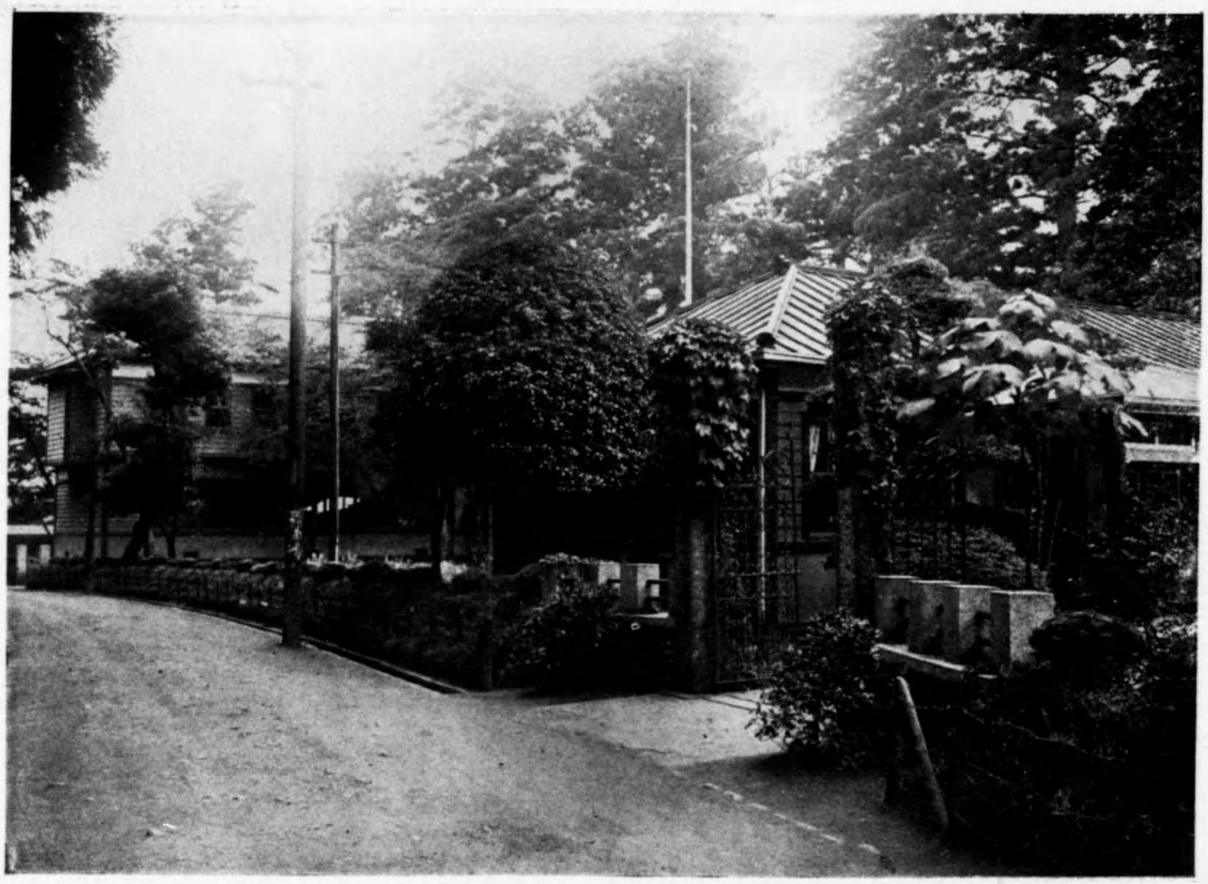
昭和十二年度決算額　七、一五四・三五圓

成田學園

成田學園々歌
昭和十二年度成田學園一覽
成田學園平面圖

目次

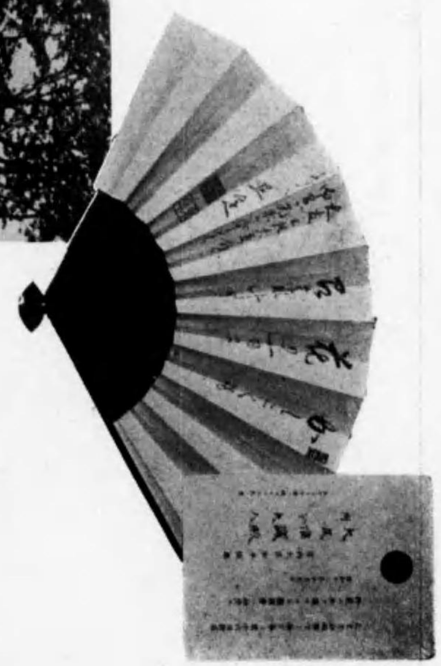
第壹　位置並びに沿革……八二頁
一　位置……八二
二　沿革……八二
第貳　設備並びに教護……八四
一　設備……八四
二　教護の目的……八四
三　入園退園に關する內規……八四
四　教護に關する狀況……八五
五　時局內外刺戟防遏施設狀況……八五
第參　教護の成績……八六
第四　生徒狀況……八〇
一　入園時に於ける調査……八〇
二　本年度入退園狀況……八一
三　生徒狀況一覽……八一
四　生徒疾病狀況……八一
五　退園生徒の狀況……八三
六　退園生徒よりの通信……八三
七　退園生徒の戰死……八六
第五　歷代園長並びに主任……八六
第六　職員……八九
第七　經費並びに基本金積立……八八
一　昭和十二年度決算……八八
二　基本金の積立……八八



成田學園

行旅學修

（チ＝前校學兵工戸松）



龍樓御會釣
山主の祝句
其狀波に

成田學園々歌

大友惟誠作歌
弘田龍太郎作曲

一

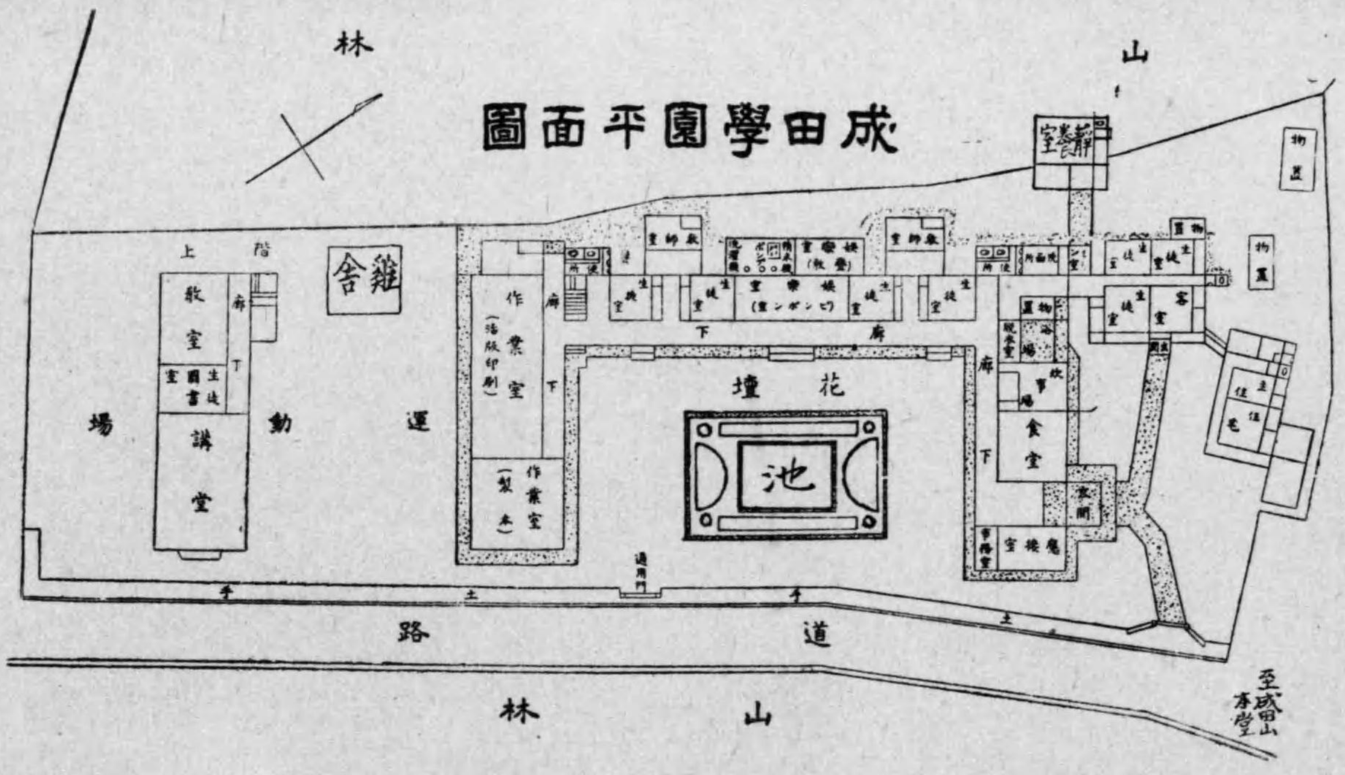
天地の恵みを籠めて　鳴り出づるみ寺の鐘に
濁りなき心をいだき　眞直なる希望に生きん
教の道の嬉しさよ

二

仰ぎ見る御姿尊く　さゝぐるは降魔の劒
我が胸に正しく映し　曇りなき叡智磨かん
教の園の明るさよ

三

法燈のかゞやき絶えぬ　霊境は淨くすがしく
聳え立つ杉の林に　剛毅き性いよゝ鍛へん
教の窓の尊さよ



位置	千葉縣印旛郡成田町成田四〇二番地　成田山新勝寺境内ノ西北部（電話成田一〇三番）

昭和十二年度　成田學園一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田四〇二番地　成田山新勝寺境内ノ西北部（電話成田一〇三番）

沿革

本園ハ成田山ノ經營ニ屬スル少年教護事業ニシテ千葉感化院ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ

明治十九年五月千葉感化院トシテ千葉町ニ創立、同二十一年四月成田山ノ經營ニ移管、同時ニ前々貫首故三池僧正院長トナル、同二十七年六月三池院長示寂、同年同月前貫首故石川僧正院長トナル、同四十一年三月成田山感化院ト改稱シ現地ニ院舍ヲ新築シテ移轉、同四十三年九月教育勅語謄本並ニ戊申詔書謄本下附セラル、大正十三年一月石川院長示寂、同年二月現貫首荒木照定其ノ後ヲ承ケテ院長トナル、昭和三年三月成田學園ト改稱、同十一年十一月創立五十周年記念祝典擧行、大正十一年以降宮内省・内務大臣（明治四十二年以降）、千葉縣知事・其他官廳並ニ諸團體ヨリ年々御下賜金又ハ助成奬勵金品ノ交付アリ。創立以來主任ノ交迭六名（内副院長四名、主任二名）

設備

土地總坪數三、一三五坪、此ノ内譯建物敷地九七二坪、運動場三五〇坪、耕作地（農業實習地）六七五坪、其他一、一三八坪、建物ハ木造平屋建並ニ木造二階建ニシテ其數六棟二九二坪、園生宿舍、講堂、教室、作業場、靜養室、職員室、應接室其他各室ニ分レ、外ニ職員住宅アリ。

目的

不良行爲ヲ爲シ又ハ爲ス虞アル兒童ヲ收容シ少年教護法ニ準據シテ之ヲ保護教養シ其ノ資質ノ改善向上ヲ圖ルヲ目的トス

入園退園

入園ニ滿七歳以上十六歳未滿ノモノ

退園ニ行爲改善後半年乃至壹ケ年ノ成績ヲ考慮シテ之ヲ定ム

教護

日課

午前五時　起床・掃除

同　六時　ラヂオ體操

同　六時卅分　御拜ニ宮城・大廟・不動尊・祖先

訓話ニ御拜前行フ

同　七時　朝食（職員兒童共食）

自午前八時　至正午　學科（特ニ讀方・算術・珠算・書方・綴方等ニ重キヲ置ク）

正午　晝食（同前）

自午後一時　至同四時　實科（農業實習・活版印刷・簡易製本・手工（心身鍛錬勤勞養成ヲ主眼トス））

夕食（同前）

自同六時　至同八時　學科ニ個人指導

同　八時　禮拜・訓話・就床（年長者ハ九時）

施設

時局對應施設

- 說話・寫眞・揭示
- 不動尊・埴生神社ニ參拜
- 武運長久・國威宣揚ノ祈願
- 出征將兵ノ歡送迎
- 戰死者町葬ニ參列燒香
- 慰問品製作ノ手傳

其他

- 献金
- 其他

委托生ニ町内職業見習

娯樂運動ニ庭球・野球・ピンポン・遠足・角力・其他

自學自習　圖書室ニテ圖書閲覽

おやつニ每日實施

奉仕作業

在園費用

拾圓ニ滿七歳―十歳・拾貳圓ニ滿十一歳―十三歳・拾參圓ニ滿十四歳―十六歳・但シ家計ノ都合ニ依リ一部又ハ全部ヲ減免ス

園生狀況

最近十六年間ニ於ケル退園生ノ成績

- 成績良好ニテ就職ノモノ　六七
- 成績良好ナルモ死亡ノモノ　六
- 成績不明ノモノ　一九
- 成績不良ノモノ　五

入園生總數	二六〇
年度内入園生數	一〇
年度内退園生數	九
在園生數（昭和十三年三月末現在）	二二

園長主任　成田山貫首大僧正　荒木照定

職員　大友惟誠　七

經費　昭和十二年度決算額　一七、九二六・六六圓

基本金　御下賜金・助成奬勵金・寄付金等ヲ基本金ニ蓄積

蓄積　現在蓄積高ニ現金一二一、三二八・九一圓、勸業銀行債券、拾圓券二十二枚・五圓券二枚

成田學園

第壹　位置並びに沿革

一　位置

本園は成田町成田四〇二番地（電話成田百三番）成田山境内西北に位する裏山に在り、東部は出世稲荷を經て、奥之院光明堂・本堂並びに公園に通じてゐる。西部は成田町幸町、南部は裏參道を隔てゝ、境内山林に面し、北部は同町土屋の街衢を丘上より眺め得る所の高地で、古木鬱蒼閑雅幽靜の地域を占めてゐる。

二　沿革

本園は成田山の經營に屬する少年教護事業にして其の沿革左の如し。

一　設置　明治十九年五月二十四日千葉感化院と稱し、本縣内佛教各宗寺院共同事業として千葉町に設置。

一　開院式　明治十九年十一月二十八日。

一　維持經營の變更　明治二十一年四月以降成田山新勝寺一手に本園を維持經營することに變更。

創立當時の奔走者左の通り。

服部元良師・石井實禪師・金山堯範師・白井知三郎氏・坪井善四郎氏。

一　新築並びに移轉　明治四十一年三月二十五日現在地に園舍を新築してこれに移轉。

一　御謄本下附　明治四十三年九月七日、教育勅語謄本並びに戊申詔書謄本各一通下附。

大正十三年四月五日、國民精神作興に關する詔書謄本一通下附。

一　皇族御來園　明治四十四年十月十七日　山階宮芳麿王殿下・久邇宮朝融王殿下・華頂宮博忠王殿下・久邇宮邦久王殿下・山階宮藤麿王殿下、本園へ御成り遊ばされた。尚ほ同月二十二日、更に　山階宮太妃殿下には、御姫君　安子女王殿下を御伴ひ、本園へ御成り遊ばせられ、生徒一同へ御菓子料を下賜せられた。

一　宮内省より御下賜金　本園事業御奬勵の思召を以て、大

正十一年以降殆ど毎年紀元の佳節に當り御下賜金一封宛を拜受したが、これは今や本園基本金中の首位を占めてゐる。

一　內務大臣・厚生大臣より下附金品　本園に於ける事業の功績を認め、且つ事業奬勵の趣旨により、明治四十二年二月十一日以降殆ど毎年金品御下附の光榮に浴してゐるが、夫等は總て基本金中に蓄積して多額に上つてゐる。外に花瓶一對（市岡紫雲作青銅製松上の鶴模樣）がある。

一　本縣知事より奬勵金　大正十一年以降毎年金圓を下附せられ、前と同樣基本金中に蓄積してゐる。

一　平和記念東京博覽會より銅牌受領　大正十一年七月十日曩に出陳した本園一覽に對し、賞狀並びに銅牌を贈られた。

一　名稱變更　明治四十一年三月廿五日成田山感化院と改稱昭和三年三月二十五日成田學園と改稱。

一　恩賜財團慶福會より助成金　本園講堂改增築助成金として、昭和九年二月十一日金五百圓の交附があつた。

一　記念祝典擧行　昭和十一年十一月二十八日、創立五十周年記念祝典を擧行。其の際記念事業の一として「成田學園五十年史」を編纂刊行した。

一　官公衙奬勵金、一般寄附金品　昭和十二年度に於て各官衙より交付された奬勵金並びに、一般寄附金品は次の通である。

宮內省　御下賜金　壹　封
厚生省　奬勵金　四百圓
司法省　奬勵金　壹百圓
千葉縣　奬勵金　壹百圓

右の外內務省より蓄音機レコード五拾枚及び、各篤志家よりの寄附金品十一件あり。芳名は次の通りである。

金參圓也　千葉縣佛教社會事業協會印旛郡支部殿（成田）
金貳圓也　步兵第五十七聯隊第二中隊殿（佐倉）
金貳拾圓也　古川與一郎殿（成田）
金參拾圓也　山內登波殿（成田）
金參百圓也　岩崎家殿（東京）
金五圓也　藤本三郎殿（成田）
金五圓也　秋山照英殿（成田）
御菓子澤山　藤本三郎殿（成田）
同　若松分店殿（成田）
理　髮（每月一回）　平澤光殿（成田）
鉛筆參拾本　東京日々新聞社社會事業團兒童愛護聯盟殿（東京）

一　觀櫻御會御召　昭和十二年四月十六日、本園主任大友惟誠夫妻は、畏くも新宿御苑に於ての觀櫻御會に御召の光榮を拜戴し、其の翌日は內務大臣の招宴に接し、恐懼感激非常な面目を施した。

尙ほ本園の沿革を年表にて示せば次の通りである。

成田學園沿革年表（昭和十三年迄）

（一）千葉縣下各宗寺院共立時代（二年間）

（二）成田山新勝寺經營時代（五十年經過）
（い）前期　（ろ）中期　（は）後期

時代	期	區分	期間	自	至	西紀
千葉縣下各宗寺院共立時代（二年間）	千葉縣下各宗寺院共立時代（二年間）	總長 船越衛 藤島正健 渡邊暢　院長 服部元良 石井實禪 解良教俊 三池照鳳	二年間	明治十九年五月二十四日	同二十一年四月	（一八八六）（一八八八）
千葉感化院時代（二十二年間）	（い）前期 成田山經營時代（二十年間）	（A）三池僧正時代（此ノ一部ハ（一）中ニ加ハルモ便宜ココニ加フ）	六年間	同二十一年五月	同二十七年五月	（一八八八）（一八九四）
		（B）石川僧正時代（御歸朝迄）	六年間	同二十七年六月（明治三十三年三月初御外遊　同三十三年四月末御歸朝）	同三十三年四月	（一八九四）（一九〇〇）
		（C）石川僧正時代（御歸朝ヨリ成田へ院舍新築移轉迄）	八年間	同三十三年四月	同四十一年三月二十四日	（一九〇〇）（一九〇八）
成田山感化院及成田學園時代（三十年經過）	（ろ）中期 成田山感化院時代（二十年間）	（A）石川僧正時代	十六年間（十五年十ケ月）	同四十一年三月二十五日（千葉より成田へ移る）	大正十三年一月三十一日	（一九〇八）（一九二四）
		（B）荒木現山主時代	四年間（四年二ケ月）	同十三年二月	昭和三年三月二十四日	（一九二四）（一九二八）
	（は）後期 成田學園時代（十年經過）	（C）荒木現山主時代	十ケ年經過	同三年三月二十五日　一、同年同月同日成田山感化院ヲ成田學園ト改稱　一、轉二十年記念ト現山主御歸朝記念ノ機會ニ		（一九二八）（一九三八）

第貳　設備並びに教護

一　設備

土地總坪數　三、一三五坪
　内譯
　建物敷地　九七二坪
　運動場　三五〇坪
　耕作地（農業實習地）　六七五坪
　其他　一、一三八坪
建物　六棟　二九二坪
大部分は明治四十一年の竣工に係る木造平屋であるが、内作業室、教室、講堂は、昭和八、九兩年度の增改築に係り木造二階建である。
　内譯
　園生宿舍　七五坪
　講堂及び教室　五一坪
　作業場（活版印刷並びに製本）　四八坪
　職員室並びに職員住宅　三〇坪
　靜養室　九坪
　其他　七九坪

詳細は別紙平面圖の通り。

二　教護の目的

本園は不良行爲を爲し、又は爲す虞ある兒童を收容し、少年教護法に準據して之を保護教養し、其の資質の改善向上を圖るを以て目的としてゐる。

三　入退園に關する内規

入園内規

年齡　滿七歲以上十六歲未滿（何れの地何れの家庭より依賴せらるゝも差支なし）

謝絕　一、白痴　二、不具者　三、病者　四、不良程度のあまりに深き者。

手續　本園の教育を依賴せんとするときは學校の通信簿を携へ保護者來園のこと。但し遠隔の地に在る方は郵送相談せらるゝも差支なし、而して愈々入園の節は本園所定の書式（別に印刷せる用紙ありそれに記入のこと）による書類と戸籍謄本を差出さるべし。

在園費　在園中は在園費として左記の通り毎月三日までに前納するを要す。但し家計の都合上左記の金圓を納め得ざる

方には其の一部若しくは全部を減免す。

一金拾　圓　滿七歲より十歲まで
一金拾貳圓　滿十一歲より十三歲まで
一金拾參圓　滿十四歲より十三歲まで

備考　入園の手續は前記の如く何等面倒なく極めて簡單なり。

又前記の書類と雖も依賴人の希望によりて本園に於て代書するも差支なし。

入園の際は書類文具衣類夜具等現に所有するものを持參のこと。

保證人は戸主にして身元確實なるものを選定せられたし。

新に入園生ある時は、先づ入園前の非行に對して、懇々と訓戒を加へたる後、本園生活の要領を知らしめ、不動明王の御惠みによつて、全く生れ更つた人となり、善良に進むべきことを諭し、講堂に於て入園式を行ひ、本園の人とならしめる。

退園に關する事項

生徒の改善を認め、退園を許すまでには、種々の階段を附ける。第一に不動尊を信仰する態度、第二に園外へ使に出し時々金錢を携帶せしめ、毫も不都合なき時、及び日常の操行右半年以上乃至一ケ年間、同樣に持續した時を以て、改良生と認め、退園せしめる。若し不良の原因が、其の家庭にある時は、成るべく直ちに家庭に歸さないことを以て適當とし、父母の同意を得て、本園より直ちに本人の性行に適當する職業を選び、其の家へ紹介し、就職せしめることにして居る。此の場合に於ても、其の家庭及び周圍に十分注意を拂ひ、選擇することは勿論である。

本園の最も心勞するのは、實に此の退園後の成績効果である。何となれば在園中全く改善の成績を擧げ得たと確信せらるゝ生徒であつても、退園後には環境其の他によつて、動もすれば逆戻りをなし、其の効果が破壞せられる虞あるからである。故に本園に於ては、退園後の成績効果に對し、周到な注意をすると共に、油斷なく左記の保護視察を行つてゐる。

第一　本園職員の視察。第二　本園と書面の往復。

就中書面の往復は、本園の努めて勵行する所で、これは甚だ平凡なやうであるが、最も有力な効果がある。尙ほ事情の許す限り、退園者とは親戚同樣の關係を持續して行くことに努めてゐる。（別項退園生の手紙參照）

四　園内教護の狀況

本園の生活は、普通一般に於ける溫き家庭生活と毫も異なる所はない。尤も普通教育とは異なり、ある一定の時間を限つて、教育するのではなくして、普通教育の時間以外に家庭

教育として一般の躾をなすと共に、信仰の觀念を生ぜしめるのが、實に本園生活の精神であるから、此の根本精神に基いて、總ての施設方法を實現して居る。其の生徒待遇の方法に至りては、慈悲仁愛の情を以て、これに對するは勿論、一面には又整然たる規律生活をなさしめ、亂雜放肆に流れない樣注意してゐる。然し乍ら本園は、悉く定めたる成文によつて行動せしめ、監督するといふが如き方法でなく、常に便宜を主とし、溫き家風、自然の慣例によつてこれを訓練し、力めて愉快なる生活をなさしめるを以て主眼としてゐる。約言すれば本園の生活は、信仰ある、規律正しい家庭生活といふことが出來る。

日課及び其の説明を擧ぐれば、左の如くである。

午前五時起床　直ちに掃除
午前六時　ラヂオ體操
午前六時三十分　御拜
一　皇室の萬歳を奉祝す　二　大廟遙拜
三　成田山不動尊禮拜　四　各自先祖敬拜
午前七時　朝食
自午前八時至正午　學科
正午　晝食
自午後一時至同四時　實科(年長者は五時迄)
午後六時　夕食
自午後六時半至同八時　學科(年長者は九時迄)
午後八時　禮拜後就床

以上の如く定めてあつても、時季によつて時々變更するは勿論、便宜上臨時變更することもある。

起床　朝起は新勝寺の曉鐘に警醒せられ、蹶起せざるを得ないと云ふ習慣を作つてゐる。

清潔　清潔は本園の最も努めてゐる所で、毎朝掃除の外日に數回これをなし、時々大掃除及び各室の清潔整頓を檢査してゐる。

衣類　普通の衣類、主として洋服を用ひてゐる。曾ては制服を用ゐたこともあつたが、今はこれを行つてゐない。

御拜　毎朝講堂に於てこれを行つてゐる。兒童に敬虔の心を養成せしめる爲め、職員は特に敬虔的態度で、之に臨んでゐる。本園修身教育の大本としては、教育勅語の御聖旨を奉戴することは勿論であるが、これが實踐躬行の實を擧ぐるには信仰の力を喚起しなければならないと信じてゐる。本園の特徴として、成田山不動尊を信仰せしめる所以も、即ちこれである。

訓話　一般に對する訓話は、毎朝先祖敬拜の際、及び就寢前不動尊禮拜の時、これを行つてゐるが、平易簡單のもので、これが爲めに、多くの時間を費してゐない。何となれば職員は生徒と起臥を同うして、行住座臥の間、これが師たり父兄たるの心を持し、實踐躬行所謂行を以て訓ふるのを旨としてゐるからである。然し個人に對しては、機會を捕へこれに投じて、其の兒童に適切に徹底的に訓話をなしてゐる。

食事　常に兒童の榮養狀態を考慮し、食事には相當の意を用ひてゐる。特に昭和四年以來實施してゐる三分搗精米(園内に動力精米機を設備し純無砂にて精米す)は、保健上好結果を示しつゝある。而して職員生徒は皆一堂に集つて、食を共にしてゐる。

單に食事のみでなく、本園の生活は總てに於て「共に」といふことに最も留意し、學ぶにも、働くにも、遊ぶにも、常に職員生徒が其の行動を共にし、美しい圓滿な家庭を作ることに努力してゐる。此の「共に主義」は、特に兩者の親しみを深めるばかりでなく、教育上最も大切な、兒童の個性觀察といふことが、種々なる場面に於て、なし得る便宜が多いのである。

學科　概ね小學校令に據る教科目にて、午前中三時間乃至四時間(但し雨天又は冬期は午後に及ぶことがある。)夜間は二時間、殆ど個人的に教授をし、特に重きを讀方・書方・綴方・算術・珠算等の實用學科に置いてゐる。而して尋常科の課程を卒業の後尙ほ向上の見込ある兒童であつて、品行も差支ないと認めた時は、上級の學校へ通學せしめることもある。

實科　農業・活版印刷及簡易な製本・手工等を課してゐる。但し冬期は農業を行はない。耕地は目下二段二畝餘歩を有してゐる。印刷部ほ未だ完備の域に達しないが、普通の設備を有し、專ら新勝寺關係の印刷物を、其の實習材料に充て生徒中嗜好性能これに適する者を選んで習得せしめてゐる。

園内に於ける實科に對しては、生産的職業的技能を與へ、實社會に出でゝ、直ちにそれによつて自活し得るものを撰ばなければならないと論ずるものもあり、本園も固より考慮したことであつて、先年印刷部を創設したが如きも、其の一端であるが、二、三の業務を設備したからとて、到底全生徒の個性嗜好に悉く適せしむることは至難であり、强いて職業を狹き範圍に押込むる嫌がある。殊に學園に適する授業師たる人物を得ることが至難で、施設の繁多な割合に好果を收められない憾みがある。よつて本園は教育終局の目的を主眼とし、身體の鍛錬、精神の訓練、特に勤勞性の養成を目的として、以上のものを施設してゐる。尤も年齡其の他の關係よりして在園中に、職業を與ふる必要ある者に對しては、當町内の家を選びてこれに委託し、本園より通勤して、其の職を見習はしめることもある。

娯樂・修養　兒童の性情を圓滿に發達せしめ、愉快の中に教化の目的を遂げしめるため、娯樂並びに修養方面にも相當の意を用ひてゐる。

一　庭球及び少年野球　娯樂に供する外、體力養成にも資する爲めに、これを設けたが、一同喜んでこれを遊び、晴天の日には殆ど其の遊び時間をこれに費してゐる。

一　娯樂室　疊敷九疊、板敷十二坪の二室より成る娯樂室を設け、ラヂオ（電氣蓄音機兼用）ピンポン・カロム・碁・將棋等の娯樂具を此所に集めてゐる。

一　生徒圖書室　此所に有益なるお伽噺雜誌・小學生新聞・寫眞・繪畫等を置き、兒童の閲覽に供してゐる。尙ほ圖書は備附以外、時々圖書館より貸出を受けてゐる。

一　散歩遠足及び旅行　毎月一日・十五日・二十八日、及び日曜日の午後には不動尊に參拜し、終つて散歩せしめてゐる。又附近神社佛閣の參拜・水泳・船遊・魚釣・耳狩・栗拾ひ、或は單なる山遊等で、數々山野の跋渉、郊外の遠足をなし、以て娯樂を兼ねた體力の養成を圖つてゐる。尙ほ春秋二回には、汽車・電車・自動車等に乘つて、遠方へ修學旅行をもしてゐる。

一　四大節及本園記念日　當日は祝賀式後に、種々なる餘興をなして、一日を祝はしめるので、兒童は頗る樂しみとしてゐる。

一　誕生祝　園長を始め、職員生徒の誕生日には、其の夜職員生徒一堂に團欒し、茶話會を行つてゐる。特に生徒の誕生日には、該兒童に一日の休暇を與へ、早朝不動尊に參詣、其の立身出世を祈らしめ、本園よりは祝意を表して、小遣を與へ、又は特に御馳走を供してゐる。

一　五月節句　柏餅にて茶話會を開いてゐる。

一　降誕會及義士祭　毎年四月八日・十二月十四日の日に祭祀を行つた後、園生希望の餘興を行つてゐる。

右の外、生徒各自が時節により、流行によつてする遊戯、例へば輪廻し・獨樂・歌留多・雙六・陣取・鬼事・軍艦遊戯其他のものは、大抵自由に任かし、濫りに拘束を加へないばかりでなく、多くの場合職員も亦これに參加するのを常としてゐる。

賞罰　總て普通の家庭と狀態を同じくする希望で、賞罰の如きも固より格別の定めがない。毎年三月二十五日は本園の記念日で、當日は特に賞與を與へることを例としてゐるが平日は格別の善行ある場合の外は、賞與を與へない。生徒の席順は一日より月末に至る一ヶ月間、各生徒の操行成績を調査し、右の結果により（日々の成績表によるの外、更に職員の意見を附加す）翌月一日席順を改めることを例としてゐるのであるが、又其の席順並びに勤勞振りによつて、更に優劣を附け、夫々手當を支給して貯金をなさしめてゐる。

おやつ　毎日之を與へてゐる。尙ほ篤志の人々より、時々菓子等を生徒に寄贈せられることもあり、園長手許より生徒を慰めよと、特に珍菓・水果子等を贈らるゝことも屢々あり

又園職員へ他より贈られた菓子等も、大抵は生徒に分與するを常としてゐるので、實際に於ては間食の度數も割合に多くなり、一般家庭と毫も變る處がないのである。

五　時局對應施設

今回の支那事變に就いては、園生にも時局の認識を深からしむることが最も緊要であることを痛感して、或は新聞にラヂオに寫眞に、又は說話揭示等によつて其の徹底を期し、緊張の生活を送らしむることに努めたと同時に、一面には他と合同又は單獨にて、不動尊並びに埴生神社に參拜、國威宣揚武運長久の祈願をなし、更に出征將兵の歡送より、戰死者町葬參列、慰問品作製其他の手傳をなし、又職員・生徒一同より若干の献金をなした。

從つて本年度は恒例の臨海生活を廢し、修學旅行等もなるべく控目とし、只僅に縣內松戸町の高等園藝學校、工兵學校を見學せしめた外、谷津海岸、出洲海岸に各々一回づゝ遠足せしめて、海水浴をなさしめただけである。

第參　教護の成績

明治十九年開園以來、入園生は二百六十人であつて、歷史の古い割合に、其の數甚だ少いかの感もあるが、これは此の教護思想の未だ普及しなかつたことゝ、又本園の所在が都會地でなかつた爲めとに原因するのは勿論であるが、更により大なる原因は、本園が敢て在園生の多きを欲しないことである。在園生の多數といふことは外見上極めて立派であるが、此の教育の性質上には、決して望ましいことではなく、教育本位にこれを考へるならば、寧ろ少數程効果的であることは明らかなことである。本園は幸に經營上に困難なく、專ら教育的効果を本位に考へ、敢て外見を飾るの必要がなかつた爲め、常に園生の多きことを欲しなかつたのである。現在としても優に三四十名を收容するの設備はあるが、成るべく二十五名位より多くしないことも此の故である。

以上記載した如く、形式は兎も角實質に於ては、飽くまでも子供本位にして居るから、其の成績は割合に良好である。

試に**最近の成績**をあぐれば、左の如くである。

大正十年以降の入園者百十九名　　九七名

退園生　　六七名

內

時々文通等あり、成績良しきもの　　六名

成績良好なりしも、死亡したるもの　　一九名

文通なく、成績不明憂慮中のもの　　五名

成績不良にして、他に收容せらるゝもの　　二二名

現在生

第四　生徒狀況

一　入園時に於ける調査

入園當時に於ける園生の「教育程度と年齡」、「保護者と年齡」、「保護者の職業」を示せば、次の通りである。

入園時教育程度と年齡（明治三十四年以降）

教育程度＼入園時年齡	9歳以下	10	11	12	13	14	15	16以上	計
不就學	三	五	三	五	三	二	一	一	二三
尋一	一〇	二	二	一			二		一七
尋二	四	三	一	一	三	三	二		一七
尋三	二	六	三	二	四	三	二	二	二四
尋四		一	四	九	五	四	四	四	三〇
尋五			二	五	一二	二	二	五	二八
尋六				二	九	七	八	五	三一
高一						三	六	一三	二五
高二以上							一	一三	一四
計	一九	一七	一五	二五	三六	二四	二八	四三	二〇九

入園時保護者と年齡（明治三十四年以降）

保護者＼入園時年齡	9歳以下	10	11	12	13	14	15	16以上	計
實父母	二	一	二	八	一四	九	二	一四	六二
實父	一	二	一	三	三	一	二		一三
實母	二	一	二	三	五	六	二	七	二八
繼父・實母	一	一	三	一	二	二	二	二	一四
實父・繼母	二	七	二	五	五	四	七	一三	四五
養父母	二	一	三	三	三	一	一	二	一六
祖母	三	二					一		六
其ノ他親族	五		一	一	二	一	二	七	一九
保護者ナキ者	一	二	一	一	二		八		七
計	一九	一七	一五	二五	三六	二四	二八	四五	二〇九

入園時保護者の職業（明治三十四年以降）

職業	人數	職業	人數	職業	人數
農業	三二	商業	二五	古物商	五
諸職人	二四	官公吏	一二	會社員	二九
飲食業	六	教育家	二	漁夫	二
家從	一	鐵工場	一	畫家	一
荷馬車業	二	寫眞師	二	按摩	一
車夫	三	被傭人	二〇	山薯掘	二
墓守	一	無職業	五	代言人	一
金貸業	二	植木職	三	箱屋	一
妾	一	相場師	一	下宿業	二
産婆	一	自動車屋	一	遊技場	一
紙芝居	一	醫師	一	新聞記者	一
其他	一六			計	二〇九

二　本年度入退園狀況

本年度に於ける園生入退園狀況左の如し。

前年度繰越生　二一名　　本年度入園生　一〇名

本年度退園生　九名　　現在園生　二二名

三　生徒狀況一覽

昭和十三年三月末現在

略名	生育府縣	家庭の職業	家庭の生計	生育	入園年月日	年齡	學力
イ	東京	會社員	中	兄	八、四、二四	十九才	中二
ロ	千葉	被雇	下	實母	一一、九、二〇	十八才	高一
ハ	東京	新聞記者	中	實父・繼母	一二、二、一六	十五才	中一
ニ	千葉	○	○	○	七、八、二八	十二才	尋六
ホ	栃木	○	○	○	七、八、六	十五才	尋五
ヘ	千葉	お針	下	實母	一一、三、二四	十三才	尋卒
ト	千葉	日雇	下	實父	一一、九、二四	十一才	尋五
チ	東京	勤メ人	下	實父母	一二、四、一五	十四才	尋六
リ	東京	土工	下	養父・養繼母	六、九、二一	十六才	高一
ヌ	千葉	日雇	下	實父・繼母	九、一一、一四	十三才	尋卒
ル	東京	無職	下	實父	一一、三、二〇	十二才	尋六
ヲ	東京	日雇	下	實父	一一、一〇、一六	十三才	高一
ワ	東京	棟梁	中	實父・繼母	一二、九、二四	十五才	高一
カ	千葉	農	下	實父	一一、三、一二	十三才	高一
ヨ	東京	日雇	下	祖母	九、一〇、二一	十一才	尋五
タ	東京	日雇	下	實母	一三、二、五	十一才	尋五
レ	千葉	農	下	養父母	一二、八、一〇	十才	尋四
ソ	東京	箱屋	下	養父母	一二、六、七	十三才	高一
ツ	東京	紙芝居	下	實父	一〇、二、一六	十二才	尋五
ネ	東京	畫家	中	實父母	一二、三、二七	十二才	尋六
ナ	神奈川	日雇	下	實母	一一、二、一六	八才	尋一
ラ	東京	勤メ人	中	繼父・實母	一二、九、五	七才	尋一

四　生徒疾病狀況

本年度中に於ける生徒疾病狀況は次の通である。

生徒疾病狀況一覽（昭和十二年度）

略名	病名	期間
イ	おでき	三月十日―四月六日
ロ	同	三月二十六日―五月十一日
ハ	トラホーム	二月十八日―八月四日
ニ	同	二月十八日―八月七日
ホ	同	二月十八日―七月十二日
ヘ	同	二月十六日―八月七日

ト	トラホーム	二月十六日——五月三日	
チ	齲齒	四月十日	
リ	足腫	四月十七日——五月十一日	
ヌ	頭痛	五月二日——五月三日	
ル	皮膚病	五月二十日——六月十四日	
ヲ	咽喉腫	六月十八日——七月三日	
ワ	指腫	六月二十七日——七月九日	
カ	腹痛	九月五日——九月六日	
ヨ	物貰（麥粒腫）	九月十八日——九月二十二日	
タ	頭痛	九月十八日——十月十三日	
レ	足怪我	九月二十九日——十月二十三日	
ソ	皮膚病（足）	十月三日——十一月十六日	
ツ	腫物（眼の上）	十月四日——十月十二日	
ネ	風邪	十月十一日——十月十四日	
ナ	物貰（麥粒腫）	十月十四日——十月十九日	
ラ	指腫	十月二十六日——十一月一日	
ム	齲齒	十二月二十二日	
ウ	風邪	一月十日——一月十四日	
キ	同	一月十日——一月十四日	
ノ	同	一月十日——一月十一日	
オ	同	一月十一日——一月十四日	
ク	同	一月十一日——一月十七日	
ヤ	同	一月十二日——一月十五日	
マ	同	一月十三日——一月十五日	
ケ	風邪	一月十三日——一月十五日	
フ	同	一月十三日——一月十五日	
コ	同	一月十三日——一月十四日	
エ	同	一月十四日——一月十五日	
テ	腹痛	一月十四日——一月十五日	
ア	頭痛	二月十四日——二月十五日	
サ	皮膚病（顏）	二月二十二日	
キ	皮膚病	二月二十四日——二月二十八日	
ユ	頭痛	二月二十八日——三月一日	
メ	風邪	三月四日——三月五日	
ミ	トラホーム	三月三日より引續き	
シ	同	三月三日より引續き	
エ	右手怪我	三月十八日引續き加療	
ヒ	齒痛	三月二十九日	

五 退園生の狀況

昭和十二年度退園生狀況一覽

略名	生育府縣	家庭の職業	家庭の生計	退園月日	退園事由	退園後の狀況
イ	東京	建具	下	實父母	四月八日	改善	良	精米店員
ロ	茨城	日雇	下	實母	五月二日	同	良	運送店員
ハ	東京	蒟蒻製造	中	實父母	五月三日	改善	良	在宅
ニ	千葉	日雇	下	實父母	十一月七日	同	良	肥料店員
ホ	千葉	カフエー	下	實母	十一月三日	同	良	商業學生
ヘ	青森	時計商	下	實父母	三月七日	請願	良	レコード店員
ト	東京	會社員	中	養父母	十月十三日	病氣	不明	他教育所
チ	東京	會社員	下	實父母	三月十四日	改善	良	印刷工
リ	東京	會社員	中	實父母	三月廿九日	同	良	中學生

六 退園生よりの通信

退園生よりの最近の手紙二、三を示せば次の通り。（原文の儘）

前略御免被下度候

昨日は御多忙中にも不拘再度の御見舞に接し御厚禮申し上げ候 恙がなく御歸宅遊ばされ候事と推察仕り候

小生戰傷に依る入院に非ずして病氣の爲め斯の如き身と成り不甲斐なさを痛感致し候

にもかゝはらず御丁寧なる御見舞を受けし事のみ心苦しく思い居り候御期待に背きて何とも申し譯無之此の上は一意養生致し一日も早く全快なし再び皇軍の一員として微力を盡さん覺悟に御座候 尙今後共によろしく御指導賜はらん事を御願ひ申し上げ候

亂筆には候へども取敢へす御禮まで御一同樣の御健康を切に御祈り申し上げ候 草々

◇ ◇ ◇

拜啓 先日は失禮致しました。

早速御手紙を書く筈で居りましたが今日に迄 遲くなり申譯有りません。

久し振りで元氣な先生の御顏が拜見出來て何より嬉しく思ひます、又暫く逢はなかつた大勢の友人と逢へた事も非常に嬉しく思つて居ります。

故中山純吉君の合同葬に參列させて頂いたのを機會に更生した積りで御便りをさせて頂きたいと思ひます、小生も決してこんな積りでは無かつたのですが、一ケ月御無沙汰致して居たのが、二ケ月になり、二ケ月が三ケ月とだん〳〵御便りがしにくゝなつてしまひ、此んな樣な譯になつてしまつた次第です。非常に長い御無沙汰をした小生では有りますが、先生になんとあの子は薄情な子だらうと思はれたらうと思つて殘念でなりません。小生は決して此んな人間では有りません、今迄、いや此の間御葉書を頂く迄全く間違へた考へをして居たのです。

此の間の中山君の合同葬に參列させて頂いたのを機會に更生した小生です、きつと今迄の總てを取り戻す覺悟です、先生に此の間御逢ひ出來た事はほんとうに再生した思ひです。今後共宜敷御慈しみの程御願ひ申します。最後に先生始め皆樣方の御健康を御祈り致します。亂筆を御許し下さい。

奥さん始め文子さん、成彦さん、恭子さんに宜敷御傳へ下さい。

◇ ◇ ◇

謹啓　大變御無沙汰致しまして誠に申譯有りません其の後先生を始め皆樣御一同御無事で居りますか。私も今元氣に働らいて居ります故御安心下さい。

御主人樣も大變やさしい人で好く氣が付いて呉れます。一日に米が二十俵位平均に出ます、今僕一人で配達するので働きがひが有ります、學園の記念日も近かづいて參ります。

米屋に成つた以上高崎の勇さんときよう爭です、どちらが一人前の店を出すか。

諸先生も皆御無事に御過しの事と存じます。恭子さんも四月で六年生に成ります事で先生もお喜の事と存じます。二十五日には退園生諸君も來る事でしよう、一千年祭の今年成田に一度行つて見たいです、自分の事ばかり書いて濟みません。時節柄お身體を大切にして下さい、奥樣に宜しくお傳へ下さい。最後に成田學園の祝福をお祈り致します。

草々

◇　◇

御無沙汰致しました、其の後皆樣にはお變りありませんか、私くし共一同は元氣に忙がしい日を過ごして居ります。

日一日と冬が近づいて昨今は、朝夕薄寒さを感じます、それにつけてもあちらで働いて居る兵隊さんを思ひ出します、過日渡邊君よりの話によれば中山君が戰死なされたさうで私くしも二三回會つて知つて居るだけに一寸おどろきました。

奥さん私くしは今新らしい希望に向つて一生懸命働いて居ます、此の事について追つて又お便りを差上げますが實は私くしの緣談ですけれど、すぐと云ふ譯ではないのですが、先生や奥さんも共に喜こんで戴こうと思つて一寸お知らせしたのです。

大變取り止めのない事を書きました、本日は此れにて失禮致します

これからは段々寒くなります、どをぞお身體を大切に先生並に成彦君にくれ〳〵も宜敷く申して下さい。

敬具

◇　◇

拜啓　先日は誠に有り難う御座いました。日增に暖くなり、櫻も大分咲いて參りました、私事先生の御激勵始め皆樣の御かげにて無事資格證明書を頂きました、全く難關にて大抵一回を持つて受かる者少く、三回以上の人多く、これも先生の爲だと益々眞面目に奮勵する心算です。深く御禮申上げます。其の中實家にも宜しく御願ひ致します。

奥樣御上京もいつかと待つて居ります。一層奮勵致しますから御安心下さい、では御身體大切にさようなら。

敬具

◇　◇

拜啓　久しく御無沙汰致しました。

先生樣には其の後は御障りは有りませんか、幸ひ小兵も元氣にて北の守に專心致して居ります。そちらの皆樣には御變り有りませんか其の後の樣子も大分變つて居ることでせう。何卒御知らせ下さい。

扨て今年は御不動樣の一千年忌に相當するとのことは前々承知致し居ります故、我が守り神樣としての御不動樣と云ふに就けても何かの志と云ふ樣に心懸けて居り、父よりも同封の樣な書狀にてその意を傳へ參りました故ほんの志では有りますが同封の金額丈御送り致すことに致しました、何とぞ良ろしく御願ひ致します。

では日頃の御無沙汰を兼ねて御願ひ迄です。甚だ簡單に要點のみを

知るしましたが、どうぞ先生始諸先生、外皆樣も御體に氣を付けられて私達の爲に御力添を御願ひ致します。

では諸先生始生徒諸君に良ろしく御傳へ下さい。

草々

◇　◇

先日は先生誠に有難い御手紙下され厚く御禮申上げます。先生にお褒めあづかるお言葉も皆先生の御蔭で御座ひます、よく先生が毎朝お聞かせ下されたお話の中に正直は一生のたからであると、いつて下されました、先生のゆふのはこれかあれかと思ひながらも守り、御蔭樣で今日までに先生が私をしつて下されたので御座ひます。思へばお世話に成ました三年が、私一生の幸福で御座ひました。これからさき事さらに先生の御手紙のお話を守り一生懸命でやるつもりで居ります。そして家を建てゝ先生奥樣に安心していたゞくつもりで居ります。いまになりまして心にのこるのは、お世話に成まして居りました時、毎朝先生のお話、もつとよくきいていたならよかつたと思ひます。近日に私も行たく思つて居ります。

それから母が、色々と御世話樣になりました、先生奥樣が居りませんでしたので母も、ざんねんがつて居りました、それでも、ほかの先生が色々お話して下されましたので、よろこんで歸つて參りました、どうぞ先生からよろしく申上げて下さいませ。では近日にまいります、その時色々お話致したいと思つて居ります。奥樣始皆樣に先生からよろしくお傳へ下さいませ。さよなら

◇　◇

拜啓　過日は色々と御世話下さいまして有難う存じました、主人初め仲間の者も非常に喜んで居りますし、亦めつたに見られない御寺の中なども見せて戴き大旦那の如きも大變喜んで居ります ので自分もなんとなく好い氣持で先生の處へ來てよかつたと感じました。

但し此所に殘念な事は父親を連れて行けなかつた事です。自分としても先生と約束した手前、是非同道したかつたのでしたが何分身體の方が惡いので先生との約束が果せない事は許して下さい。

前にもお知らせ致しました樣に主人も大變可愛がつて下さるので毎日氣持好く働いて居ります。好く考へて見ますと自分は仲々運が好いと云ふ事に氣が付きます。道をふみはずして居る時は大友先生の處でさほど苦しまず、我儘を通して退園してしまふし、退園すれば亦仲間の者にはいじめられず、主人には氣に入られるし、本當に嬉しくなつてしまひます。

之も一偏にお不動樣の御守り大友先生の御蔭と深く感謝致して居ります。

今後もお不動樣の御守を信じて影日向なく働きますから御休神下さい、簡單ながら御禮の御挨拶迄、皆々樣によろしく。

◇　◇

拜啓　しばらく御無沙汰致しなんとも申譯も御座居ません。其の後先生始め皆樣にはお變りも御座居ませんか。僕も元氣で其の日を暮して居りますから御安心下さい。

先生にお便りをしよう〳〵と思つて居りますが中々出す事が出來ないで申譯御座居ません、學校の方は前に勉强して置いたので無事入學しました。毎日無事通つて居ります始めの中はねむく〳〵て先生の講義などぼやつとしてしまふ時もあります、此の頃なれてしまひましたのでねむいとは思はれなくなりました。（中略）

學校へ二番で入學したので副級長に成りました。これも先生始め皆樣の御敎しえのたまものと深く〳〵感謝して居ります。今の所學校があつてとても行かれませんからいつかひまな時御うかゞい致します。では御體を大切に、皆樣によろしくお傳下さい。さようなら

◇　◇

先日御送附下されし新更本日確に戴きました。今月は皇軍慰問號だと云ふ事を先月の新更にて拜見樂しみにして居りましたので非常に嬉しく初めから終り迄何回もよんで見ました誠に有難ふ御座いました。內地はもう入梅で毎日雨が降り續く事でせう。當地は毎日雨です、先日（二十三日）の夕方突然週番士官馳足集合のラツパがなつたと思て約三十分位の後去年七月の北支事變の時と同じ出動命令が下だりました、ちやうど八時頃でした、それから直に準備を整へて翌朝の午前三時に出發準備完了しました。さて問題は何處へ出動するかが小生らの問題でしたが、命令を聽いてがつかりしました。演習なのです、全く整列する迄は眞實に行くのだらうと思つて居りましたが演習と聽いた時は全くがつかりしました、近く來るべきソ聯との交戰に備へての出動演習でした。やがて六時情況を達せられて新京迄約四十五粁其の內二十二粁は徒步で新京の郊外にて情況終りのラツパがなりました。午後三時頃でしたそれより夜行軍にて再び原隊に歸營したのは夜中の一時頃でした。この演習は今度が始めてど何時でも戰爭に行けると云ふ確信を得ました。翌日は軍旗祭でゆつくり休養致しました、そんな事なので軍旗祭も兵隊の餘興は取止めで新京より色々の藝人を呼んでそれを小生等は見物致しましたたまにはあゝゆう演習も面白味があります。近く又あるそうな喰をしてゐます。時節柄先生初め奧樣にはお體を大切になさいます樣御祈り申上げます。（五月二十九日午後十一時）

七　退園生の戰死

退園生であつて今回の事變に應召參加し、奮戰してゐる者は數名あるが、就中陸軍步兵上等兵中山純吉氏は、昭和十二年七月二十七日北支小湯山の戰鬪に於て、戰功を樹てられ腹部貫通銃創を負ひ、壯烈なる戰死を遂げられた。同人は昭和七年二月本園を卒へ、成績殊に良好であつたため、本園助手として採用、傍ら東京日本大學商業學校に入學、優秀なる成績にて同校を卒業、直に滿洲國官吏として赴任され、將來を囑目せられてゐた人物であつた。同年九月二十六日東京市目黑區で盛大なる區葬が執行され、當園からは大友主任並びに生徒代表外に在京退園生も多數參列し、厚く弔意を表した。因に同氏は功七級勳八等の榮譽を得られた。

第五　歷代園長並びに主任

總　長（千葉感化院時代は總長を置く）
船越　衛、藤島　正健、渡邊　暢
院　長（昭和三年以前は院長と稱す）

各宗共立時代

服部　元良　自明治十九年五月至同二十年四月
石川　實禪　自明治二十年五月至同年十一月
解良　敎俊　自明治二十年十一月至同二十一年四月
三池　照鳳　明治二十一年四月

新勝寺經營時代

三池　照鳳　自明治二十一年四月至同二十七年五月
石川　照勤　自明治二十七年六月至大正十三年一月
荒木　照定　自大正十三年二月至現在

副院長（副院長は後主任となる）

坪井善四郎　自創立至明治三十一年十二月
松田　宥禪　自明治三十三年八月至同年十一月
大友　秀松　自明治三十三年十一月至同三十五年二月
峯川　照和　自明治三十五年二月至同四十二年八月

主　任

大友　秀松　自明治四十二年八月至大正十年一月
大友　惟誠　自大正十年一月至現在

第六　職　員（○印は園內常住者）

園主兼園長　荒木照定
主　任　正八位　○大友惟誠
會計主任　淺井照次
敎　師　○倉持己之吉
實科敎師　勝田吉治
實科敎師　押尾清
保　姆　○大友靜子
篤志園醫　醫學博士　藤崎公道
篤志眼科園醫　山崎一雄
篤志整骨園醫　小倉桂
篤志音樂敎師　金杉茂

職員一同は、園長の指導監督を受くるは勿論、能く園長の精神と、本園職員たるの自覺とにより、職務に從ふの外、現在としては別に職員に對する成文の制令はない。唯協同一致して圓滿に、且つ規律ある家庭を作るのを目的とし、而も此の範圍に於て、自由に活動を許し、濫りに牽制を加へない組織である。

藤崎公道氏は、嚴父關川博道氏（前篤志園醫）のあとを受けて其の職に在るが、其の經營に係る如春堂病院醫員を擧げて常に園生の保健に留意せられ、殊に疾病治療に際しては、熱心親切にこれに當られ、更に山崎眼科醫院長山崎一雄氏は眼科を、小倉整骨醫院長小倉桂氏は、整骨外科を擔任せられてゐる爲め、入園し來る兒童は精神狀態が薄弱で身體强健で

ないもの多いのに係らず、日を經るに從つて、健康狀態良好となり、稀に疾病・負傷等あるも後害を遺した者のないことは、本園の最も欣幸とし、最も誇りとする所で、是等諸士の高情に對し深く謝意を表してゐる次第である。

第七　經費並びに基本金

蓄積

一　昭和十二年度決算

本園には嚴密なる豫算はないと云ふ方が事實に近い。固より大體の豫算を定めて置き、右を標準として支出をなし、嚴に濫費を防ぐ事は申す迄もないが、實際には必要に重きを置き、必要なる以上は實費を支出するのに躊躇しない。まして匣錢になど拘泥しない。從て亦豫算内だからといつて必要もない費途に無理に消費するやうなことのないのは無論であり毎月定日本園經費の金額を新勝寺會計主幹から領收し、之を支出する慣例であるが會計上園長及主幹より未曾て一言の注意質問を受けたこともない、全く深い信賴を與へて、濫りに細小の監督を加ふるやうなことはないのである。此結果は自然、局に當る者に對し、自制心を與へ、求めないで總ての節約が行はれ、其効果は慥に豫算を限定する以上であつて更に頗る便利を極めて居る。左に記載するのは昭和十二年度の決算である。

昭和十二年度決算

歳入	經常部	一九、七八三・七一
同	臨時部	九一一・二二
合計		二〇、六九四・九三
歳出	經常部	一七、九二六・六六
同	臨時部（基本金積立）	一、九三〇・七五
合計		一九、八五七・四一
歳入歳出差引殘額		八三七・五二

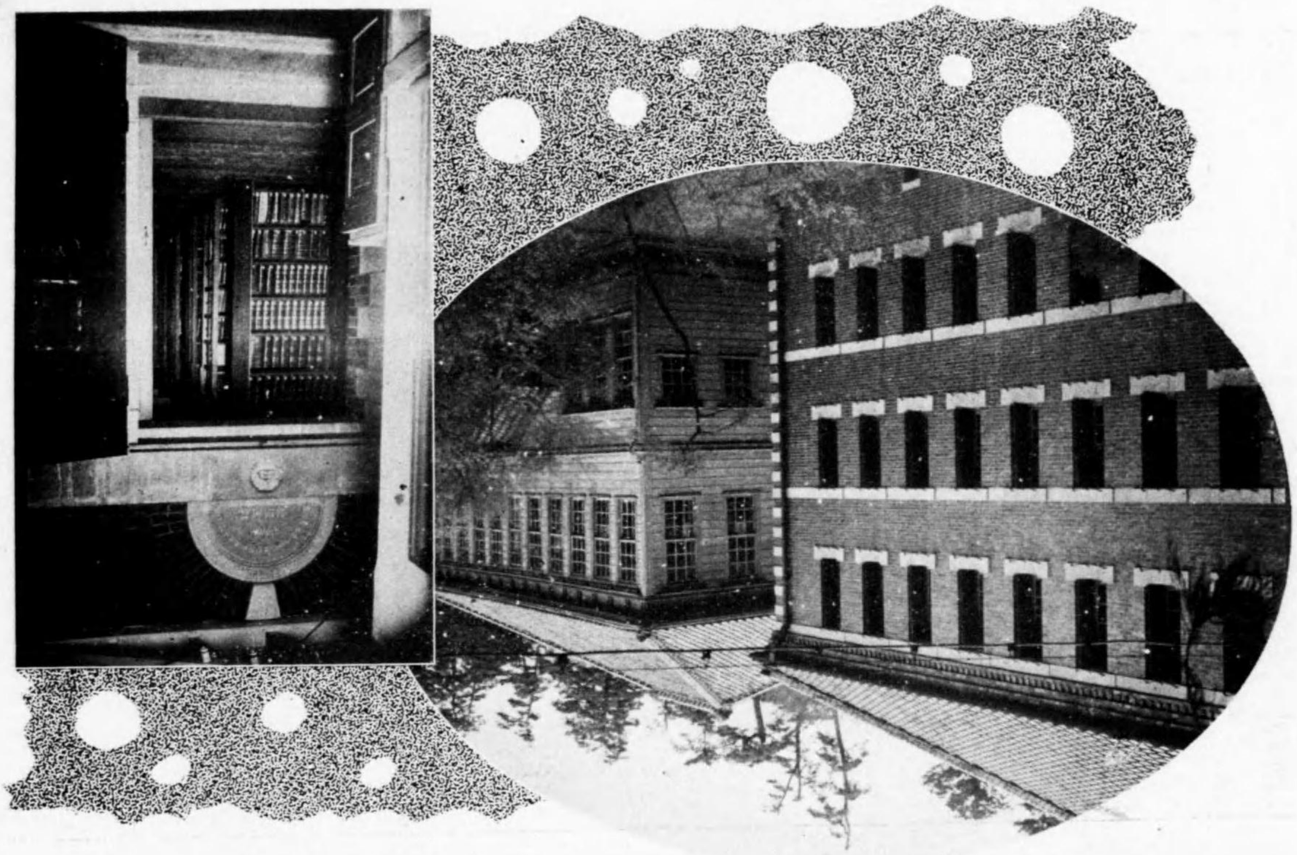
二　基本金の蓄積

明治四十一年三月、本園を千葉町より成田町へ移轉して以來、前掲の如き官公衙の奬勵助成金及び各篤志家より本園へ寄附せられた金員を蓄積して、基本金を作るの方針を採り、目下着々實行中である。しかし本園は自ら進んで一般より寄附金を受けやうとするの方法はこれを採らず、專ら篤志家の同情・義捐に任せて來たのであるが、現在金貳萬壹千參百貳拾八圓九拾壹錢と勸業債券拾圓券貳拾貳枚五圓券二枚を蓄積するに至つてゐる。

成田圖書館

第壹　目次

第一　位置並びに沿革……一頁
第二　本館及び分館の建物……九頁
第三　設備……九頁
第四　蔵書……一〇〇
第五　目録……一〇〇
第六　閲覧……一〇二
第七　貸出……一〇三
第八　閲覧……一〇四
第九　閲覧……一〇五
第十　閲覧……一〇六
第十一　閲覧……一〇七
第十二　閲覧……一〇八
第十三　閲覧……一〇九
第十四　閲覧……一〇九
第十五　閲覧……一〇九
第十六　閲覧……一〇九
第十七　閲覧……一〇九
第十八　閲覧……一〇九
第十九　閲覧……一〇九
第二十　閲覧……一〇九
第二十一　閲覧……一〇九
第二十二　閲覧……一〇九
第二十三　閲覧……一〇九
第二十四　閲覧……一〇九
第二十五　閲覧……一〇九
第二十六　閲覧……一〇九
第二十七　閲覧……一〇九
第二十八　閲覧……一〇九
第二十九　閲覧……一〇九
第三十　閲覧……一〇九
第三十一　閲覧……一〇九
第三十二　閲覧……一〇九
第三十三　閲覧……一〇九
第三十四　閲覧……一〇九
第三十五　閲覧……一〇九
第三十六　閲覧……一〇九
第三十七　閲覧……一〇九
第三十八　閲覧……一〇九
第三十九　閲覧……一〇九
第四十　閲覧……一〇九
第四十一　閲覧……一〇九
第四十二　閲覧……一〇九
第四十三　閲覧……一〇九
第四十四　閲覧……一〇九
第四十五　閲覧……一〇九
第四十六　閲覧……一〇九
第四十七　閲覧……一〇九
第四十八　閲覧……一〇九
第四十九　閲覧……一〇九
第五十　閲覧……一〇九
第五十一　閲覧……一〇九
第五十二　閲覧……一〇九
第五十三　閲覧……一〇九
第五十四　閲覧……一〇九
第五十五　閲覧……一〇九
第五十六　閲覧……一〇九
第五十七　閲覧……一〇九
第五十八　閲覧……一〇九
第五十九　閲覧……一〇九
第六十　閲覧……一〇九
第六十一　閲覧……一〇九
第六十二　閲覧……一〇九
第六十三　閲覧……一〇九
第六十四　閲覧……一〇九
第六十五　閲覧……一〇九
第六十六　閲覧……一〇九
第六十七　閲覧……一〇九
第六十八　閲覧……一〇九
第六十九　閲覧……一〇九
第七十　閲覧……一〇九
第七十一　閲覧……一〇九
第七十二　閲覧……一〇九
第七十三　閲覧……一〇九
第七十四　閲覧……一〇九
第七十五　閲覧……一〇九
第七十六　閲覧……一〇九
第七十七　閲覧……一〇九
第七十八　閲覧……一〇九
第七十九　閲覧……一〇九
第八十　閲覧……一〇九
第八十一　閲覧……一〇九
第八十二　閲覧……一〇九
第八十三　閲覧……一〇九
第八十四　閲覧……一〇九
第八十五　閲覧……一〇九
第八十六　閲覧……一〇九
第八十七　閲覧……一〇九
第八十八　閲覧……一〇九
第八十九　閲覧……一〇九
第九十　閲覧……一〇九
第九十一　閲覧……一〇九
第九十二　閲覧……一〇九
第九十三　閲覧……一〇九
第九十四　閲覧……一〇九
第九十五　閲覧……一〇九
第九十六　閲覧……一〇九
第九十七　閲覧……一〇九
第九十八　閲覧……一〇九
第九十九　閲覧……一〇九
第百　閲覧……一〇九
第百一　閲覧……一〇九
第百二　閲覧……一〇九
第百三　閲覧……一〇九
第百四　閲覧……一〇九
第百五　閲覧……一〇九
第百六　閲覧……一〇九
第百七　閲覧……一〇九
第百八　閲覧……一〇九
第百九　閲覧……一〇九
第百十　閲覧……一〇九
第百十一　閲覧……一〇九
第百十二　閲覧……一〇九
第百十三　閲覧……一〇九
第百十四　閲覧……一〇九
第百十五　閲覧……一〇九
第百十六　閲覧……一〇九
第百十七　閲覧……一〇九
第百十八　閲覧……一〇九
第百十九　閲覧……一〇九
第百二十　閲覧……一〇九
第百二十一　閲覧……一〇九
第百二十二　閲覧……一〇九
第百二十三　閲覧……一〇九
第百二十四　閲覧……一〇九
第百二十五　閲覧……一〇九
第百二十六　閲覧……一〇九
第百二十七　閲覧……一〇九
第百二十八　閲覧……一〇九
第百二十九　閲覧……一〇九
第百三十　閲覧……一〇九
第百三十一　閲覧……一〇九
第百三十二　閲覧……一〇九
第百三十三　閲覧……一〇九
第百三十四　閲覧……一〇九
第百三十五　閲覧……一〇九
第百三十六　閲覧……一〇九
第百三十七　閲覧……一〇九
第百三十八　閲覧……一〇九
第百三十九　閲覧……一〇九
第百四十　閲覧……一〇九
第百四十一　閲覧……一〇九
第百四十二　閲覧……一〇九
第百四十三　閲覧……一〇九
第百四十四　閲覧……一〇九
第百四十五　閲覧……一〇九
第百四十六　閲覧……一〇九
第百四十七　閲覧……一〇九
第百四十八　閲覧……一〇九
第百四十九　閲覧……一〇九
第百五十　閲覧……一〇九
第百五十一　閲覧……一〇九
第百五十二　閲覧……一〇九
第百五十三　閲覧……一〇九
第百五十四　閲覧……一〇九
第百五十五　閲覧……一〇九
第百五十六　閲覧……一〇九
第百五十七　閲覧……一〇九
第百五十八　閲覧……一〇九
第百五十九　閲覧……一〇九
第百六十　閲覧……一〇九
第百六十一　閲覧……一〇九
第百六十二　閲覧……一〇九
第百六十三　閲覧……一〇九
第百六十四　閲覧……一〇九
第百六十五　閲覧……一〇九
第百六十六　閲覧……一〇九
第百六十七　閲覧……一〇九
第百六十八　閲覧……一〇九
第百六十九　閲覧……一〇九
第百七十　閲覧……一〇九
第百七十一　閲覧……一〇九
第百七十二　閲覧……一〇九
第百七十三　閲覧……一〇九
第百七十四　閲覧……一〇九
第百七十五　閲覧……一〇九
第百七十六　閲覧……一〇九
第百七十七　閲覧……一〇九
第百七十八　閲覧……一〇九
第百七十九　閲覧……一〇九
第百八十　閲覧……一〇九
第百八十一　閲覧……一〇九
第百八十二　閲覧……一〇九
第百八十三　閲覧……一〇九
第百八十四　閲覧……一〇九
第百八十五　閲覧……一〇九
第百八十六　閲覧……一〇九
第百八十七　閲覧……一〇九
第百八十八　閲覧……一〇九
第百八十九　閲覧……一〇九
第百九十　閲覧……一〇九
第百九十一　閲覧……一〇九
第百九十二　閲覧……一〇九
第百九十三　閲覧……一〇九
第百九十四　閲覧……一〇九
第百九十五　閲覧……一〇九
第百九十六　閲覧……一〇九
第百九十七　閲覧……一〇九
第百九十八　閲覧……一〇九
第百九十九　閲覧……一〇九
第二百　閲覧……一〇九

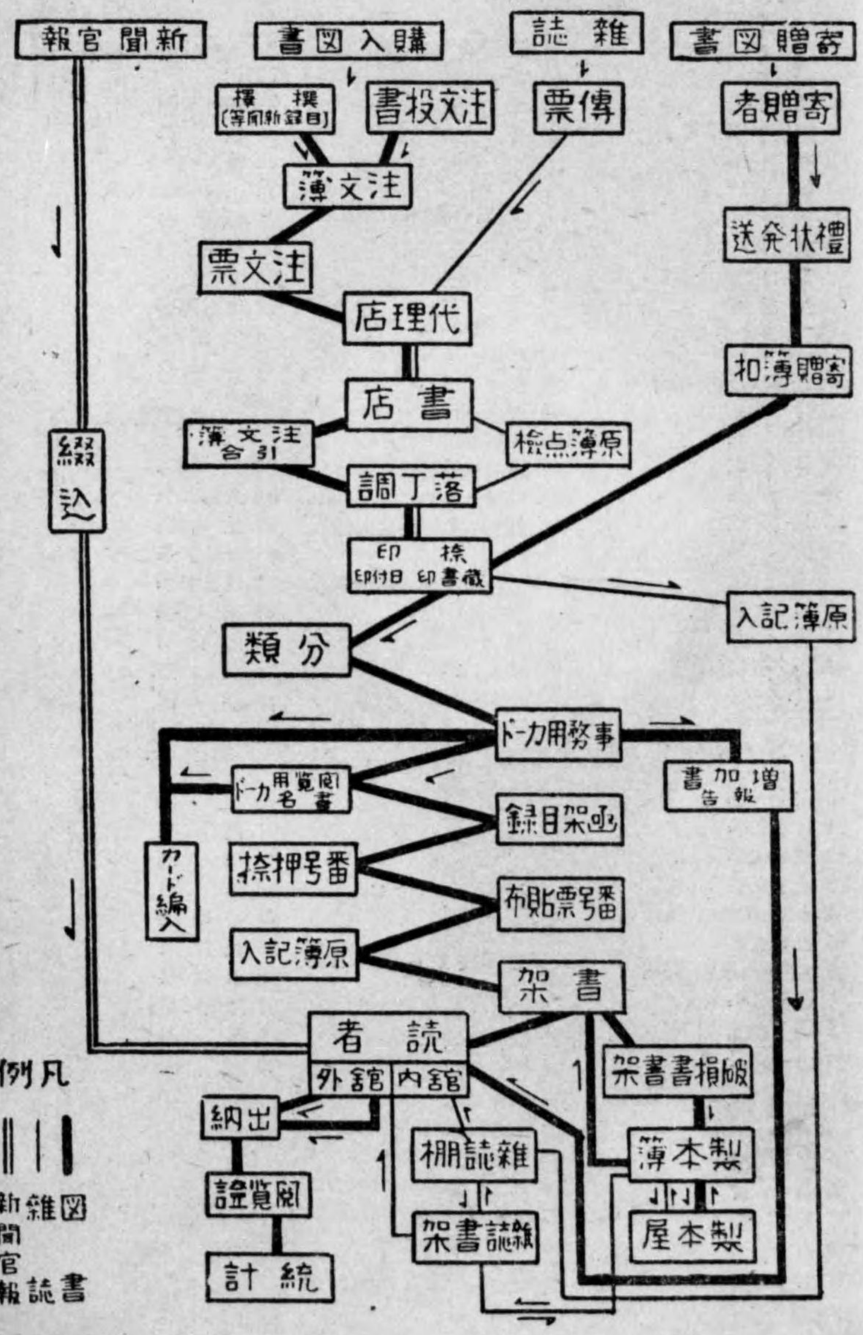


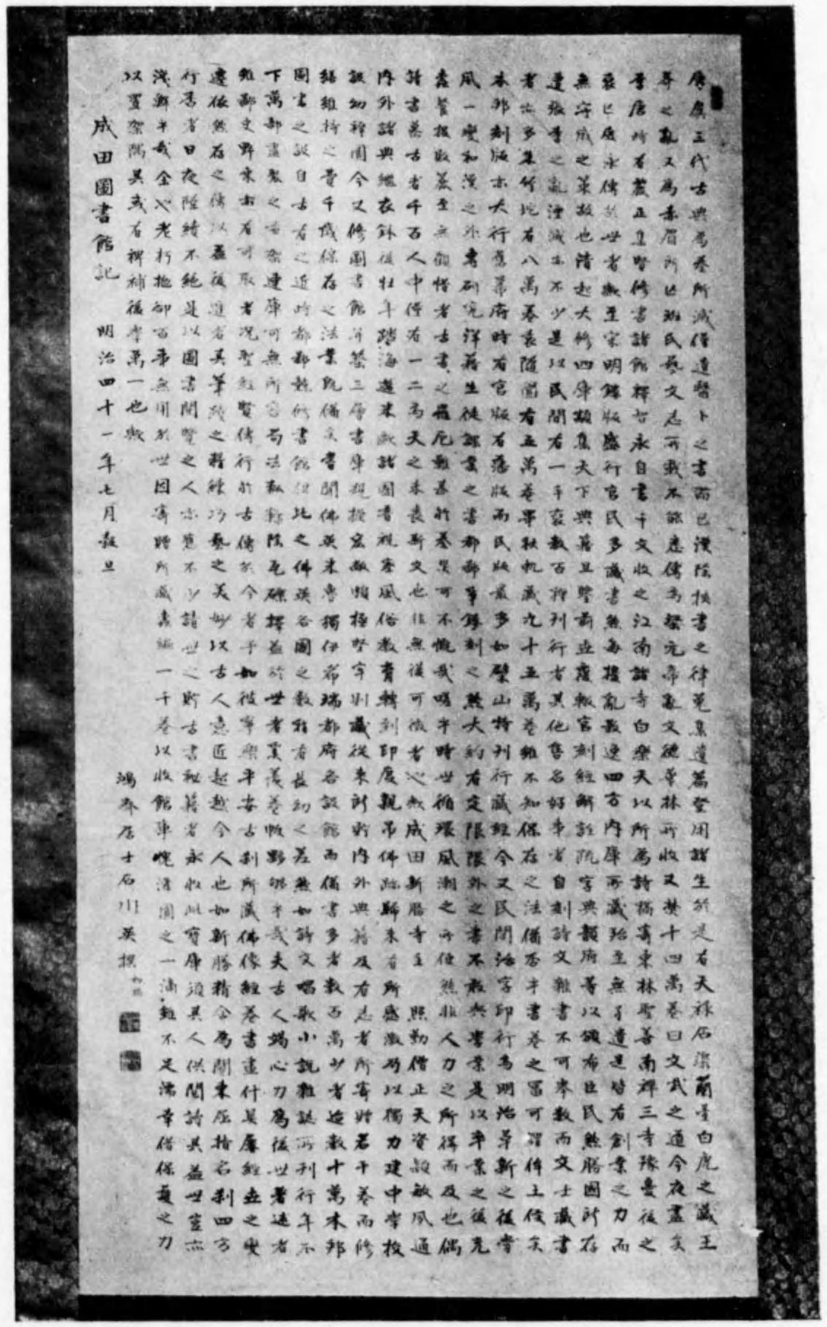
館書圖田成

庫書

圖書館事務體系

一冊の本が圖書館へ來るとかとりしたがつて路徑をすまりと





成田圖書館記

明治四十一年七月長旦

成田圖書館記

鴻巣居士石川英撰

發行　千葉縣印旛郡成田町成田三百十二番地　成田山新勝寺境內ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘頂

圖書分類要目表

0　總　類

00 鄉土資料
01 圖書・圖書館
02 事　彙
03 統　計
04 叢書・全集
05 新聞・雜誌
06 協會・學會
08 稀覯書
09 隨筆・雜書

1　宗教・哲學・教育

10 宗　教
11 神　道
12 佛　教
13 基督教
14 哲　學
15 論　理
16 心　理
17 倫　理
18 支那哲學
19 教　育

2　文學・語學

20 文　學
21 日本文學
22 支那文學
23 歐米文學
24 小說・戲曲・講談落語
25 兒童文學
26 論說・演說・式辭速記
27 語　學
28 國　語
29 外國語

3　藝術・演藝

30 藝　術
31 美　術
32 書　畫
33 書　道
34 繪　畫
35 彫塑・骨董・美術工藝
36 寫　眞
37 印　刷
38 音　樂
39 演　藝

4　歷史・傳記・地理・紀行

40 歷　史
41 日本史
42 東洋史
43 西洋史
44 傳　記
45 地理・紀行
46 日本地誌
47 亞細亞地誌
48 歐羅巴地誌
49 亞米利加其他諸國誌

5　政治・法律・經濟・軍事

50 法　制
51 政　治
52 外交・國際
53 植　民
54 法　律
55 經　濟
56 財　政
57 軍　事
58 陸　軍
59 海　軍

6　社會・風俗・家庭・娛樂・運動

60 社　會
61 社會政策
62 社會運動
63 社會思想
64 社會問題・社會事業
65 家族及兩性問題
66 風　俗
67 家庭及家政
68 娛　樂
69 運　動

7　理學・數學・醫學

70 理　學
71 數　學
72 物理・化學
73 天文學・地文學
74 博　物
75 醫　學
76 基礎醫學
77 臨床醫學
78 治療學
79 保健法

8　工學・交通・通信

80 工　學
81 土木工學
82 建　築
83 機械工學
84 電氣工學
85 鑛山學
86 造船學
88 交　通
89 通　信

9　產　業

90 產　業
91 農　業
92 園　藝
93 林　業
94 畜產業
95 蠶　業
96 水產業
97 工業・工藝
98 鑛　業
99 商　業

昭和十二年度 成田圖書館一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田三百十二番地　成田山新勝寺境内ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹
（電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接續）

沿革

本館ハ成田山ノ經營ニ屬スル圖書館事業ニシテ前貫首故石川僧正ノ發意ニ依リ明治三十四年一月設置同時ニ同師本館ノ館長トナリ同三十五年三月開館閲覽ヲ開始ス、同四十年三月書庫落成、大正十三年一月館長示寂、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ館長トナル、此間主事ノ交迭四名

設備

敷地一、〇二八坪、建物ハ木造二階建一棟、煉瓦造三階建書庫一棟、附屬建物木造平屋建六棟、此ノ坪數三三〇坪ニシテ閲覽室・事務室・目錄室・雜誌書庫・書庫其他各室並ニ便所・小使室・職員住宅等ニ分ル

目的

圖書雜誌ヲ蒐集シテ廣ク公衆ノ閲覽ニ供ス

藏書

藏書數	所在地人口一人當	所在地一戸當
二五、七〇〇冊	一冊强	五四冊强

特別書集

足立栗園文庫　一、三四冊　木村泰賢文庫　一、五八七冊
石川鴻齋文庫　七二冊　白鳥庫吉文庫（一部受理）
望洋文庫　一三、六〇〇冊　依田學海文庫　二、五九六冊
（前貫首石川僧正文庫）

施設

- 館内閲覽
  - 和裝書ニ二種十二冊
  - 洋裝書ニ二種　二冊
  - 和洋共覽ニ右半數
- 貸出
  - 一週間乃至三週間
  - 和裝書三冊洋裝書一冊
- 貸出文庫ニ新更會巡回文庫用並ニ成田中學校生徒學習用トシテ貸出
- 團體貸出ニ青年團體並ニ其他團體ヘ
- 參籠堂文庫ニ斷食參籠者ヘ
- 家庭配本ニ各家庭ノ婦人ヘ配本
- 佛教雜誌論文索引編纂

讀書奬勵施設

- 小學校との連絡
- 講話ニ兒童生徒・青年團體其他
- 青年讀物百選
- 刊行物配布
- 增加書の知らせ
- 青年讀物紹介

圖書閲覽狀況

一日平均ノ閲覽者	一日平均閲覽者數	一日平均閲覽冊數	一日ノ閲覽冊數ト藏書數トノ比	一日ノ閲覽者數ト所在地人口トノ比	閲覽延人員	配本冊數
一九〇・四人	二六五・六冊		〇・〇〇二弱	〇・〇一八强	一、五五〇人	一、五五〇冊

職業上ヨリ見タル閲覽狀況

職業種別	一日平均
學生・生徒	六九・四
諸職業（本表記載外）	四八・八
農業	二八・八
水産業	二六・七
兒童業	一一・六
商業	三・七
交通業	
教育・家・宗教・記者	
鑛業・工業	〇・六
無業	〇・五
官吏・軍人	〇・三
計	一九〇・四

本表ハ順位ニヨリ列記

分類上ヨリ見タル閲覽狀況

分類種別	閲覽百分比
文學・語學	三五・五
兒童・圖書	一七・五
宗教・哲學	一一・三
教育	八・〇
歷史・地理	六・一
傳記・紀行	五・八
總類（鄕土資料）	四・八
政治・法律・經濟・軍事	三・六
産業	三・五
藝術・諸藝	二・八
工學・交通通信	一・一
計	一〇〇・〇

本表ハ順位ニヨリ列記

職員

館長	顧問	主事	職員
成田山貫首大僧正	荒木照定	成田善亮	一四
	今澤慈海		

經費

昭和十二年度決算一三、三三六・〇四円

所在地人口一人當一・二一八强

備考

圖書館ノ附帶施設トシテ行フベキ社會教育的事業ハ新更會ニ於テ實施セラルヽニ付本館ニテハ只單ニ讀書奬勵ノ施設ノミヲ行フ

圖書分類要目

0 總類

- 00 鄕土資料
- 01 圖書・圖書館
- 02 叢書
- 03 統計
- 04 叢書・全集
- 05 新聞・雜誌
- 06 協會・學會
- 08 稀覯書
- 09 隨筆・雜書

1 宗教・哲學・教育

- 10 宗教
- 11 神道
- 12 佛教
- 13 基督教
- 14 哲學
- 15 論理
- 16 心理
- 17 倫理
- 18 支那哲學
- 19 教育

2 文學・語學

- 20 文學
- 21 日本文學
- 22 支那文學
- 23 歐米文學
- 24 小說・戲曲・講談落語
- 25 兒童文學
- 26 論說・演說・式辭速記
- 27 語學
- 28 國語
- 29 外國語

3 藝術・演藝

- 30 藝術
- 31 美術
- 32 書畫
- 33 書道
- 34 繪畫
- 35 彫塑・骨董・美術工
- 36 寫眞
- 37 印刷
- 38 音樂
- 39 演藝

4 歷史・傳記・地理・

- 40 歷史
- 41 日本史
- 42 東洋史
- 43 西洋史
- 44 傳記
- 45 地理・紀行
- 46 日本地誌
- 47 亞細亞地誌
- 48 歐羅巴地誌
- 49 亞米利加其他諸國

5 政治・法律・經濟・

- 50 法制
- 51 政治
- 52 外交・國際
- 53 植民
- 54 法律
- 55 經濟
- 56 財政
- 57 軍事
- 58 陸軍
- 59 海軍

6 社會・風俗・家庭・娯樂・

- 60 社會
- 61 社會政策
- 62 社會運動
- 63 社會思想
- 64 社會問題・社會事業
- 65 家族及兩性問題
- 66 風俗
- 67 家庭及家政
- 68 娯樂
- 69 運動

成田圖書館

第壹　位置並びに沿革

一　位置

成田圖書館は、成田町成田三百十二番地に在りて、成田山の東南麓勝地の中央に位し、東は成田高等女學校に、西は成田山本堂に隣し、南に成田町市街地を控へ、北は丘陵地帶の成田山公園に接し、翠滴る老樹を以て蔽はれ、冬は暖かに、夏は涼しく、圖書館としては最好の位置である。

二　沿革

本館は成田山の經營に屬する、圖書館事業であつて、明治卅四年一月十一日設置を開申し、翌卅五年一月一日を以て開館した。即ち前貫首故石川僧正が明治卅一年歐米視察の途に上り、同卅三年四月歸朝後直に列國の風潮に鑑み、積年の理想を實現する爲に設置せられたものであるが、館舍は取り敢へず現地に建築されてあつた一府三縣農水產物品評會々場の跡を、そのまゝ使用することになつたのである。

斯くて開館に際し、從來新勝寺に所藏せられてゐた佛書・漢籍約七千冊、是れに石川僧正所藏の宗教・哲學・教育・文學・語學・歷史・地理・傳記・紀行其の他の新刊書約七千冊と、洋書五百餘冊、合計約壹萬五千冊を藏書として開館し、尙ほ更に當町石川愛一郎氏・三橋金太郎氏・鳥居直哉氏・大野市平氏・小川叡應氏を始め、其の他の有志者より多數の圖書を寄贈され、同年五月までに其の數一千餘冊を增加したのである。然るに當時は書庫もなく、目錄も具備せず、只同建築物の四周に書架を列べ、只一人の事務員にて閱覽事務を取扱つてゐたが、其の後漸次閱覽人の增加と共に、圖書も增加し、職員も增加となり、同三十五年六月には和漢書分類假目錄完成、次いで同三十八年二月より館外貸出を開始、爾來年を追ひて藏書數も益々增加したので、書庫の必要を感じ、同三十九年三月書庫新築着手、同四十年六月九日之が落成式を擧行、此の日を以て本館永遠の記念日と定めた。

藏書數も同四十一年には四萬冊となり、愈々印刷目錄の急務を告げたので、同四十三年十月には和漢書分類目錄第壹編を刊行、更に大正三年には同第貳編を刊行し、又閲覽方面に於ても、同四十四年一月より夜間開館を實施して、一層閲覽者の便益を圖ることゝなつた。

然るに大正十三年には、不幸にして館長石川僧正が物故せられたが、現貫首荒木僧正には直に其の後を襲ひて館長に就任、鋭意館勢の發展に留意され、時代の趨勢に順應して圖書備付の充實・鄕土資料の蒐集を始めとして、貸出文庫・團體貸出・參籠堂文庫並びに家庭配本の實施・印刷物の刊行・各種展覽會の開催等を行ひて從來の面目を一新し、藏書數も約十二萬を算し、閲覽人も頓に增加して一日平均百數十名を數ふるに至つた計りでなく、本館をして眞に積極的進出の現代的圖書館とせられたのである。

此の間事務主任たる主事の交迭は四名に及んでゐる。卽ち初代の主事は高津親義で、其の功績も少くなかつたが、昭和二年十二月勇退して顧問（同十一年十一月卒去）となり、其の後小林力彌・高井觀海の兩主事を經て、同九年には司書成田善亮昇格して主事となり、以て今日に至つてゐる。

第貳　設備並びに施設

一　建物・設備

書庫を除く外の本館建物は、もと〳〵舊物利用のものであるから、圖書館として遺憾の點多々あることは免れないが、從來之を適當に區分し、階上を一般閲覽席に、階下を兒童・婦人・新聞の各席に指定してゐる。卽ち閲覽室其の他の建物設備を略記すれば次の通りである。

閲覽室（木造二階建）延七十七坪、目錄室（木造）六坪、事務室（同）九坪、宿直室（同）四坪、使丁室（同）三坪、休憩室（同）三坪、應接室（煉瓦造）六坪、書庫（煉瓦造三階建（延九十坪）雜誌書庫（木造）六坪、住宅其他附屬建物（木造）延百二十六坪餘

就中書庫は明治四十年の新築に係るが、藏書充滿、增築必要急なるものがある。

二　館則

成田圖書館規則

第一條　本館ハ主トシテ一般圖書、雜誌等ヲ蒐集シテ廣ク公衆ノ閲覽ニ供シ社會ノ智德啓發ニ裨益スルヲ以テ目的トス

第二條　何人ニテモ滿十二歲以上ノ者ハ本館ニ來リテ圖書ノ借覽ヲナスコトヲ得

第三條　本館ハ左ノ時限ヲ以テ開閉ス

	開館時限	閉館時限	開館時限	閉館時限
四月・五月・六月・七月・八月・九月・十月	午前八時	午後八時三十分	十一月・十二月・一月・二月・三月	午前九時　午後八時

第四條　本館ノ定休日ハ左ノ如シ但臨時休館ハ其時々掲示ス

歲首　自一月一日至同七日　館內掃除　毎月末日
紀元節　二月十一日　天長節　四月二十九日
記念日　六月九日　明治節　十一月三日
曝書期　九、十月中凡十日內外　歲末　自十二月二十八日至同三十一日

第五條　本館內ノ閲覽ハ總テ無料トス

第八條　圖書閲覽希望者ハ圖書閲覽證ヘ求需ノ書名冊數番號及住所職業氏名月日ヲ記入シ出納所ヘ提出シテ借受クベシ

第七條　貸附圖書ノ員數ハ求覽人ニ對シ一時ニ和裝書ハ二種十二冊洋裝書ハ二種二冊ヲ限リトシ和洋併借ノ時ハ各其ノ半數ニ過グルヲ得ズ

但語學ニ關スル辭書ノ併借ハ此ノ制限外トス

第八條　借受ノ圖書ハ閲覽室外ヘ携帶スルコトヲ得ズ

第九條　過失ト故意トニ關セズ借受ケノ圖書ヲ紛失シ又ハ汚損毀傷シタル時ハ同一ノ圖書若クハ相當代價ヲ辨償セシム但汚損ノ狀況ニ依リ本文ヲ斟酌スルコトアルベシ又其行爲ノ次第ニ依リ一ケ月乃至一年間登館ヲ謝絕スルコトアルベシ

第十條　本館ノ規則ニ違背シ又ハ不法ノ行爲アル者ハ其ノ情況ニ依リ登館ヲ謝絕スルコトアルベシ

第十一條　閲覽室ヲ一般・婦人・兒童ノ三區ニ別チアレバ猥リニ他席ヲ侵スベカラズ

第十二條　閲覽室內ニ於テハ一切音讀・談話・喫煙ヲ禁ズ

第十三條　何人ニテモ圖書ヲ寄贈セラルヽトキハ其ノ目錄員數及ビ住所氏名ヲ詳記シ寄贈圖書ニ添テ送付セラレタシ但寄贈圖書ノ運搬費用ヲ自辨シ難キ向ハ時宜ニヨリ本館ヨリ支辨ス

第十四條　凡ソ公衆ノ閲覽ニ供シ若クハ保管ヲ請フノ目的ヲ以テ本館ニ圖書ヲ委託セント欲スル者ハ其ノ事由目錄員數ヲ詳記シ必ズ本館ヘ照會シ承諾ヲ得タル後其ノ圖書ヲ送致サルベシ

委託ノ圖書ハ館藏ト同一ノ取扱ヒヲナスベシ

委託ノ圖書ハ厚ク保藏スト雖モ不幸火災盜難其ノ他天災ニ罹リテ損失敗亡ヲ來スコトアリトモ本館ハ其責ニ任ゼズ

第十五條　館外圖書貸出ハ別ニ之ヲ定ム

成田圖書館貸出規則

第一條　本館圖書帶出ノ希望者ハ左記ノ手續ヲナスベシ

一　圖書帶出願書ヲ差出スベシ（用紙ハ本館交附）

二　圖書帶出願書ニハ本館ノ承認セル保證人ヲ要ス

三　帶出料金壹圓ヲ豫納スベシ

四　成田中學校・成田高等女學校・成田學園・成田幼稚園・新更會ノ教職員ハ同校長・主任若クハ理事ノ保證ニ依リ帶出ヲ許可ス

五　新勝寺徒弟詰合員ニ限リ同寺執事ノ證明ニ依リ成田尋常高等小學校職員ニ限リ同學校長ノ保證ニ依リ帶出ヲ許可ス

六　四・五ノ場合ニハ帶出料ヲ要セズ

第二條　本館ハ前條ノ手續ヲ了シタル上ニテ帶出簿ヲ交附ス

第三條　帶出有効期間ハ一ケ年トス

第四條　貸出圖書數ハ一回ニ付和裝書ハ三冊以內洋裝書ハ一冊トス

第五條　貸出期間ハ一週間以內ノ範圍ニ於テ本館ノ見込ヲ以テ其時々之ヲ定ム

第六條　期間ニ至リ尙續借セントスルモノハ一旦返納シ更ニ借受ケノ手續ヲナスベシ

但他ニ同書ノ借覽ヲ請フモノアル時ハ續借ヲ謝絕スルコトアルベシ

第七條　特許借受ノ圖書ト雖モ本館ニ於テ必要アル時ハ臨時返戻セシムルコトアルベシ

第八條　帶出權ヲ得タルモノニシテ他所ヘ轉居シタル場合又ハ改名シタル場合ハ其ノ都度屆出ヅベシ

第九條　保證人死亡其他事故ニ依リ資格ヲ失ヒタル時ハ更ニ保證人ヲ定メ定式ノ證書ヲ差出スベシ

第十條　左記ニ該當スル圖書ハ帶出ヲ許サズ

一　大部ノ圖書

二　各學科ノ事彙・辭書類・書目・新聞

三　館內閱覽人ノ請求多キ圖書

四　新刊圖書ハ二ケ月乃至三ケ月後定期刊行書雜誌類ハ裝釘ノ上ニ非ザレバ貸出サズ

第十一條　借覽期限ヲ經過シ本館ノ注意ヲ受クルコト二回ニ及ビ尙返戻セザル時ハ本館ハ圖書帶出ノ效力ヲ取消シ其事情ニヨリ再ビコレヲ許可セザルベシ此ノ場合ニ於テハ帶出圖書ノ代金ハ保證人ニ辨償セシムベシ

第十二條　借受圖書ヲ紛失シ若クハ汚損シタル時ハ本人及ビ保證人ハ辨償ノ責ニ任ズ

第十三條　圖書帶出ハ開館期間中ニ限ルモノトス

第十四條　圖書帶出ヲ中止セントスルトキハ其旨屆出ヅベシ

但帶出料ハ返戻セズ

第十五條　圖書帶出有効期間滿期トナリ引續キ希望ノモノハ更ニ帶出願書ヲ差出スベシ

三　藏　書

本館藏書は明治三十五年開館當時は、僅に壹萬五千冊に過ぎなかつたが、爾來年々二・三千冊を增加し、昭和十二年三月末現在では次の通りとなつた。

和漢書	一一〇、五九九冊
洋書	五、一一四冊
計	一一五、七一〇冊

藏書に就いては、取り立てて特色あるものとてはないが、佛書の貳萬餘冊、就中密敎關係書の豐富なことは特徵としてよい。又白鳥博士の厚意によつて得たる朝鮮本の一部等は、本館の稀覯書として聊か誇りとするものである。此の外康平弘安の古寫本・慶長以前の版本・古德碩學の書入本・手澤本並びに洋書に於ては壹千五百年代の古刊本其の他多少の由緒歷史附のものもある。尙ほ所藏中の文庫としては、望洋文庫（石川僧正文庫）・依田文庫（依田學海文庫）・栗園文庫（足立栗園文庫）・木村文庫（木村泰賢博士文庫）・白鳥文庫（白鳥庫吉博士文庫）・池田文庫（池田僧正文庫）等があるが、これ等は特殊の關係で寄贈又は移讓されたものである。

藏書の增加率は、大體寄贈のものを合して年々貳千餘冊で現在約拾壹萬五千冊を算するに至つた爲め、成田町の人口壹萬四百拾九人（昭和十二年十月一日現在）に對して、壹人當り約拾壹冊となり、又これを成田町現住戶數貳千百貳拾八戶（同日現在）に割當れば、壹戶當り約五十四冊づゝとなるのであるから、都會中心に偏重し勝な今日、眞に地方的貢獻をなしつゝあるといつてもよいのである。

尙ほ雜誌は新聞を合して、約貳百五十餘種の備附けがあるが、此の中雜誌は年々合冊製本して一般圖書と同樣の取扱をもなしてゐる。殊に佛敎雜誌に至つては、明治後半期より蒐集してゐるので、近時遙々東京より專門の學生の來館者日に多きを加ふるに至つたことは、誠に喜ばしいことである。

四　目　錄

目錄は大別して來館者の爲めのカード目錄と、外部にある者に對する印刷目錄との二種に分ける事が出來る。

本館備付のカード目錄は「分類」と「書名」の二種である

が、實際上使用率の多いのは矢張り分類目錄である。更にこれを時代別に見るときは、舊きものよりは新しいものが利用されてゐる。尤も昭和四年前の分類は多少杜撰であるのに加へて、其の後のものは從來の八門分類制を廢し、新制の十進分類に改めたるを以て、無論組織も一變し、精細となつた爲め、檢索上の利便を增大したことにもよる。

印刷目錄は第二編までの刊行成り、大正三年初期までの藏書を發表し得たのであるが、其の後種々の關係上印刷の機會がなく、今日まで遷延してゐるけれども、事實其の內容は優に第四乃至第五編まで刊行し得る見込である。隨つて他日續編上梓の曉は一段の貢獻をなし得ることと思ふ。

次に、新着圖書の紹介方法としては整理濟の圖書を閱覽室の新刊書架に排列公開し、此の中主なるものは季刊のパンフレット「增加書の知らせ」に登載して希望者に頒布してゐる。

五　施　設

本館は公共圖書館であり、從つて圖書閱覽以外に、附帶施設として社會教育的事業をも行はなければならない筈であるが、當山に於ては斯の方面の施設として、別に新更會と稱する機關を設け、ここで青年並びに一般成人の社會教育や修養を目的とする講演・講習其の他種々の事業を實施し、更に青年團巡回文庫や、鄉土資料の陳列をも行つてゐるので、本館の附帶事業とすべき社會教育的施設としては、專ら讀書奬勵に關する施設だけに止まつてゐる。今其の施設の主なるものを擧ぐれば次の通りである。

小學校との連絡

讀書の鼓吹と云ふ點に就いては、成人間に之を求むるよりも、寧ろ幼少年の時代より書物に親しむの習慣と精神を胚胎せしむるの要あるは、今更言を俟たない事柄である。それについてはまづ第一に圖書館と小學校との連絡を考へなければならない。本館に於ては此の點を深く考慮し、先年來小學校と協定の結果、差當り五學年以上の兒童を各級交替にて、殆ど隔日位に登館せしめ、每回約二時間位自由讀書をなさしめて、讀書の習慣を養成し、一方校外教授の目的を達しつゝ、圖書館の實際的知識を體得せしめ、尙ほ卒業後に於ける圖書館利用の途を講じつゝあるが、其の結果は頗る良好である。

參籠堂文庫

成田山に參籠する斷食者の信仰・修養の資として、昭和十一年七月五日より參籠堂內に貸出文庫を開設したが、參籠者よりは相當に利用され、良好な成績を收めてゐる。本年中の成績は次の通りである。

貸出冊數　七十冊　　閱覽冊數　八百十冊

內最も多く讀まれたものは、通俗的な佛教書・修養書・隨筆・之に次ぐものは小說類である。

貸出文庫

新更會に對して巡回文庫用の一部として、文庫の貸出を行つてゐる外、成田中學校生徒學習用圖書をも、文庫として貸出してゐる。

團體貸出

四隣町村青年團體又は其の他團體に對して、希望の圖書を一纏めにして貸出してゐる。

婦人のための「家庭配本」規定

一、家庭配本とは、御家庭にある主婦の方を始め、いろ〳〵の事情で圖書館へ通ふことの出來ない御婦人方の爲めに自宅に居ながらにして本を讀める樣にお好みの本を圖書館からお屆けすることです。

二、加入者の範圍は、成田町（當分のうち土屋、寺臺、鄉部、圍護臺、不動ケ岡を除く）に居住する方ならどなたでも差支ありません。但し場合により保證人を要することがあります。

三、加入御希望の方は『申込書』をお出し下さい。『申込書』は本館から差上げますが、お申込の形式は口頭、電話葉書何れでもかまひません。

四、申込は凡て月ギメとし、一家族のうち何人でも差支ありませんが、一人一口として御申込下さい。

五、加入された方には、希望の本を選ぶべき『配本用圖書目錄』をお貸し致し、又新刊書の目錄を發行の都度差上げます。

六、目錄によつて御希望の本がきまりましたら配本手が伺つた時、請求用紙（配本手持參）に記入の上お渡しになれば次回に配本致します。

七、每回貸出期間は一週間とし、配本は月四回、冊數は一人一冊と致します。

八、配本料及雜費として一口一ケ月金廿五錢の手數料を申受けます

九、借りた本は必ず期日にお返し下さい。これを守らないとお互の迷惑になります。尙本をなくした場合はそれと同樣の本、又は代價を頂きます。

十、『家庭配本』と『一般貸出』とは全然別に扱ひますから假に一家族のうちで兩方御加入になつてゐても『一般貸出』の方は配本手に托することを堅くお斷り致します。

實施の成績

圖書館に於ける閱覽者中、婦人の閱覽者が男子に比して殊に少數であることは、一般的に見る傾向であるが、家庭教育の衝に當り、一家の主婦として將又母として立行くべき婦人

が此の狀況に在ることは大に憂慮すべきことである。此の缺陷を幾分にても匡救しやうとする目的を以て、昭和九年十月より「家庭配本」と稱し、前掲の如き規定によつて、積極的に各家庭の婦人に呼びかけ、希望の圖書を直接配達することにして來たが、是に依つて頓に婦人の讀書心を啓培し、年々其の效果の頗る多かつたことを認めるのである。

今左に本年度の實施成績を示せば次の通りである。

字別及月別に見た配本人員（昭和十二年度）

字別＼月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	計
花崎町	五三	五六	一四	一三	一四	六	一	二三	二〇	二〇	三八	二四	二七八
上町	八	八	一	六	一六	六	八	二〇	一〇	六	一六	一三	一一六
幸町	一八	二八	二四	一	四	一	八	八	八	八	二四	二四	一五四
仲町	一六	一六	一六	八	六	六	四	二〇	二〇	一三	八	六	一三八
本町	八	八	二〇	四	六	二	四	六	四	八	一六	一三	九八
田町	一六	一四	八	六	四	六	四	四	一	一	一六	一〇	八八
東町	八	四	一	二	四	二	一	八	六	二	一	一	三六
奥山	八	八	一	四	六	一	四	一	二	一	一	一	三二
土屋	二三	一六	一八	一	三三	一八	一〇	四	一三	一六	二四	二四	一九六
寺臺	六	一	二	一	一	一	四	一六	一二	二四	一二	一〇六
圍護臺	一六	一六	四八	二〇	三〇	三〇	二〇	二〇	二六	一八	二四	二〇	三〇八
計	一七八	一七四	一六〇	八二	一二三	七六	六二	一三六	一二四	一〇二	一九〇	一四四	一五五〇

分類別に見た配本册數

分類別	配本册數	分類別	配本册數
總類	二四	社會・風俗・家庭・娯樂・運動	七八
宗教・哲學・教育	一一二	理學・數學・醫學	四八
文學・語學	一、〇〇八	工學・交通・通信	二
藝術・演藝	三〇	產業	一〇
歷史・傳記・地理・紀行	七八	兒童圖書	一一〇
政治・法律・經濟・軍事	五〇	計	一、五五〇

佛教雜誌論文索引編纂

本館に於ける佛教雜誌には、明治後半期時代より蒐集したものが多數あり、從來專門學徒研究の資料として相當に貢献して來てゐるが、廣汎に涉るこの雜誌に索引のない爲め、調査上に不便とする所が少くない。依て本館にては此の缺陷を補ふため、目下一々該雜誌の內容を調査し、之が索引の編纂をなすべく努力中である。

刊行物

一　青年讀物百選

一般青年に對する讀書奬勵の目的にて、昭和十一年度圖書館週間に際し「青年讀物百選」第壹輯を刊行、遍く一般に頒布して讀書の便に供し、各方面より多大の歡迎を受けた效果に鑑み、本年度も同樣第貳輯を刊行、過去一箇年間本館備付の圖書中より、特に青年に適する良書百數册を選定し、之に解題を付して一般に頒布した。

一　增加書の知らせ

本印刷物は年四回刊行して、遍く各方面に頒布したが、これは新着圖書を一般に周知せしめて、讀書層の便益を圖る目的のものであるが、その內青年に適當するものには、特に略解題を付し、尙ほ讀書奬勵に關する記事・圖書寄贈者芳名其の他の事項をも、併せ掲げたものである。

一　青年讀物紹介

青年の讀書奬勵に努むる爲め、每月新更會機關誌「新更」に「青年讀物ペーヂ」として、青年に適する新刊書凡そ十册を選定、これに解題を付して掲げた。

第參　閲覽狀況

閲覽圖書の第一位が文藝物にあることは、何れの公開圖書館に於ても同樣の現象ではあるが、讀書の階梯は先づ文藝物から入るのが通例であるから、これ等の大衆は寧ろ誘掖指導すべき讀者層として、大切なるお得意と見做すべきである。

尙、賢實なる方面の特殊傾向は、近年佛教關係雜誌を研究する遠來の學徒が增加して來た事である。これは本館が比較的舊刊の佛教雜誌を收藏し居ることゝ、一方都會に於ける有數圖書館は、其利用上地方のそれと異り、手續煩雜且つ不便なる點多々あるが爲である。

次に、一般入覽者の種別を見るに、從來男子に比して婦人が極めて劣勢であつたが、別掲の如き家庭配本を實施してより斷然面目を一新した傾きがある。

又、館外貸出は、個人としては現在三四五名を算し、而も累年增加の傾向にあり、團體としては、隣町村青年團への貸出をはじめとし、更に「新更會」への巡回文庫用として常時約四百册を貸出してゐる。

次に掲ぐる閲覽統計中に於て、兒童の數は本館の設備上特に兒童室の設けなく自由開放制なる爲、統計洩れの閲覽も相

當あるを以て、事實はより多き數字にあるものと見なければならぬ。

昭和十二年度 閲覽統計（開館日數三一二日）

閲覽圖書類別

種別	館内	館外	合計	百分比例
總類	三、二五三	一、七七七	五、〇三〇	六・一
宗教・哲學・教育	三、七二三	五、六五七	九、三八〇	一一・三
文學・語學	一三、〇七四	一六、三五七	二九、四三一	三五・五
藝術・諸藝	一、五四三	八一〇	二、三五三	二・八
歴史・傳記・地理・紀行	二、七六七	三、八六五	六、六三二	八・〇
政治・法律・經濟・軍事	一、三五九	一、六四三	三、〇〇二	三・六
社會・風俗・娯樂・運動	一、九二五	二、〇九四	四、〇一九	四・八
理學・數學・醫學	三、五七二	一、二一〇	四、七八二	五・八
工學・交通・通信	四〇〇	四九〇	八九〇	一・一
產業	一、〇八二	一、七七九	二、八六一	三・五
兒童圖書	一二、六六三	一、八二四	一四、四八七	一七・五
合計	四五、三六一	三七、五〇六	八二、八六七	一〇〇・〇
一日平均	一四五・四	一二〇・二	二六五・六	

閲覽人職業別

種別	館内	館外	合計	一日平均
農樂・水産業	一、〇二三	七、九八二	九、〇〇五	二八・八
鑛業・工業	四〇	一六〇	二〇〇	〇・六
商業・交通業	四二七	三、二一〇	三、六三七	一一・六
教育家・宗教家・新聞雜誌記者	二七六	七四三	一、〇一八	三・七
官吏・軍人	六二	三四	九六	〇・三
學生・生徒	一五、五三九	六、一二六	二一、六六五	六九・四
其他	三、六五七	一一、六一七	一五、二七四	四八・八
無業	八九	五八	一四七	〇・五
兒童	七、八一一	五三四	八、三四五	二六・七
合計	二八、九二四	三〇、四六三	五九、三八七	一九〇・四

第四　歴代館長・顧問・主事

本館の歴代館長・顧問・主事は左の通りである。

歴代館長

石川照勤（自明治三十四年一月十一日至大正十三年一月三十一日）
荒木照定（自大正十三年二月一日至現在）

歴代顧問

高津親義（自昭和三年一月一日至同十一年十一月二日）
今澤慈海（自昭和十一年五月二十八日至現在）

歴代主事

高津親義（自明治二十五年六月一日至昭和二年十二月三十一日）
小林力彌（自昭和三年五月四日至同四年四月十七日）
高井觀海（自昭和五年五月五日至同六年四月十九日）
成田善亮（自昭和九年一月一日至現在）

第五　職員

昭和十三年三月末現在本館職員は左の通りである。

館主兼館長　荒木照定
顧問　今澤慈海
主事　成田善亮
司書　高田定吉
同　小川益藏
同　旭壽雄
同　波多野述麿
事務員　武士田文哉
同　岩館衛
囑託　佐藤凛明
同　本橋清
雇　瓜生百合子
配本手　綿貫實
同　山室靜

第六　經費

本館昭和十二年度決算は次の通りで、これを所在地成田町人口壹萬四百四拾九人に割當ると、一人當り金壹圓貳拾八錢强となる。

昭和十二年度決算額　一三、三三六・〇四圓

職員給及雜給	六、五四三・〇〇
圖書費（新聞雜誌等ヲ含ム）	四、二三八・一〇
需用費其他	二、〇九二・四四
營繕費	四六二・五〇

第七　昭和十二年度　錄事

四月廿一日　宮內省圖書寮御用掛猪熊信男氏來館所藏ノ圖書二、三ヲ鑑定セリ

五月廿六日　主事成田善亮日本圖書館協會ヨリ圖書館用語統一委員ヲ依囑セラル

六月九日　國定教科書ニ新タニ圖書館ノ一課ヲ挿入セルニ依リ成田小學校職員及今澤顧問・成田主事出席本館ニ於テ教授上ノ懇談ヲナス

七月廿六日　顧問今澤慈海氏日本圖書館協會監事ニ當選セラル

七月廿八日　閱覽人昇降口左側ニ「ニュース寫眞」ヲ掲出シ、今回ノ事變等ヲ速報ス

七月廿八日　司書小川益藏成田山一千年祭事務局職員ヲ兼任ス

八月一日　成田山ニ於テ皇軍獻翼贊國威宣揚大護摩嚴修、本館職員列席ス

同日成田山執事及事業主任者上京陸海軍ヘ献金ヲナス

九月廿一日　主事成田善亮日本圖書館協會評議員ヲ依囑セラル

十月一日ヨリ十月十日マデ　曝書並ニ圖書整理ヲナス

十一月十三日　顧問今澤慈海氏・成田主事大阪香里別院三週年法要參拜ノ爲大阪ニ出張更ニ京都ニ赴キ仁和寺・大覺寺・神護守等ニ寬朝僧正ノ資料ヲ探訪歸館セリ

十一月廿八日　日本圖書館協會ニテ皇軍慰問ノ圖書雜誌ヲ募集セルニヨリ有志者ノ寄附ヲ取纒メ同協會ヘ送ル

一月廿二日　國民精神總動員强調週間行事打合ノタメ成田主事千葉縣圖書館ヘ出張

三月三日　時局ニ對スル讀書指導奬勵研究會ヲ千葉縣圖書館ニ於テ開催館員岩館衛出席ス

三月廿二日　成田山史完成奉告ノ大護摩ヲ修行、係員タル本館係員參列

第八　昭和十二年度　圖書寄贈者芳名

（五十音順　敬稱省略）

高松宮家

好仁親王行實　四
良仁親王行實
幸仁親王行實
正仁親王行實
有栖川宮記念厚生資金選奬錄

外一

青森縣中央圖書館　一
青森通俗圖書館　二
足柄下郡教育會　一
亞細亞高等交通學校　四
天野政義　七
鮎川義介　一
池上幸二郎　一
石川縣立圖書館　八
石川甚兵衛　三
石川富士雄　三
石橋俊一　一
石橋德也　五
石原岩治　八
市川億次郎　一
一戸岳逸　一
岩本信一郎　一
印旛郡教育會　四
映光社　二
英語通信社　一
江崎小秋　一
大阪帝國大學圖書館　一
大阪毎日新聞社　一
大谷大學圖書館　四
大塚篤三　七
大塚稔　一
大野市平　一
大野龜之助　二
大橋圖書館　三
岡田健藏　三
小川保　一
小貫金三郎　一
恩賜財團愛育會　一
海軍々事普及部　一三
外務省　五
外務省情報部　二
外務省調査部　四
鹿島伯爵家　一
家政理學研究會　二
加藤精彦　一
金澤文庫　一
川村昌助　二
樺太廳長官々房文書課　四
河合定嘉　一
簡易保險局　一
關西學院文學部文學會　一
關西團參事務局　一
岸訴訟記錄整理事務所　二
北里闌　三
京橋圖書館　一
金融研究會　二
　　三

工藤高治　一
倉持秀峰　二
倉持高雄　五
黑田亮　一
慶應義塾圖書館　一
慶應義塾豫科會　二
啓明會　六
建築土木資料集覽刊行會　一
小泉信三　一
工業品規格統一調査局　一
侯爵前田家　一
興風會圖書館　二
國際佛教協會　一
互尊文庫　一
近藤記念海事財團文庫　一
埼玉縣立圖書館　五
齊藤報恩會　一
佐藤恒二　一
三省堂　一
鹽原傳　一
澁澤敬三　一
鳩本義典　二
清水組　一
社會局　一
上海自然科學研究所　二
十六ミリ映畫教育普及會　一
春秋社　一
市立函館圖書館　一
神宮皇學館　二
眞宗學研究會　一
新聞廣告業嚆矢廣告社　一
集鴨高等商業學校　一
杉浦丘園　一一
杉浦宗三郎　一
須藤信興　二
生命保險會社協會　一
大觀堂書店　一
臺南高等工業學校　一
臺南市立臺南圖書館　一
大日本雄辯會講談社　一
臺北高等商業學校　一
臺北市立圖書館　一
臺北帝國大學庶務課　一
臺灣總督府圖書館　一
高木亮　二
高田芳枝　一三
寶塚文藝圖書館　一
拓務省　二
田中愛治郎　一
千葉醫科大學　一
千葉觀光社　二
千葉縣　二八
千葉縣教育會　二
千葉縣佐倉種畜場　一
千葉縣社事兵事課　一一五
千葉縣總務部統計課　四
千葉縣圖書館　一二
茶業組合中央會議所　八
中央社會事業協會社會事業研究所　三
中央大學々員會　二
中央融和事業協會　一
朝鮮總督府　四
朝鮮總督府專賣局　二
朝鮮總督府遞信局　一
朝鮮總督府圖書館　三
千代田火災保險株式會社　四
帝國工業教育會　一
帝國圖書館　五
帝國ローマ字クラブ　一
帝室博物館　一
遞信省管船局監理課　一
遞信省大臣官房文書課　一
遞信省郵務局業務課　二
鐵道省運輸局　一
天理圖書館　四
土井豐　四
東京工業大學　一
東京市監査局都市計畫課　三
東京市教育局　一
東京製藥同業組合事務所　一
東京鮮滿案內所　一
東京文理科大學　一
東北帝國大學圖書館　一
東洋協會　二
東洋大學　二
富永先生の會　六
土耳古大使館事務所　二
長岡市立互尊文庫　四
長崎圖書館　一
長戸路政司　一
中西藥局　一
濤川高之助　一
行方喜一　一
成田山明王院　一
成田町役場　一
成田郵便局　二
南滿洲鐵道株式會社　一
日蘇通信社　四
日獨文化協會　四
日滿經濟調査局　一
日本醫科大學　三
日本エスペラント學會　一
日本學術振興會　一
日本興業銀行調査課　一
日本互尊社　二
日本赤十字社　二
日本大學文學科　六
日本畜産研究會　四
日本圖書館協會　一
日本ニッケル時報局　一
日本乘合自動車協會　一
日本放送協會　二
乳井貢顯彰會　一
忍頂寺務　一
農林省大臣官房秘書課　一
農林省農務局　一
博進社　一五
博文館　一
橋本博　一
長谷默觀　三
波多野逸曆　一
紘社　一
濱野照貫　六
林天然　一
林稜二　三
哈爾濱鐵路圖書館　二二
光丘文庫　一
日比谷圖書館　二
被服協會　二
兵庫縣學務部　二
福岡縣廳社寺兵事課　一
佛教社　一
船橋市役所　五
文化語學社　一
文明協會　一
北京近代科學圖書館　一二
ポースラスビハリ　一
牧野元次郎　四

第九 昭和十二年度 雜誌新聞寄贈者芳名

（毎號寄贈者のみを掲ぐ）

（五十音順、敬稱省略）

松井天山 二
松田福一郎 一
滿洲國中央社會事業聯合會 一
三上義夫 三
水野葉舟 九
三橋金太郎 一
宮武外骨 一
村上一郎 一
明治大學圖書館 一
木影會 一
諸岡延和 八
文部省 二
文部省社會教育局庶務課 六
文部省圖書館講習所學友會 一
安田文庫 一
山一證券株式會社 二
山口縣立圖書館 三
山口忠五郎 一
山梨縣立圖書館 三
山本一次 三
山本久 一
結城素明 一
吉植庄一郎 一
癩豫防協會 二
林業試驗場 三
早稲田大學圖書館 一

愛土出版部
愛土
秋田縣立圖書館
秋田圖書館報
石川縣立圖書館
石川縣立圖書館報
石川甚兵衛
外交時報
國家學會雜誌
大日本國防義會々報
內觀
三田評論
牛込新報社
牛込新報
宇宙社
宇宙
英語青年社
英語青年
大阪出版社
英文大阪毎日學習號
大阪商船株式會社
海
海防義會
海防
外務省情報部
國際月報
國際事情

外務省調査部
露西亞月報
科學博物館事業後援會
自然科學と博物館
學事新報社
學事新報
家政理學研究會
家政理學
金澤文庫
神奈川縣圖書館報
カナモジカイ
カナノヒカリ
雅文會
昭和詩文
鎌田共濟會
鎌田共濟會雜誌
觀音膽仰會
觀音
極東福音社
子供の學園
組合金融研究會
組合金融
クリチック社
クリチック
經濟市場社
經濟市場
經濟展望社
經濟展望
慶嘆會
爐邊者
研究社
研究社月報
高知縣立圖書館
高知縣立圖書館報
講道館文化會
柔道
興風會圖書館
新着圖書案內
高野山時報社
高野山時報
國民精神總動員中央聯盟
國民精神總動員
國民工業學院
國民工業
國際佛教協會
海外佛教事情
齋藤報恩會
齋藤報恩會時報
實業之世界社
實業之世界
社會教育會
社會教育
尺貫法存續聯盟
昭和の光
修驗社
修驗
十善會
十善法窟
小學館
小學生學習新聞
消防新聞社
消防新聞
新更會
新更
人事興信所
人事週報
神變社
神變
須田寛治

週刊朝日
聖道社
聖道
專修大學經濟新聞社
專修大學經濟新聞
淺草寺教學部
觀音世界
禪の生活社
禪の生活
第一通信社
第一通信
大師教報社
大師教報
大藏出版株式會社
ビタカ
大東文化協會
大東文化
臺南圖書館
新着圖書目錄
大日本國民中學會
國民
大日本淨曲協會
淨曲新報

大日本水産會
水産界
大日本ミシン新報社
大日本ミシン新報
大法論社
大法論新聞
大連圖書館
書香
臺灣總督府圖書館
新着圖書目錄
高田定吉
東京每夕新聞
高田芳江
婦人倶樂部
寶塚文藝圖書館
寶塚文藝圖書館月報
智山專門學校圖書館
智山學報
智山公論社
智山公論
智山派宗務所
智山派宗報

千葉觀光社
觀光の千葉縣
千葉縣教育會
千葉教育
千葉縣統計協會
統計
千葉縣圖書館
千葉縣圖書館報
千葉縣聯合青年團
青年處女
千葉文化振興會
潮
中央大學々員會
中央大學々報
中央大學新聞社
中央大學新聞
朝鮮總督府
調査月報
朝鮮總督府學務局社會教育課
讀書
朝鮮總督府圖書館
文獻報國
槐の木會

槐の木
土筆社
土筆
帝國圖書館
帝國圖書館報
帝國ローマ字クラブ
ローマ字文學
遞試社
電界時報
遞信新聞社
遞信新聞
遞信たより發行所
遞信たより
土井豐
水泳
東京堂
東京堂月報
東洋協會
東洋
東寺事務所
護國
特許局
實用新案公報

特許公報
鳥取縣中央圖書館
鳥取縣中央圖書館報
富山市立圖書館
富山中央圖書館報
長野縣立圖書館
長野中央圖書館報
名古屋市立圖書館
名古屋圖書館報
濤川高之助
水産界
行方喜一
經濟知識
奈良縣立圖書館
奈良圖書館月報
成田町役場
公園綠地
成田高等女學校
校友會雜誌
成田中學校
成田の光
校友會雜誌
西宮市立圖書館

西宮市立圖書館報
日新時報社
日新時報
日本弘道會
弘道
日本のローマ字社
ローマ字世界
ローマ字日本
日本萬國博覽會事務所
萬博
日本互尊社
互尊獨報
忍頂寺務
解釋と鑑賞
野々宮茂毅
家の光
博愛發行所
博愛
哈爾濱鐵路圖書館
哈爾濱鐵路圖書館增加書目錄
被服協會
被服
兵庫縣立圖書館

兵庫縣巡回文庫增加圖書目錄

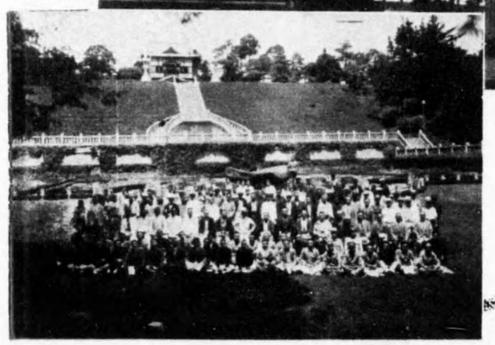
遍路同行會	三村清三郎
遍路	阿迦雲
邦文タイムス社	宮城縣立圖書館
邦文タイムス	宮城縣立圖書館月報
保險加入者協會	苑
ライフジヤーナル	無我愛
法華會	無我
滿鐵本社	森江書店雜誌部
法華	三寶
滿鐵本社	文部省圖書館講習所
協和	校友會雜誌
密教研究會	山一證券株式會社
密教研究	公社債發行償還調
水野葉舟	山形縣立圖書館
詩歌	山形縣圖書館協會報
ローマ字	山口縣中央圖書館
	山口中央圖書館報
	山梨縣圖書館
	山梨縣圖書館協會報
	謠曲界發行所
	謠曲界
	横濱市立圖書館
	横濱市立圖書館報
	よろこび會
	よろこび
	立正大學新聞部
	立正大學新聞
	隣人の友社
	隣人の友
	早稲田大學校友會
	早稲田學報

新更會

露光量違いの為重複撮影

第七回新更女子青年講習會聽講生

第九回新更夏季大學聽講生



新更會館の一部

寫眞

新更會々歌

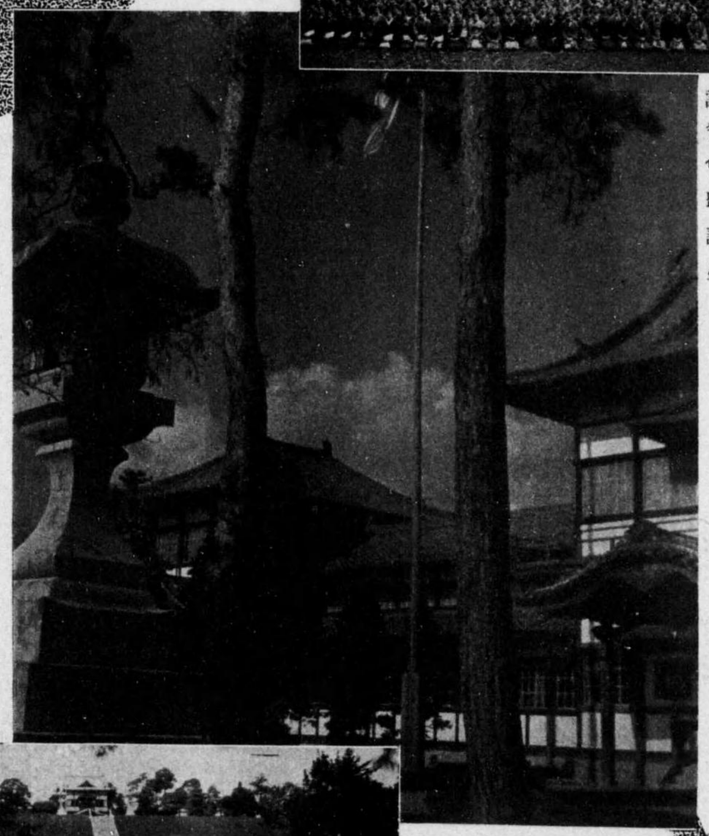
昭和十二年度新更會一覽

目次

第壹　位置並びに沿革……一九
一　位置並びに沿革……一九
二　組織並びに設備……二一
第貳　會趣旨・使命……二三
一　役員及び職員……二五
二　支部並びに會員分布狀況……二六
三　施設……二三
四　郷土資料陳列……二三
五　夏季大學講座……二三
六　講習會……二四
七　研究會……二五
八　講演會……二六
九　展覽會……二九
一〇　各種映畫會……四〇
一一　巡回文庫……四一
一二　時局對應施設……四五
一三　新更學院……四五
經費……四五
目的……四五
教育方針……四五
沿革……四五
學則……四五
行事……四七
職員……四八
年度別卒業生並びに在學生數……四九
本年度卒業生氏名……四九
生徒氏名……五〇
其他の施設……五一
會議……五二

露光量違いの為重複撮影

第七回新更女子青年講習會聽講生



第九回新更夏季大學聽講生

新更會館の一部

寫眞

新更會々歌

昭和十二年度新更會一覽

目次

第壹　位置並びに沿革……一九
第貳　組織並びに設備……二一
　一　會則及び職員……二三
　二　役員及び支部並びに會員分布狀況……二六
　三　會則・趣旨・使命……二二
　四　施設……二五
　五　郷土資料陳列……二五
　六　夏季大學講座……二五
　七　講習會……二五
　八　研究會……二五
　九　講演會……二六
　一〇　展覽會……二九
　一一　各種刊行物……四〇
　一二　巡回文庫……四一
　一三　時局對應施設……四五
　一四　新更學院……四五
第參　教育方針……四五
　一　目的……四五
　二　沿革……四五
　三　學則……四五
　四　行事……四七
　五　職員……四八
　六　年度別卒業生並びに在學生數……四九
　七　本年度卒業生氏名……五〇
　八　生徒氏名……五一
　九　其他の施設……五三
　一〇　會費……五三
　一一　議……五三

新更會々歌

男子の部

石川富士雄作歌
弘田龍太郎作曲

一

常磐の翠滴りて
曉淨き成嶺に
そゝり立ちたる會館の
甍に光り映えわたる
我等の團結　新更會

二

世に魁けし旗標
成人教育基礎固く
皇道精神高揚の
氣魄に滿ちて搖ぎなし
我等の團結　新更會

三

智德の練磨重ねつゝ
道にいそしむ春秋の
行事に理想偲ばるゝ
輩き固めを結びたり
我等の團結　新更會

四

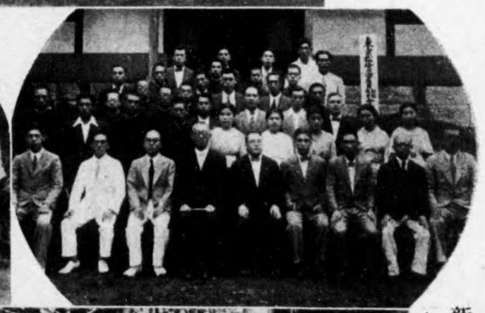
杜に籠りし鐘韻の
清爽の氣を湛へたる
胸に誓し使命もて
世路の波濤を乘り切らむ
我等の團結　新更會

↑陸軍病院慰問袋發送

↑新更學院生徒防空演習

↑小學校教員一夜講習

商店員一夜講習↓



新更學院卒業生
←（昭和十三年三月卒業）

↑國防婦人會員一夜講習

女子の部

一

濃き常盤木に圍まるゝ
甍に光映ゆるなり
成田の岡に呱々のこゑ
あげし我等の新更會

二

叡智の鏡淨めつゝ
思想の波を乘り切らむ
皇道精神顯揚の
旗をかざせる新更會

三

清く育ちし少女子の
衿恃を高く抱きつゝ
婦德を磨き精進の
道に輝やく新更會

四

杜をわたれる鐘の音を
胸に湛ふや爽やかに
誓ひも固き使命もて
進む我等の新更會

あげし我等の新更會

二

叡智の鏡淨めつゝ
思想の波を乘り切らむ
皇道精神顯揚の
旗をかざせる新更會

道に輝やく新更會

四

杜をわたれる鐘の音を
胸に湛ふや爽やかに
誓ひも固き使命もて
進む我等の新更會

昭和十二年度 新更會一覽

位置

千葉縣印旛郡成田町成田一番地成田山新勝寺境内ノ北部　（電話 成田一二三四番）

沿革

本會ハ成田山經營ニ屬スル成人教育事業ニシテ現貫首荒木僧正ノ發意ニ依リ昭和三年六月創立、現地ニ存置セラレタル舊千葉縣物産陳列館建物ヲ改造シテ會館トナシ同時ニ同猊下本會ノ總裁ニ推戴セラル、同八年五月新更學院設置、同十年七月弘誓寮新築落成今日ニ至ル

設備

敷地一、八〇〇坪・會館ハ本造二階建ニシテ階上ハ講堂階下ハ鄉土資料陳列場並ビニ新更學院教室、此ノ坪數二四七・五坪・弘誓寮ハ木造二階建ニシテ階上ハ靜觀室・會議室・總裁室・應接室・講師室・宿直室・圖書室・醫務室・階下ハ合宿講習室・食堂・事務室・炊事室・小使室・洗面所・浴室等ニテ此ノ坪數三二八・五坪

目的

皇國傳統ノ健全ナル思想ト鞏固ナル宗教的信念ノ下ニ國民精神ヲ作興スルヲ主眼トス

組織

役員	會員數
總裁一名・會長一名・理事十名・評議員若干名・主幹一名・幹事三名（内一名常任）・書記若干名	會員（縣内外）四、九七五・特殊會員（同）一、五五八
職員	**支部數**
	支部（縣内外）三九・支部會員四、二一六

施設

一般的施設

- 鄉土資料陳列 ｛圖書・古文書・記錄・書畫・繪馬・面其他
- 講座＝夏季大學講座
- 講習會 ｛成人教育講習會・定期合宿講習會・一夜合宿講習會
- 特殊講習會
- 巡回文庫研究會・俳句會・短歌會・詩會・小品文會・謠曲會・詩吟會
- 講演會 ｛本部講演會・支部出張講演會
- 展覽會＝書道展覽會
- 圖書 ｛新更（月刊機關誌）ノ刊行・一千年祭奉讃號刊行・修養圖書・「パンフレット」「ポスター」・「リーフレット」ノ刊行
- 巡回文庫 ｛回付十三團體・閲覽人員二、八七三人・閲覽冊數四、五一二人
- 其ノ他＝建國祭・灌佛會・奉仕作業

時局對應施設

- 出征軍人家族慰問 ｛印旛・香取・山武・千葉・君津ノ五郡・千葉縣下支部所在地・茨城縣下支部所在地＝稻敷・北相馬ノ二郡
- 國民精神總動員講演會 ｛千葉・茨城・埼玉三縣下三十九支部六十餘回
- 國民精神總動員講演聽講十二回
- 成田山開基一千年祭主催・新更學院職員生徒聽講
- 時局映畫大會（出征軍人家族慰安ニユース映畫）
- 國民精神總動員强調教育映畫大會
- 陸軍病院慰問文庫回付
- 佐倉・習志野・國府臺・千葉・下志津ノ五病院ヘ不動尊・埴生神社ヘ戰勝祈願
- 新更學院職員生徒戰勝祈願ノ爲香取神宮ヘ徒歩强行
- 出征將兵慰問・栗ノ必勝煮獻納
- 新更學院職員生徒武運長久祈願ノ爲明治神宮・靖國神社其ノ他ヘ旅行
- 佐倉陸軍病院傷病兵慰問
- 出征將兵歡送迎
- 戰死者町葬參列燒香
- 其ノ他

設

新更學院

沿革	
昭和六年六月創立	
同八年十二月本縣知事ヨリ設置認可アリ	
同十年十二月文部・陸軍兩省ヨリ青年學校ト同等以上ノ認定アリ	

設備	新更會館階下ノ一部ヲ教室ニ充當シテ授業ヲ行フ
目的	德性ヲ涵養シ地方有爲ノ人材ヲ養成スルヲ目的トス
修業	入學資格 高小卒業程度 修業年限 壹ケ年

職員	院長	荒木照定
	主幹	澤田五郎
	職員	一〇名
卒業生數	卒業回數	七
	卒業生數	二〇六
在學生數	昭和十二年六月末現在	四七

總裁 會長 主幹

成田山貫首大僧正　荒木照定
宮崎廣
澤田五郎

經費

昭和十二年度決算額　二八、八七八・四八圓

新　更　會

第壹　位置並びに沿革

一　位　置

新更會は、當山境内の北部に在り、東は公園の山林地帶、西は境内に接し、南は公園の勝景に臨み、北は成田町土屋を瞰下し、眼界遠く開けて、一望數里の田圃を見渡すことを得る當山第一の高地に位し、高燥閑雅で實に成人教育・社會教育の道場として、將又一般修養の殿堂として、絶好の位置を占めてゐる。

二　沿　革

本會は、現成田山貫首荒木照定僧正の發意によるものであつて、僧正は常に社會教育の必要なる事を痛感せられ、昭和三年二月六日當時の檀徒總代であつた關川博道・山内平治郎古矢大助・小野寺弘・諸岡勝太郎の諸氏、及び石川甚兵衛・高津親義氏等と協議の結果、茲に其の要望を實現することに決し、成田町の有力者三十一人を招いて、二月九日成田圖書館樓上に於て發起人會を開き、滿場一致社會教育を目的とする會の設立を可決し、次いで、會名の選定、會則の起草、會員の募集、其の他必要なる事項の處理に關しては、關川博道氏・石川甚兵衛氏等の前記七名を特別發起人として、これに一任することにした。

會名の選定に就いては、意見の百出を見たが、衆議容易に決せず、三月一日に至り、御本尊不動明王の御寶前に於て靈籤を拜受したところ、

第十大吉

舊用多成破　新更始見財　政求雲外望　枯木遇春開

に接したので、衆議一決「新更會」と定めた。

かくて昭和三年六月五日、創立總會開催の結果新更會は創立せられ、現地に存置せられたる舊千葉縣物産陳列館建物を改造して會館とした。

昭和三年六月六日、創立當時事務主任として諸般の事務を擔當した高津親義氏は、後任者佐々木祖門氏に事務引繼を行つた。

昭和五年十二月二十五日、理事會開催、佐々木祖門氏辭任し、神崎照惠師適當なる後任者選定まで、事務を擔當することになつた。

昭和六年一月二十五日、理事會開催、左記職員を設置した。

主幹　澤田五郎氏
幹事　神崎照惠師・諸岡市郎左衛門氏・渡邊和一氏
（內、神崎照惠師を常任幹事とす）

昭和六年三月、從來機關紙として發行し來つた新聞紙型の「新更」を雜誌型のものに改めた。

昭和六年六月六日、本會の精神に基き、地方青年に、日本國民としての智德を涵養させる爲め、新更學院を開設した。

昭和六年十一月、本會は其の目的達成の爲め、春に青年講習會、夏に夏季大學を開催して來たが、未だ女子に對する施設がなかつた爲め、玆に第一回女子講習會を同月二十一、二十二、二十三日の三日間に亙り開催し、これから毎年これを行ふことにした。

昭和七年八月、從來臨海圖書館、文庫貸出し等、隨時文庫の運用を爲し來つたが、本年度から各地支部組織の完成に伴ひ、巡回文庫部を設置し、各支部に右文庫を貸出して廣く會員にこれが利用の便を圖ることにした。

昭和八年五月二日、曩に設立された新更學院は、本日千葉縣知事岡田文秀より正式の認可を得た。

昭和八年十月、小學校に於ける圖畫教育の向上を圖り、兒童の美意識を陶冶すると共に、本會の感化を廣く一般の小學兒童にも普及させる目的を以て、同月一日から十五日まで童畫展覽會を開き、爾來毎年開催することにした。

昭和九年十月、書道の奬勵を爲し、併せて日本精神涵養に資する爲め、書聖弘法大師の千百年遠忌を記念として、同月十五日から二十三日まで書道展覽會を開き、爾來毎年開催することにした。

本會には從來合宿道場がなかつた爲め、合宿講習の如き場合には不便を感ずることが多大であつたが、昭和九年秋に右道場起工、同十年三月落成、總裁猊下これを「弘誓寮」と名付けて同二十日より之を使用した。

昭和十年七月、右「弘誓寮」落成により、爾來新更會各支部を始め、各種團體の講習會を弘誓寮に於て、隨時行ふことにした。かくて現在會員數六、五三三名、支部數三九、月刊雜誌「新更」發行部數七、〇〇〇に達した。

昭昭十年十二月、新更學院は同月三日附を以て、陸軍・文部兩省令第一號第一條第一號の規定により、青年學校と同等以上であることの認可があつた。

昭和十二年六月三日、第五回評議員會に於て理事十名となつた。

第貳　組織並びに設備

一　趣旨・使命

本會の趣旨・使命は左の如し

新更會を組織して

荒木照定

近時外來思想の浸潤漸く著しく、社會相には種々の波紋を畫き、人心は極度の動搖と、不安とを感ずるに至れり。此の動搖と不安とに對し、世の先覺者は、極めて眞面目に、邦家の前途を憂慮し、これが對策として『宗教の必要』を叫ぶもの、是れ亦漸く多きを加ふるに至れり。

『宗教の必要』は、敢て今日に限れるにあらず。人生と宗教、絶對に不可分の關係にあるものなるが、只現時は異常なる思想的刺激を受け、その之を懇ふるもの、特に甚だ急なるのみ。曾て我國には、或は政治的に、或は武力を以て、或は法權によりて外來思想を防壓せんと試みたる、尊き幾多の經驗を有せり。然も今日の情勢は、何の威力を以てするも、到底其の不可なるの結論に到達し、遂に『思想には思想を以て抗する。外なしと、識者間の輿論殆んど一致して、玆に『宗教の必要』を高唱さるゝに至れり。

明治維新以後に於ける我國は、特に歐米文物の移入に專らにして、深く內容の適否を顧みるの暇なく、新を逐ひ、奇に走り、國情の如何を省みず、一掃的に舊文明を破壞して、徒らに外來文明の模倣にのみ急なりしの感ありき。其流弊は、今日に至りて事新らしく『建國精神の顯揚』及び『宗教の必要』を絶叫せざるを得ざる立場に至りしを悲しむ。然れども先覺者の既に此に氣附きたるは、恰も山巔に達したるもの、先づ旭光を拜するが如く、一道の光明地上を照らすも、蓋し甚だ遲きにあらざるべし。然も此等の叫びは、聲尙微にして一部の有識階級に限られたるの感あり。此に於て吾等は自ら其力の甚だ弱少なるを知ると雖も、一片の丹心自ら禁ずる能はず、此叫びを滿天下に徹底せしめ、以て人心の不安と、社會の動搖とを除去し、轉一歩更に創造の世界へ、其心境を進ましめんと希ふに外ならず。

今回吾等の『新更會』を組織せる本旨は、實に此に在り。而して世に思想善導を目的とせる團體は、其數甚だ多し。今吾等の『新更會』も、蓋し其一ならんのみ。只本會は、單に講話・講演、若しくは宣傳雜誌發刊等を專旨とする機關にあらず。又新たに所謂社會事業を創設せんとするものにあらず。要は會員各自、靜思反省・實踐躬行、以て現代社會の純化淨化に資せんと欲するのみ、特に記して本會々員諸氏に告ぐ。

昭和三年五月中浣

新更會の使命

總裁　荒木熙定

○

本年二月來創立準備に取り掛り、去る六月五日成田圖書館樓上に於て、盛大なる發會式を擧行したる、我新更會の使命に就き、一言を費したい。

現今我國の世相が、頗る不安の狀態に陷りつゝあることは識者の等しく痛歎する所である。然も此事が眞に國民意識として、國民の總意に上つて居るや否や、甚だ疑なきを得ない。

曾て我國が明治維新以來、歐米文物の移入に力を致し、上下擧つて今日の文化を實現せしめ、今日の富强を養成した。之れは云ふまでもなく、全國民の向ふ所を明かにし、全國民の總意が、同一方向に一致し、然も夫れが確立不動の精神を以て一貫した、卽ち全國民の努力の賜であると信ずるのである。

然るに明治の末葉により今日に至るの間、此國民意識の上に、甚だ鮮明を缺き、一種の暗影を生じ來つた感がある。爲めに人心漸く弛緩倦怠の狀を呈し、其當然の結果として、倨傲自尊の風を生じて來た。其間隙に乘じて、外的刺激は近時彌々强烈を加へ、內的思想は漸次惡化し、遂に今日の如き異常なる、世相の動搖を見るに至つた。

此時に際し、畏くも　今上陛下には、朝見式の際、「創造ニ勗メヨ」との御詞を下し賜はつた。此御詞は實に現代及び將來の、我國民の向ふ所を明かに御示しなされた、誠に尊い御詞である。卽ち現今の我國は、正に模倣時代より、一歩創造の時代に入り來つたのである。故に吾人は大に此氣運を釀成し、助長し、徹底せしめて、以て國民意識の嚮ふ所を明かにし、社會人心の不安を除去して、玆に新日本の文化を創造建設し、一は以て全國民と與に、永く其慶に賴ることを勗めねばならぬ。

是れ吾々が本會を設立したる第一使命である。

○

我國は東洋の一孤島、永く蓬萊宮裡の甘夢を貪つて居た。然るに現代文明は之を速度文明とも稱すべく、特に交通機關の發達は、陸上に、海洋に、空中に、異常の進歩を促し、今や我國も亦歐米文物の中心地と接近し、如何なる寒村僻邑と雖も、直ちに其刺戟と影響を受くるに至つた。

我國の現狀は實に斯くの如くなるも、然も吾人の實際生活は、彼等の文明と猶ほ相當の隔りがある。此の隔りこそ、我社會相に種々の波紋を畫かしめたる、最大なる基因であると信ずる。

果して然らば此間の融合を計り、彼の長所美點を取り入れて、我實際生活と調和せしめ、接觸せしむることに務めたならば、自然相互間に理解が出來、感情の融和が生れて來るであらう。此理解と融和は、人生平和の最大關鍵で、吾人は社會人心の不安と、動搖とを一掃する爲めに、此點に深甚の考慮を拂はねばならぬ。

而して其目的を達するには、何としても教育の力に俟つ外はない。現今我國の學校教育は、公私共其完備に全力を竭しつゝあるは、吾人の大に意を强うする所である。然も吾人は尙此基本的教育機關のみを以て、滿足することは出來ない。之が補助機關として圖書の運用發達、夫れと相俟つて成人教育、其他の方法により、最も迅速に、最も誠實に彼我兩者の調和、實際生活の向上を策し、玆に新たなる文明の建設、創造に務めんと欲するものである。

是れ本會の國家社會の爲めに盡さんとする、第二の使命である。

更に今一つの問題がある。夫れは『宗教的信念の培養』である。現代我社會人心の動搖は、人間として確乎たる信念なく、浮草の風に隨ふ如く、安定を得て居らぬからである。其精神の動搖不安は、宗教的信念に住し、宗教的信仰生活を營む外、人生を光明の道途に導き、不安を除去するものはない。

此信仰問題に就ては、我國の現狀甚だ寒心に耐へない。殊に文明國としての我國民の多數は、彼の歐米諸國民に比して、此點遺憾ながら頗る遜色がある。

是れ本會が懷ける、第三の使命である。

○

以上の三使命を當面の喫緊問題として、本會は生れ出でたのであるが、更に一言すべきことは、我國の從來採り來れる子弟の教養は、所謂縱の教養である。此縱の教養訓練より、漸く缺陷を現はし來りたる現今の我學校教育に、此際更に橫の教養訓練に力を致し、以て其缺點を補ひ、玆に文化の進運と、現代の要求に副はんとする、卽ち本會の設立が夫れである。（創立總會挨拶筆記）

一一會則

第一條　本會ハ皇國傳統ノ健全ナル思想ト鞏固ナル宗教的信念トノ下ニ國民的精神ヲ作興スルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ新更會ト稱ス

第三條　本會ハ第一條ノ目的ヲ達成スル爲メニ左記事業ヲ行フ

一　合宿講習會ノ開設　會員相互ノ精神的團結向上ノ爲ニ指導者ト會員トノ寢食ヲ共ニスル講習會ヲ每年二回以上開催ス